

制 編 (四)		修業年限	定員	學年	學級數	現在生徒數	合計
本科							
四	簡年	六〇〇名	第一學年 第二學年 第三學年 第四學年	三 三 三 三	一五〇 一五四 一四五 一四三	五九二	

自同	十年四月至同	十三年三月	同	片山	片山
自同	十一年十月至同	十三年三月	同	青島	青島
自同	十二年四月至同	十三年三月	同心得	寺戶	寺戶
自同	九年九月至同	十四年三月	教諭	大島	大島
自同	十一年五月至同	十四年三月	同	井上	井上
自同	十三年三月至同	十四年三月	同	飯田	飯田
自同	十二年三月至同	十四年三月	同	鈴木	鈴木
自同	十三年七月至同	十四年三月	同	鈴木	鈴木
自同	十三年三月至同	十四年三月	校長兼教諭	伊藤	伊藤
自同	十一年五月至同	十四年九月	教諭	五藤	五藤
自同	十四年七月至同	十五年四月	同	鈴木	鈴木
自同	十年四月至同	十五年四月	同	橋本	橋本
自同	十四年四月至同	十五年四月	同	井口	井口

自同	一月至同	七年七月	教員	江島	江島
自同	七年四月至同	九月	同	伏島	伏島
自同	五月至同	九年十一月	同	岩崎	岩崎
自同	九月至同	十年十一月	同	中村	中村
自同	十月至同	八年三月	同	淺野	淺野
自同	十月至同	十年三月	同	大野	大野
自同	八年五月至同	十二月	書記兼教授囑託	武田	武田
自同	九月至同	九年三月	囑託	山田	山田
自同	十月至同	十年七月	教諭心得	木村	木村
自同	九月至同	十一年一月	教諭	赤井	赤井
自同	五月至同	十年十二月	囑託	高梨	高梨
自同	十月至同	十一年三月	同	神代	神代
自同	九年五月至同	十一年五月	同	山本	山本
自同	八年五月至同	十二年一月	同	秋元	秋元
自同	八年五月至同	十二年三月	同	神谷	神谷
自同	八年五月至同	十二年三月	同	松平	松平
自同	三年四月至同	十二年三月	同心得	三浦	三浦
自同	十年六月至同	十二年三月	同心得	近藤	近藤
自同	十二年五月至同	十三年二月	教諭	荒川	荒川

五、敷地

敷地 (實測面) 數		建物總坪數	
內譯	敷地 (實測面) 數	內譯	建物總坪數
建築用地坪數	一五五〇、〇〇〇	校舍總坪數	六五〇、五〇〇
運動場坪數	一二一五、〇〇〇	寄宿舍總坪數	六九、〇〇〇
空地坪數	一五〇六二、四九		
	三二七一、二四九		七一九、五〇〇

六、現在生・卒業生・大正十四年度入學志願者及入學者・郡市町村別

郡市町村	大正十二年		大正十五年	
	現在生	立	計	入十五年同入學者
郡				
市	二四九	七三三	九七六	九二
町				
沼津市	二九	四六	六五	一一
片濱村	二〇	四七	七	一〇
原島村	一九	一九	二七	一六
浮根村	一	二七	三九	四
鷹根村	二	八六	一〇四	九
金岡村	一	四六	六四	七
大岡村	二	六一	六〇	一三
靜浦村	二	六一	六〇	一三
計	三三〇	一〇四〇	一三三〇	三三〇

富士岡村	五〇〇	〇	〇	〇	〇	〇
原里村	〇	〇	〇	〇	〇	〇
印野村	〇	〇	〇	〇	〇	〇
玉穂村	〇	〇	〇	〇	〇	〇
御殿場町	〇	〇	〇	〇	〇	〇
高根村	〇	〇	〇	〇	〇	〇
須走村	〇	〇	〇	〇	〇	〇
北郷村	〇	〇	〇	〇	〇	〇
小山町	〇	〇	〇	〇	〇	〇
足柄村	〇	〇	〇	〇	〇	〇
賀茂郡	〇	〇	〇	〇	〇	〇
田方郡	〇	〇	〇	〇	〇	〇
富原郡	〇	〇	〇	〇	〇	〇
庵原郡	〇	〇	〇	〇	〇	〇
安倍郡	〇	〇	〇	〇	〇	〇
清水市	〇	〇	〇	〇	〇	〇
静岡市	〇	〇	〇	〇	〇	〇
志太郡	〇	〇	〇	〇	〇	〇
榛原郡	〇	〇	〇	〇	〇	〇

年 度	入學志願者				入學者			
	年一	年二	年三	年四	年一	年二	年三	年四
大正十一年度	二二九	二二五	二二五	二二九	一六三	一六四	一六四	一六七
大正十二年度	四〇	四〇	四〇	四〇	一九四	一九四	一九四	一九四
大正十三年度	二二七	二二七	二二七	二二七	一五九	一五九	一五九	一六六
大正十四年度	二二七	二二七	二二七	二二七	一五九	一五九	一五九	一六六
大正十五年度	三三〇	三三〇	三三〇	三三〇	一五〇	一五〇	一五〇	一五〇
較 年 比								

縣 引 濱 磐 周 小	計	年一	年二	年三	年四
小笠原郡	二	二	二	二	二
周智郡	一	一	一	一	一
磐田郡	一	一	一	一	一
濱名郡	一	一	一	一	一
引佐郡	一	一	一	一	一
縣外	五九三	五九三	五九三	五九三	五九三
計	一三〇三	一三〇三	一三〇三	一三〇三	一三〇三

大分類	人員	中	分	類
農 業	一二二	農 耕、 畜 產、 蠶 業	農 業	農 業
水 產 業	二五	漁 業	漁 業	漁 業
鑛 業	〇	探 採 石 取	探 採 業	探 採 業
工	八七	窯 屬 工 機 械、 器 具、 製 造 金 屬 工 機 械、 器 具、 製 造 化 學 工 織 維 工 紙 工 皮 骨、 角、 甲、 羽 毛 品 類 製 造 業 木 竹 類 ニ 關 ス ル 製 造 業 飲 食 品 嗜好 品 製 造 業	窯 屬 工 機 械、 器 具、 製 造 金 屬 工 機 械、 器 具、 製 造 化 學 工 織 維 工 紙 工 皮 骨、 角、 甲、 羽 毛 品 類 製 造 業 木 竹 類 ニ 關 ス ル 製 造 業 飲 食 品 嗜好 品 製 造 業	窯 屬 工 機 械、 器 具、 製 造 金 屬 工 機 械、 器 具、 製 造 化 學 工 織 維 工 紙 工 皮 骨、 角、 甲、 羽 毛 品 類 製 造 業 木 竹 類 ニ 關 ス ル 製 造 業 飲 食 品 嗜好 品 製 造 業
學第	年一	一	〇	〇
學第	年二	一	〇	〇
學第	年三	一	〇	〇
學第	年四	一	〇	〇
計	一 二 二	一 〇 〇	一 〇 〇	一 〇 〇

一〇、父 兄 職 業 別

一七九

種 別	十三年	十四年	十五年	十六年	十七年	十八年	十九年	計
平均身長	四、五三	四、七九	四、九一	四、九五	四、九〇	四、八七	五、〇〇	四、五三
平均体重	八、五八	一〇、一三	一〇、八四	一〇、二二	一〇、八一	一〇、三三	一〇、〇〇	九、五八
平均胸圍	二、一八	二、三五	二、四七	二、五〇	二、五七	二、六六	二、六四	二、四七
發育概評	甲	乙	丙	甲	乙	丙	甲	乙

九、身體狀況 (大正十五年四月)

種 別	卒業者 (八)							
	卒業者數	結婚者	上級學校入學	師範學校二部	地方裁縫學校	教員	死亡	其他
管 轄	一三〇三	六六六	五三	一四	二六	一	七八	四五五
大正十三年	九	四	二	〇	一	〇	三	七
大正十四年	九三	一	二	六	四	〇	一	五六
大正十五年	一三〇	〇	一四	五	五	〇	〇	一〇六
大正十六年	一三七	〇	二二	一	〇	〇	〇	一〇四
大正十七年	一七六	〇	一	〇	〇	〇	〇	七九
計	一三〇三	六六六	五三	一四	二六	一	七八	四五五

種 別	營 養											
	甲	乙	丙	正視	兩眼	一兩眼	折近視	折遠視	及遠視	力正視	視正視	脊柱
營 養	一〇四	一〇〇	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
脊 柱	九四	九三	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
視 正視	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
兩 眼	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
一 兩眼	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
折 近視	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
折 遠視	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
及 遠視	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
力 正視	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
視 正視	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
色 神異常	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
眼 疾	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
聽力障害アル者	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
耳 疾	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
齲齒アル者	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
其他扁桃腺	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
疾病肥大	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
異常其口蓋破裂他	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四
計	一〇四	一〇〇	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四	一四

一七八

計	別所宿徒生		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	合計	無職業	備用人	家事者	其他有業者	自由業													
	通學	寄宿舍										計	無收職業	家事者	其他有業者	其他	藝術家	記者	法務者	醫務者	醫務ニ關スル業	法務ニ關スル業	記者著述者	藝術家	其他業者
一五〇	四	一二六	一五〇	一五四	一四五	一四三	五九二	三八	二	二	五九二	一八	二〇	一	二	八二〇	二二四								
一五〇	四	一二六	一五〇	一五四	一四五	一四三	五九二	三八	二	二	五九二	一八	二〇	一	二	八二〇	二二四								
一五〇	四	一二六	一五〇	一五四	一四五	一四三	五九二	三八	二	二	五九二	一八	二〇	一	二	八二〇	二二四								
一五〇	四	一二六	一五〇	一五四	一四五	一四三	五九二	三八	二	二	五九二	一八	二〇	一	二	八二〇	二二四								
一五〇	四	一二六	一五〇	一五四	一四五	一四三	五九二	三八	二	二	五九二	一八	二〇	一	二	八二〇	二二四								
一五〇	四	一二六	一五〇	一五四	一四五	一四三	五九二	三八	二	二	五九二	一八	二〇	一	二	八二〇	二二四								
一五〇	四	一二六	一五〇	一五四	一四五	一四三	五九二	三八	二	二	五九二	一八	二〇	一	二	八二〇	二二四								
一五〇	四	一二六	一五〇	一五四	一四五	一四三	五九二	三八	二	二	五九二	一八	二〇	一	二	八二〇	二二四								
一五〇	四	一二六	一五〇	一五四	一四五	一四三	五九二	三八	二	二	五九二	一八	二〇	一	二	八二〇	二二四								

計	公務	交通業	商業	業											
				被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業
九六	四四	一八七	九六	被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業
九六	四四	一八七	九六	被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業
九六	四四	一八七	九六	被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業
九六	四四	一八七	九六	被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業
九六	四四	一八七	九六	被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業
九六	四四	一八七	九六	被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業
九六	四四	一八七	九六	被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業
九六	四四	一八七	九六	被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業
九六	四四	一八七	九六	被服身ノ廻リ品製造業	土木建築業	製版印刷、製本業	學藝品裝飾品製造業	瓦斯電瓦及天然ノ利用ニ關スル業	其他ノ工業	物品販賣業	媒介周旋業	金融保險業	物品貸業	旅館飲食店浴湯業	其他ノ商業

支 出	經 常 部	總額	俸給及手當	雜給	校					費 其 他	
		三三、三九六、五〇	二七、四四四、〇〇	一、九八六、〇〇	備品費	圖書費	消耗品費	通信運搬費	印刷費		雜費
					八五〇、〇〇	三〇六、〇〇	六七二、〇〇	一三七、〇〇	八一、〇〇	六八、〇〇	二九二、五〇

修繕費	臨時部	總額	自轉車	置場	建築費
		五〇、〇〇			

名稱	奉安所	普通教室	特別教室	校長室	事務室	教員室	應接室	器械室	玄關	生徒入口	昇降口	宿直室
數室	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
數坪	一、五〇	二四四、〇〇	一五三、〇〇	一一〇、〇〇	〇〇	二〇〇、〇〇	四、〇〇	一一〇、〇〇	一、五〇	二四、〇〇	三、七五	

小使室	購買室	倉庫	湯沸所	井戶屋形	昇降口	同便所	生徒便所	渡廊下	廊下	寄宿舍	同倉庫	自轉車
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三、七五	一、五〇	一、〇〇	四、五〇	二、〇〇	二、七五	二、二五	一五、五〇	一〇、〇〇	一三、〇〇	一一〇、五〇	四、五〇	七、〇〇

一八三

一一、經費

建築物

寄 宿 生 費 用	授 舍 食 諸 日 學 雜 計	種 別	途中轉入退學者 (度年四十)				種 別	轉 入 學 者	轉 出 退	病 氣 事 故 死 亡 者	計
			第一學年	第二學年	第三學年	第四學年					
料	業	費	費	費	費	費	費	費	費	費	
四、〇〇	一、〇〇	一、五〇	一、八五	三、〇〇	二、〇〇	二、五〇	二五、八五	一六	一五	五五	
一ヶ月平均											
出	席	步	合	(度年四十正大)							
第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第一學年	第二學年	第三學年	
九、〇五	九八、一三	九八、四八	九七、三九	九八、二六	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	
合											
二四	一	二	五	六							

一八二

校内動靜

(自大正十四年三月至大正十五年六月)

三月一日 伊藤先生長逝せらる。職員及生徒總代弔問す。

三月二日 學藝品展覽會。

三月三日 沼津驛に伊藤先生の御遺骸を見送る學藝品展覽會。

三月八日 井上先生京都市立第二高等女學校に轉任せらる。

三月十九日 濱道東方寺に於て故伊藤先生の追悼法要を執行す。

三月卅一日 鈴木つる。鈴木きよ兩先生退職せらる。

四月四日 井口、塚本二先生著任せらる。

四月十八日 大島先生退職せらる。

四月廿二日 皇后陛下を奉迎す。

五月三日 雜賀先生着任せらる。

五月七日 井出先生並に須賀先生著任せらる。

五月廿二日 皇太子殿下 關西より還啓につき沼

五月廿七日

六月一日

六月廿五日

七月八日

七月十七日

七月廿一日

七月廿六日

九月一日

九月十二日

九月十五日

九月十六日

九月十八日

十月七日

十一月三日

津驛に奉送す。

海軍記念日につき香貫山を越え靜浦方面に遠足す。

各學年各地方に修學旅行に出發す。

地久節祝賀式後、母の日會を催す。

桃郷に於て水泳を開始す。

水泳終了。

四年生有志富士登山、五湖巡りに出發す。

右旅行隊歸校す。

鈴木軍一郎先生著任せらる。

校長五十嵐先生御轉任につき、告別式舉行。

新舊の校長先生を停車場に送迎す。

新校長小林先生の新任披露式あり。

本縣視學委員石川克己氏本校を視察せらる。

本縣内務部長長井喜大夫氏來校視察せらる。

陸上大運動會。

十月三十日 二年生吉川美彌氏神宮競技に出場の爲上京す。

十月卅一日 右吉川美彌氏神宮競技に出場走高飛に参加す。

十一月十日 本日より勤儉強調週間。

十一月十三日 三島在澤地龍澤寺に遠足す。

十一月廿一日 日枝神社に 東宮妃殿下 御安産の祈願式を舉行す。

十二月七日 内親王殿下 御降誕祝賀式を舉げて後、日枝神社に參拜す。

一月十三日 徒歩研究家秋山重之氏の徒歩に關する。講話及實演ありたり。

一月十五日 横須賀海兵團特務少尉中村豊治氏の日本海々戦に關する講話ありたり。

一月十九日 本縣視學石井午二氏來校視察せらる

一月廿六日 本縣中等學校視學委員濱松高等工業學校教授安達禎氏來校視察せらる。

一月廿八日 三、四年生朝日新聞社の訪歐四勇士の講演を國技館にて聴く。

二月十五日 本日より勤儉強調週間。

二月二十日

三月九日

三月十日

三月十六日

四月五日

四月二十日

四月廿一日

四月廿二日

四月 日

五月二日

五月五日

五月十七日

五月十八日

五月廿七日

六月十日

玉澤村妙法華寺へ遠足。

本縣中等學校視學委員志田晴雄氏本校を視察せらる。

陸軍記念日。

沼津警察署警部補村松氏來校警察に關する講話ありたり。

始業式、入學式。

創立二十五周年記念祝賀式、追弔式

記念展覽會、記念學藝會。

記念展覽會、記念音樂會

橋本先生退職せらる。

富士高等女學校庭球選手來校、本校選手と庭球戦をなす。

佐藤先生着任せらる。

縣主催縣立中等學校主席教諭協議會に鶴矢先生出席せらる。

同 右

海軍記念日、小林校長より海戦に關する講話ありたり。

李玉垢殿下國葬。

六月十一日

瀧恭三氏の御茶についての講演ありたり。

運動會

十四年度四年 鶴田 華子

天氣晴朗、グラウンドにひるがへる、萬國旗も勇しく、沼津高女の校庭は歡びに満ちてゐる。午前八時半花々しい運動會は開始された。第一は學年競走の一走高飛……ハチマキ、ズロース姿の雄々しく、優しい選手が現れる。各學年が自己の級の選手を應援する拍手は會場をゆるがす許り。走高飛ではずつと勝利を得通して來た四年も最後の年に、恐るべき強敵手が二年に現出した爲、遂に敗れてしまつた。一年の可愛いダンスも濟んだ。次は私達の八十米競走である。

四年で一番小さい山本さんが体に似合はぬ意外のスピードを以て走られたのに、驚いた。一年生の皇國運動は實に氣持よく奇麗であつた。全校の生徒が朝禮にこの体操をする時もこんなにきれいに出来るのだらうかと意外に思つた。數多の体操中一番勇しく感ぜられた

のは二年の運動器具を用ひてするのであつた。高い台から飛び下りる際誰もがひとしく胸をはつて身を伸ばすのを見ると、私達迄が胸をピンと思はず張つて見る氣に成る。學年競走のハードルは最後のハードルで足が違つた爲め、四年は惜しい所で二年に越されてしまつた。學年競走中の見ものリレー四年一同が頼みとするリレーの番は來た。生徒は皆總立となつて、應援の拍手を選手の頭上にあびせる。スタートに立つ選手の心は？ 突然ビストルは鳴る。スタートは切られた。お、先頭は？ 又もく二年生だ。二年生の顔色には喜びの色がみなぎつてゐる。四年生は手に汗握つて只祈り續けた。リレーの終番の走者は四年も二年も強者だ。常にも長いコンバスの所持者北川さんは今日は殊に長く見える。江藤さんは最後のスピートを出して必死に戦はれた。而しくその努力も空しく、テップは二年の胸に切られた。二年の喜びは絶頂に達した。必死を盡して遂に破れた選手の方達の心の歎きは？ 私達には想像しつくせぬ深刻な歎を小さく胸に秘めてゐられる事だらう。三年間優勝旗ホルダーとして光彩を放つた四年に、十點以上の差を以て打勝つた二年生

の働きこそは、實に見上げて偉大なものだ。樂隊の鳴り響く校庭を折からの夕日に照されて、輝きひるがへる優勝旗を高くかざし、花輪を持って二年生は一周す。満場拍手にゆらぐ許り、私達も嘗てはこの喜びを味つ

たのだ。四年とは何事にも心の合ふ二年が今の喜びに浸つてゐるのかと思ふと、我が事の様になつた。どうか二年生も卒業までこの歡びを續けてもらひたいとひそかに願つた。

學年對抗競技優勝調

第一學年	1	1	1	3	1	3	2	14	四
第二學年	4	4	3	4	4	2	8	37	一
第三學年	2	3	4	2	3	4	4	27	二
第四學年	3	2	2	1	3	2	6	22	三

母の日會

(大正十四年六月二十五日)

母の日會次第

開會の辭

校長の挨拶

- 1、音樂春夜の夢、櫻散る
 - 2、國語(讀誦)吉野山
 - 3、音樂月が出る故
 - 4、英語 (my doll)
- 二、三、四年有志
三年 鈴木千鶴子
一年 有 志
二年 田川美惠子

5、音楽	オルガン獨奏練習曲	二年	小栗 恒子
6、割烹		四年	増田 貴美
7、音楽	いづこゆく、出船	三年	有志
8、ダンス		一年	龜山のふ子
9、觸唱	カナリヤ	二年	服部 雛
10、理科	顔料の製造	三年	奈良橋松枝
11、音楽	船出	四年	有志
12、國語	希望(海と泉)	二年	山中 榮子
13、音楽	故郷の廢家 愛國	二年	有志
14、英語	(an old pair of slippers) 四年	原操外三名	
15、音楽	ピアノ獨奏 ソナタモツアート作曲	三年	乙竹 篠子
16、裁縫	運針實習	一年	金子ふく外十六名
17、地理	土俗地理	四年	梶本 蝶子
18、音楽	思ひ出 春の怨	二、三、四年	有志
19、國語	心の響	一年	(文)白井 清子 (歌)岡村 律子 (詩)木塚いと子

20、音楽	オルガン獨奏練習曲	三年	笹井 貞子
21、英語	(In a minute) 乙竹	三年	伴野、千秋
22、音楽	母の思ひ	三年	鴛矢 豊子
23、國語	大原御幸	四年	朗題 濱野 芳子
24、歴史	源頼朝のお話	二年	星野 文子
25、音楽	ピアノ獨奏 ソナチネカレメンテイル作曲	一年	坂本 澄江
26、音楽	合唱 子守謠 埴生の宿 二、三、四年	有志	
27、餘	興		
1、	人形病院	二年	有志
2、	若水	三年	有志
3、	因果應報	四年	有志

『母の日』會次第

(大正十五年六月二十五日)

開會の辭	胡蝶	一年	會 長
------	----	----	-----

二	談話	母 親	一西 小池 やす
三	習字		三年 土屋かほる 小野すゝ 植松とし
三	圖畫		三年 野田まつ江 吉川美彌 蛭川千敏
四	英語	英文朗讀	四年 石野谷ひで
五	理科	蝶のみち	二年 岡村 律子
六	音楽	ふるさと(二重音)	高音 稲葉もと子 低音 竹中 サワ
七	歴史	天照大神	一年 杉山 ます
八	談話	粗忽の殿様	二年 金子ふく子
九	地理	世界の人種について	三年 小宮山貞子
一〇	オルガン獨奏	やさしいマーチ	二年 白井 清子
十一	習字		一年 内村 繁子 一年 佐藤かつよ 一年 室賀 敏子 一年 小齋 春江
十一	圖畫		市川 かつ 二又川はる子
十二	家事	地質の選定について	三年 山中 榮子
十三	國語朗讀	清水	四年 中村まさ子
十四	音楽	イ數ある小路(輪唱)	二年 有 志
十五	理科	硫化水素	三年 長岡 のえ

十六	國語朗讀	子供の心	一年 仁王 道子
十七	習字		二年 小野 基
十八	教育	知覺の謬	二年 栗原 末子
十九	英語	The Fox & the Crow	四年 奈良橋松枝
十九	英語	The Fox & the Crow	二年 白石二三子
二〇	オルガン獨奏	練習曲	三年 イ 小栗恒子
二一	家事	夏の衛生につき	四年 村松はるの
二二	談話	藝術家	三年 北川 貞子
二三	習字		四年 樽井 ムラ
二四	理科	細胞の話	四年 奈良橋つや
二五	歴史	海底の白珠	四年 片岡 貴美
二六	英語	Four Dispositions.	四年 野秋万里子
二七	音楽	イ谷川の歌	二年 鹽崎 芳子
二八	地理	梅雨につきて	二年 佐々木千鶴子
二九	英語	花	三年 藤田 けん
二九	英語	花	三年 有 志
二九	英語	花	四年 平田 のぶ
二九	英語	花	一年 山田 みつ
二九	英語	花	酒井米子 大久保よし

三〇	國語 國文學と自然	四年	飯塚 しづ
卅一	ピアノ 獨奏 ソナチネ	二年	坂元 澄江
卅二	英語 英詩誦	四年	伴野千代枝
卅三	國語 三保の春	二年	大川 秀
卅四	オルガン イマーチ 奏 ロ練習曲	三年	村上美枝子
卅五	英語 The Lark and the Farmer	三年	龜田 愛
卅六	國語 自然の美 (誦)	三年	和田 あや
卅七	ピアノ 獨奏春の歌 (メンデルゾーン作)	四年	乙竹 篠子
卅八	音楽 イ森の歌 (二重唱) 峠を越えて (三重唱)	三四年	有志

神宮競技出場記

二年 吉川 美 彌

「しつかり頼むよ。
ハイ、ありがたうございます。」
「では行つて参ります。」

大正十四年十月三十日、午前九時二十分發で、沼津驛

頭に小林校長先生と井口先生とにお見送りを受け、級監高北先生お附添の下に、私は、明治神宮外苑に行はれる全國選手競技大會に出場するために旅立つた。紅葉の錦を織る箱根の山も、見る／＼過ぎた。「錦——さうだ、私は學校に錦を飾つて歸れるだらうか？」今朝講堂でお別れした風景……庭前までお見送下さつた諸先生……ブラットフォームにお立ち下さつた校長先生、井口先生が頭に浮ぶ。「吉川さん、しつかりよ。」と皆様のお勵まし下さつたお聲が耳底に強く残つてゐる。

學校の榮譽を荷ひ、静岡縣を代表して、……思へば、重い責任である。

運好くも、静岡縣で豫選の末席に入つたさて、見も知らぬ代々木の大競技場で、天下の精銳を相手とし、……不安は募るばかり。

よし、勝つても、敗るゝも、唯全力を注いで、深く戦ふ外はない。

乗合はせた同じ代々木に向ふ青年達の自慢話に、耳傾ける。

午後二時半東京驛著、省線電車に乗換へ、水道橋に

下車、豫定の神田猿樂町なる有就館に到着。本縣廳から御出張になつて居られる同宿の役員の方に、到着を届け出でて、明日の入場票「四五九番」を受けた。番號を布に書いて運動著の胸につける用意をしたりしてゐるうちに、短い秋の日はたそがれそめた、仰げば、白雲が東へ、東へと走る。

明日は快晴か。青空の下に、晴れの場所、勇ましく戦はう。胸は高鳴る。深川なる實兄が約束通り訪ねて来てくれた。明朝六時半を固くお約束して、先生に別れ。兄さんに伴れられて、バラック式の兄の家に入る。家の人々に圍まれて、久々の物語りをして、九時寝に就く。

十月三十一日、午前五時、電氣にかゝたやうに跳ね起きる。眞青な空、私はいきなり足をボンと高く上げて見る。大分軽い。急いで洋服を身につける。ピンと引きしまる感じがした。鶏卵を三つグツと呑みほす。兄さんとともに遊就館に至り、七時過ぎ、高北先生や縣の役員の方と御一緒に宿を出る。暫くして私は大競技場の前に立つた。

おい、それは想像を越えて、見る目も遙の大廣場、

ローマの昔にあつた大闘牛場を思はせる、大建築——奇麗にくしけづられた眞砂でも敷きつめられたやうに見える階圓形八百米の大トラック、その内にある緑あざやかな芝生のフィールド——周圍は掃鉢の縁(ふち)のやうな傾斜を以て、北半にはコンクリートの階段觀覽席が築き上げられ、南半は芝生で一般的の觀覽席に充てられてゐる。掃鉢の底ではそろ／＼練習が始まつてゐるが、その人々は小さく見えて顔も判然しない。あゝ、あのフィールドの一角こそは……。私は急いで運動著に着換へ、高北先生の「私はこゝから見てゐます。落着いて、しつかりおやりなさい。」とおつしやるお言葉を後に、愈々晴れのフィールドに最初の歩を印した。周囲を見ればあちらでも、こちらでも、鐵板なげにホスジャンプにそれ／＼練習に餘念がない。ふと私の眼は偉大な女武者？にふつ／＼かつた。男？さうだ少しも男の肉附と變らぬ、隆々と波打つてゐる堅さうな筋肉——これこそ世界的レコードを作つた人見絹子嬢、その人であつた。

代々木の土は一步／＼踏みつける私のスパイク下、ぐざり／＼と掘り返される。

修學旅行記

(大正十四年度)

龍華寺及久能山

一年 岡村 律子
白石 二三子

前夜

心配の心で胸はみちにけり

雨の降る音耳に聞こえて

出發

汽車は出る待ちに待つてた遠足に

喜び勇む我等を乗せて

沼津驛をけたましい汽笛とともに出發したのは恰も
午前六時。

黄金色に色ついた麥島の中を走り、白い袋をかむつ
た桃の木を横に見て、汽車はどん／＼進む。

長く続く桃島もう原に近いだらう。春の遠足に來た
松原も見える。

私も數回練習を試みてゐるうちに時は來た。
審判官がやつて來た。競技開始の宣告があつた。
「四五九番」呼ばれて私も選手の列に著いた。三回飛
んだ後、棒は一米二十種に上げられた、私の眼はじつ
と棒を見据えた。バツと砂を足につけた、……瞬間は
つと後を振り向いた飛べた。よかつた、棒はいきなり
三十種に上げられた。これは情ないことに、私には飛
んだ經驗がない、何この晴れの場所、奮然飛んで見
たが、……幾度やつても。
あゝ……やたらに土をかちつた。
本縣の深澤嬢のみは幾度か棒が上げられたが、飛び越
した。

「高飛一等四十八種静岡縣精華深澤とき子嬢」と審
判官が叫んだ時、思はずぶ／＼つと身が振へた。
省みて私は、あゝ先生方や、お友達に申譯がない。
若しお出迎でも受けたら……私の心は暗くなつ
た。が「私はまだ二年生だ、一、兩年のうち……」
と心に誓つた。

原驛だ。大勢お友達が乗る。

樂しさうに皆何か語り合つてゐる。

松原をどうして見える海はちら／＼輝き、なぎさに
は大波小波が打ち寄せて居る愛鷹山か雲に包まれて煙
つてゐる、歸りの天候が心配になる。

藁ぶき屋根の家がそうつゐるのは、田舎の家を思ひ
出させる。鈴川驛だ。まだ松原はつゞいてゐる。高い
山が雲の上に少しばかり頭を出してゐるのも氣持よい
廣い／＼水田の所々に、稲の苗が可愛くきれいに植
はつてゐる。もう富士驛についた。面白い、飯野さん
に席をゆづる。富士川の鐵橋だ。向側の橋を見ると静
岡を思ひ出す。

赤い三角のやうなのが、目のまはるやうな早さで行
きすぎる。赤れんがの大きな西洋館が見える。何かの
工場だらう。

だん／＼松原が少なくなつてたまに一本位になつた。
小島が所々に見え出した。六年の夏行つた三保の燈臺
が白く光つてゐる。

去年の夏友と一所に見にゆきし

思ひ出多き三保の燈臺

兩側に植はつてゐる可愛い櫻、所々に「櫻を愛しま
せう」と立札がある。江尻着。

一里十三町の道を歩いて龍華寺に着く。

石段を上つて寺の庭に入る。先づ目についたのは大
きな、そてつ、さばてん。話に聞いてはゐたが見るのは
はじめだ。高山先生のお墓にお参りする。お墓に。

吾人は須らく現代を

超越せざるべからず。

と書いてあつたが、何の事やらわからない。「私も
えらくなります様に」とお願ひして山を下る。

龍華寺からは右久能道と書いた立札を一々見て進む
左久能道四千六百何米と書いた立札を見たので、二足
一米として九千足ばかり歩くつもりで、太田さんとか
んせうしだす。つかれもわすれてかんせうして、七百
歩いたら久能に着いた。

お茶屋で一先づ腰を下す、楽しみにしていた旅行も
半分すぎてしまつた。いよ／＼山へ上るのだ。段を數
へる聲にぎやかに登る。

一先づかんすけ井戸の所で休む、前にきた時にはこ
うしがなかつたが、ちやんとふたが出來て車はひまさ

うだ。

また登る、ちどりに山の間の道を進む。

高い樓門右大臣左大臣がいかめしく置かれてある。其所をくぐつて、拜殿の前へ出る。朱塗のお宮、銅の廊下何となく奥ゆかしいと云ふよりきれいだ。

少し上つて本殿の前に出る、三英雄がおまつりしてあるとの神主様のお話、歴史の話を思ひ出しながら、いねいに頭を下げる。丹青の色どりもきれいに、方々にほりものが出来てゐる。

墨塗の本殿山の神木何を見ても神々しい。家康が駿府城で此の世を去ると、一たん此處へ葬り、又日光へおうつしになつたとのお話。

裏へ廻つてお墓にお参りする。神木にかこまれて静かに家康の靈はねむつてゐるだらう。

周囲は何百年かたつたやうな杉、またはもみぢ、折から吹きくる風はなんとも云へなく氣持がよい。こゝで一寸休む。それから一旦あつまり、下り始めた。ごんごん行くと、どまるにもとまれずに。寶物館までかけ下りてしまつた。

それから列を正して人数をしらべて、寶物を拜観す

る。

中組が始めに入る。寶物は代々の將軍のよろひ、手判、槍、刀、衣服、軍の時につかつたものや、すゞり時計の様な日常御使用の御道具もある、よく何百年も其のまゝでゐるものだと感心した。それから外に出て休む。もう一べんかんすけ井戸をのぞいたり、石をなげてみたりして興がつた。

「さあ今度はおりののですよ」先生のお言葉、皆はまた整列した、組長さんが人数をしらべる。

おり出すと早い。もう中腹まで来てしまつた。

下を見下すと早い人達は、もう石段を下りてしまつた。下につくと大部分の人達は来てゐた。いよゝかへるのだ。かへりは馬車と自動車、馬車十二臺、自動車一臺、それゝ分乗する。

馬車は走り出した、山の下をすぎれば今度はポプラの街道だ。車は道がわいせいかよくゆられる。

車中からはにぎやかな笑ひ聲がもれる。こうして一時間ばかりゆられて静岡へ来た。町は縣廳の所在地だけあつてなかくにぎやかだ。三十分の休みがゆるされた。皆思ひゝにおみやげを買いに行く。

やがて集る時間が来た。みんなかいさつ口の前にならぶ。フリツヂを渡つて向側へ出た。間もなく私達の乗るべき汽車はプラットホームについた。我先にと入る。私も席をとつたが、腰かける所がなく立つてゐる人も随分あつた。

汽車はプラットホームをはなれた。汽車はすゝむ。

私達はお菓子の残り等を食べ始めた。其の中汽車は江尻、おきつ、蒲原、由比、岩ぶち、富士、すゞ川、原と過ぎて沼津についた。七時に近く薄く夕べの色がたゞよつてゐた。かいさつ口を出て私達はならんだ。

それから先生の號令で禮をして別れた、或るものは五六人、或る人は二三人とかたまつて、今日ありしことを語りながら家路にいそいだ。

箱根江ノ島鎌倉方面

二年 野田 小山
龜田 山中

家——御殿場驛——

暗い／＼何處を見ても眞暗だ。黒い／＼に蔽はれてまだ眠つてゐる沼津の町を此處彼處に喜びのさわめ

きが起る。私は山村さんと楽しい希望に胸を躍らせながら「氣をつけて行つていらしつしやい」の聲を後に家を出た、停車場通りの道をわらじに固めた足も軽やかにお辨當お菓子等十日も二十日も旅行する様な氣でシャツの着がへや楊子齒磨とつめこんだ、かばんと未だ温みのある水筒とを十文字に肩に掛け、かひ／＼しい服装をした、私達の仲間がちらほらみえる。純白のカバトと眞白な足袋とが眞暗な闇の中に離れ／＼に動いて行く様にも見えた。いよ／＼電燈まばゆく輝やいた停車場に着いた、皆樂しげに今日の初旅の話で大はやしき、會ふ人毎にお互の姿を見ながら「わらじがよく似合ふわ」等と云つて笑つてしまつた皆生れて初めて「わらぢ」をはいたと云ふ連中はかりなので大さわぎ遠藤さんが「昨夜、わらぢを買つて来てねはいてみたら随分軽くて歩きよかつたのでそれをはいて家の中を飛び廻つたらお母さんにお目玉を頂戴しちやつたの」等と云つたので一同大笑ひしてしまつた吃度これが生で最初で最後の「わらぢばき」と思ふとなんとなく淋しくなる、縁におはれた鎌倉宮江ノ島の沖にかすむ富士あの勇しい軍艦の姿等語り會つてゐる中に、眞

暗な空からあやしいものがポツリ／＼降つて来た。皆の眉は一樣に八ノ字皺をよせて「まあなんていぢわるなお天気でせう」と天をにらんでつぶやく、小使さんの小父さんが「大丈夫晴れますよ」と云つたので不安氣ながらなんとなく気が休まつた。それより暫くの後洋傘片手に「わらぢばさ」の多くの姿が吸ひ込まれる様にホーム内に入つた天は我等をあはれと思つたのかも雨はやんでしまつた。其の時三時二十七分の上り列車はゴウ／＼と私達の旅路を祝つてくれるかの様に沼津驛内に入つて来た、そして約六分の後樂しみに胸を躍らしてゐる若い少女をのせて發車した、さすがに車中は静かであつた、所々から今日の樂しい想像等の囁ももれてゐた、乗り疲れた乗客の寝顔に電燈が黄色く光つてゐた。其の中に日光寫眞の様に段々と車窓の景色が浮び出て来た、汽車は山路にさしかかつたらしい、しつとりとしめつた木々が桑畑に遠くかすみ緑の野を背景に麥畑のひらかれてゐるのも次第に見え初めた。「あゝ畑が」「あゝ小川」がうつり行く景色に皆の心は目的地に着かぬうちにもう踊つてゐる様だ其の中に三島裾野も過ぎ「そろ／＼下りる仕度を始め

た、帽子をかむつてふと車窓をのぞくと富士は相憎く白い雲が掛かつてゐたので其の勇姿はみられなかつたが裾野の木立にかゝる霧の景色は何とも云はれない「さあ下りませう」との先生のお言葉に「かばん」「帽子」と大さわぎ。「御殿場／＼」とねむさうに驛夫の呼ぶ聲にホームに下りた、私達は思ひ／＼の話をしながら驛前に並び御殿場の人も加はつて一層賑やかになつた。夜のペールは静かに去り空は淡い日射しを投げつてゐる。「わらぢ」のひもを結び直して山路に向つたのは約二十分の後だつた。(野田まつ江)

箱根山の壯觀

元氣に満ちた私共百五十人の一行は御殿場口から登り始めた。雨上りなので大分道が悪い。ドロ／＼して草鞋がくひ入りさう、二、三步しか歩かない中に白足袋は眞黒になる。グチャ／＼して氣持が悪い、始めは杉の幾百年経つたのかと思へる老木や濃いそして深い森の様な所を通つて尙もドン／＼登つて行つた。登るに従つて山は薄緑、なめらかで遠くは山々は霧に包まれて、頭だけ見える。ふと下を見下すと霧の立ちこめ

た中に、ポーと夢の浮城のやうに浮ぶ御殿場の家々、その中を縫ふやうにして汽車がまるでマツチ箱を横につないだやうな形をして走つて行く、その白い煙がスウ／＼と横になびいて氣持がよい。

遠い山は紫に近く、山は薄緑にその右手には雄大な富士の山が頂にまつしろな雪をいたゞきふもとは薄い紺色の衣を纏つてその英姿をすつくりと空高く現してゐるのだつた。私達はあゝ素的と思はず驚歎の聲を放つた。沼津でいつも見つけてゐる富士山の美しさより數等上だ、あまりに美しいといふよりは氣高いうつとりして眺めてゐた自分はしらす／＼頭が下る。一行は長尾峠へと指して道を急いだ。いよ／＼長尾峠について茶屋で朝飯を食べたお腹が空いてゐるのど歩いたので大變においしい。

御飯がすんで少し休んで後長尾隧道へ入つた、中は眞暗でじめ／＼してをまけに足下はドロ／＼でビチャ／＼はねる。上からはつめたい水がポトリ／＼と襟首の中へ入る。何だか氣味悪い。早くこゝを出たいと思つて心はあせつても思ふ様に歩けない、やがて隧道を出るとからつと右手には波おだやかな声の湖がぬ

ぐはれた鏡のやうにつる／＼と光つてゐる。その静かな湖面美しい光唯私はうつ／＼として眺めいるばかり右を見ても左を見ても青々とした大高原。一行は尙もくね／＼としたまがりくねつた、山道を一心に歩いたそして姥子に向つたいよ／＼道はけはしいゴロ／＼石が方々に落ちて居る。姥子を過ぎて間もなくいやな息がブン／＼して来るあゝもう大湧谷に来たのかなと思ひながら少し行くともうこゝは名にし負ふ大湧谷皆は急いで時計やら眼鏡やらをしまひこんだ。

(龜田愛子)

大湧谷

「大湧谷よ／＼」と誰か云ふ。元氣百倍ではないけれど早く見たいと云ふ好奇心にかれて次第に速度が増して来る。行手は木が蔽ひかぶさつてじめ／＼とした陰氣な、深山の奥深くに云つた様な一本道。粘土ばかりなので足が滑る事／＼。ぎゆつと踏み出すと半分は後へもどる。「すべるわ／＼。あら」などいふきような聲が起る。やがて明るい所へ出た。こね返された粘土の道も何時しかぼか／＼とした黄灰色の砂地

となつた。少し平になつた所へ出ると右手に湯がごうくと湧いてゐた。

左は千俣の谷一步踏み外したならもう命はないものゝあきらめなさい、と村松先生がもつたいらしくおつしやつたけれど、道幅は一人歩くには充分だつた。けれど成程左は目が眩みさうな断崖絶壁その奥底の方からもうくと煙が立ち昇り何でも来い、呑んでやるぞと口を開けて待つてゐる様です。卵子茹でた様な強い香りゴウくと音をたてゝゐる鉛色の熱湯、豪莊と云はうか、凄惨と云はうか。私共は唯石像の様におし黙つて呑みこまれた様にあきれて見てゐた。畏れ多いが明治天皇の御名づけ遊した大湧谷とは、よく云つたものと感心しながら右手の崖にひつかつた大岩を氣づかいつゝ進むと、所々に小湧谷があつて水蒸氣は、相變らず對立した絶壁をつゝんでゐる。この下の一本道を我ども一行は元氣よくがうら驛に向つた。

(小山 壽子)

今私どもは無事に箱根越の壯舉を終へ、鎌倉入りをしようとして電車に入つた。「七里ヶ濱の磯づたひ、稻村

ヶ崎名將の」と歌にある七里ヶ濱が車窓に見える風いだ海上に何事かを語る様な波の音が聞え出した。その昔忠臣義貞が黄金の太刀を投じたのは、何處の岩の上だらう。ひたくとよせる波の音をきくと、岩頭に立ち金色の太刀をおしいたゞいて「海神よ願はくは潮を退かせ給へ」と祈る義貞の姿が想像される。片瀬で下車、江の島へ向ふ。「江の島ならずして繪の島なり」と地理の先生がおつしやつたが繪の島程でもなく、寫眞の方がよつぽと美しいなど思はれた。長い橋をおぼつかなく渡つて辨天神社へ参拜し、直ぐ引返して今宵の宿、鎌倉に向つた。

(小山 壽子)

鎌倉入り

長い間電車に揺られ／＼してやう／＼今宵の宿鎌倉へ着いた。

お、鎌倉、歴史の鎌倉、七百年も昔此處には頼朝公の手によつて宏大な鎌倉幕府が開かれ此の若宮大路の邊を烏帽子直垂の鎌倉武士が徘徊した事だらう、其の中にはあの由ヶ濱で都の公卿等にまねて日夜詩歌管絃に更つたと聞く實朝公も、人美しい静の姿も勇しい

頼朝、義經等の姿も七百年の昔にはこの邊に見る事が出来たであらうとかう思へば八幡通の中央小高い堤の上の青い櫻の若葉にそよ吹く夕風も過ぎし昔を物語つてゐる様であつた。鈴木旅館に荷物をあづけ八幡宮に参拜した。

白く高いきざはしの中央左手に高く聳えてゐる青葉の大銀杏、おゝその大銀杏の薄暗い陰には承久の昔、公曉が恐しい劍を持つて隠れてゐた、罪も無い實朝公の死、静の悲しい舞の姿すべては此の大銀杏が知つてゐると思ふと其の青葉のかげを吹く夕風にもそよるに昔が懐しく偲ばれた。

社殿へお参りして旅館へ歸つて来た。

楽しい夕食後、私はてすりに凭れて今日一日の事を思ひ返して見た。

あの静かな真夜中の沼津の町や、楽しい汽車の中、箱根山を上つた時の苦しさ、仙石原や、蘆ノ湖の美しさ、恐しい大湧谷、心地よいケーブルカー、それから美しい江ノ島、なつかしい由ヶ濱私の頭の中には今日通つて来た所の様々の景色が走馬燈のやうにそれからそれへと繰り返へされた。「山中さん買物に行かない」

友の聲にハッと我に返つた。

星も輝いてゐない暗い淋しい空に黒く鎌倉の山が何事かを語るかのやうに浮んで見えた。

(山中 榮子)

鎌倉 宮

安らかに旅の一夜はあけた、宿を出て一同は大急ぎで鎌倉宮へ向つた。

櫻の並木の續いてゐる道を過ぎ師範學校の前を通り鎌倉宮の鳥居をくゞつた。

御醍醐天皇の皇子護良親王が御恨を呑んで永にしづまりますかと思へば悲憤の涙が涌きでてくる。

社殿を拜して御窟を拜観した。

狭いじめ／＼した細い道を上ると其所に御窟があつた。いくら逆臣尊氏でも愚位はお敷き申し上げたことであらう私はかう思つてゐた。

あゝけれど暗い陰氣な草露滴る其の中には御疊すらお敷き申してなかつた。

あゝ其の御身はかしこくも九重の大奥に天皇の皇子としてお生になりお若い頃より御不幸にして幕府を倒

す爲に、僧にまでおなりになつた、けれど御苦心も水の泡、又しても逆臣尊氏の手には捕はれあそばしこのやうな所にお暮しになつた、木の葉もれる月影に梢渡る夕風に親王は尊氏をどんなにお恨みあそばしたことだらう。

薄暗い土牢の中に白い着物を召してお恨めしげな親王のお顔が見えるやうな気がした。

あゝそれにつけても大平の御世の有難さがしみじみ感ぜられた。

鎌倉宮に御別れを告げて頼朝の墓へ詣でた。あゝ七百年の昔、此處に鎌倉幕府を開いて此の日本の國をおのが掌に握つてゐた英雄も七百年経た今日は唯苦むした一個の墓に過ぎなかつた。

傍の古木にむせぶ様に吹く風も遠い昔を、盛なりし英雄の昔を、物語りうつつたへてゐるやうであはれ深く感ぜられた。

(山中榮子)

長谷観音

門の兩わきに大きな仁王像が目を見つめて立つてゐるこの奥に日本一「きりよう」のよいと云ふ大佛様がいら

つしやる。どんなにいゝかしらと思つて門をくゞつた折から青く晴れた大空の下、初夏の朝の陽を浴びて青に映えたお肌も美しい。半月形のまゆ、うちふした目もさ、やはり御佛らしい尊さがそなはつてゐる。側の繪葉書屋に、兄様を買つてゐらしたのと同じ大佛の像があつた。かつては亡兄様も此處をお歩きになつたに違ひない。買つていらつしやつた佛像は今佛壇に上げてあり、その後には兄様の位牌が淋しく置いてあるあゝたつた一人しかない兄様よ、私は悲しくなつてじつと大佛を見上げた。

(小山壽子)

横須賀にて

史上の名都鎌倉の古雅な感じに較べて此處は我が國有数の軍港であるから總ての者に活動的氣風が溢れてゐる。

山に上つて見渡せば軍港内の壯觀が手に取るやうに見え碧空高く飛行機飛行船が飛ぶのも勇ましい。

草原に坐つておむすびを頬張りながら見下せば港内には煙をはいてゐる無数の艦船が碇泊してゐる。

様々な騒々しい響が潮の押寄せるやうに聞えて来る

山を下つて海岸鎮守府で中村少尉のお話を伺ひ砲兵工廠内の見學に向つた。

兵器製鐵所で暑く熱せられて眞赤に溶けた鐵、火花を散らす鐵棒、耳をつんざくやうなモウターの響總て僅の人の小さな力によつて自由に動く機械の偉大さには今更のやうに驚かされた。

ドック、其の他船艦の附屬品を一覽し軍艦警手に上つた。幾組かに別れ水兵さんに案内されて艦内を一巡し秩序正しい軍艦生活に感心した。

碧海に悠然と浮ぶ幾隻かの軍艦日にやけた快活な水兵さん達皆御國の爲に又我等國民の爲に盡して下さるかと思へば心強く感謝の念に堪へなかつた。

後甲板に集つて記念の撮影をした時一種誇らしいやうな感じがした。

懐しき軍艦警手に名残を惜しみ再び海軍鎮守府に寄つて小憩後驛に向つた。

さらば横須賀の町よ、軍艦よ、我等は名残り惜しくも軍中の人となつた。

(山中榮子)

歸りの汽車

楽しい二日間の見學を終へて大船から東海道線に乗つた外では梅雨がシヨンボ／＼と淋しさうにふりそいでゐるお辨當を買ふひまもなくすぐ汽車に乗つた。車中では八木さん、小山さん、田川さん、北川さんと乗り合つた。皆、茶目ばかりそつたものだからその騒しさと言つたらない、外に坐つてゐる人達までドットふき出してしまふ、少しおとなしく仕様と思つてもすぐ又誰かがちよつと、可笑しいことをいふので又すぐ破れて笑つてしまふ。近所の方に悪いとは知りながら……八木さん達は大船で買つたおすしやお辨當をおいしさうに召し上がつていらつしやる。「龜田さんや、小山さん、お腹が空いたでせうほしくない。」田川さんはおすしがまづい／＼と一人でつぶやいてゐられる。北川さんは至極まじめに、黙々として召上つてゐらしてしやる、私と小山さんとは只双方目と目を合してゐるばかり。

外はもう大分暗くなつて淋しい。けれども車中はさながら春の様な、にぎはしさ。たのしさ。あちらでもこちらでも、クス／＼といふ笑聲は絶えない。私と小山さんは國府津でお辨當を買はふと思つて居た。氣の

をつけ家の人々に迎へられて楽しかつた旅の物語をし
ようと家路にいそいだ。(龜田 愛)

東京日光方面

三年 森 徳子

汽車は闇の中を東へくと突進してゐる、車中では
神妙に眠つて居る人は少ない。皆嬉しさうに語り合つ
たり、そして用もないのに鞆を開けて見たりする。國
府津あたりであらうか!? 漸く明るくなり初めた。

六時三十分品川驛着、下車して直ちに明治神宮に參
拜した。深緑の密林の間に二條白く敷かれた玉砂利――
その參道を辿つて行くと未だ素木の香のするみやびた
明治神宮がある。此の中に國民の等しく崇敬し奉るど
ころの明治天皇の靈が祀られてあると思へばほんたう
に心が緊張して來る。茲で順次一人づゝ參拜して北參
道を通つて代々木に出た。

靖國神社、遊就館、不忍池、觀月橋、上野公園、彰
義隊碑と順次見物し午後二時日光に行くべく上野驛よ
り汽車に乗つた。

「さあ、これから四時間乗るのよ」と物知り顔に言

ひ。

九時半就寢した。

五時起床して直ちに東照宮に向ふ。水の清い大谷川
に架けられた朱塗の神橋、神より他渡れないと云ふみ
橋ではあるが私達は渡つて見たい様な氣もした。

東照宮――その建築美には實際驚いた。然し想像は
モット／＼眼を眩惑させる物と思つて居た。

當日は丁度東照宮の年中行事である武者行列があつ
た。町の人總出で行ふのださうだが餘り人数は多くな
い。若い人、年寄達が無恰好に直垂を附け刀を佩した
所は随分滑稽だ。石段を降りる度に長い刀を態ど引き
擦つて笑ひ興じるお侍様、緋の袴つけたやんごとなき
女官達のさくめき、さながら一卷の興じた繪巻物を繰
り擴げる様……。

東照宮前より電車に乗り馬返しより中禪寺に向ふ。
馬返しのは山は躑躅が見頃だつた。峠の五郎平茶屋で一
休みをし有志を募つて華嚴の瀧に行く、滔々と流れる
白雲の瀧に架けられた橋を渡つて、險阻な山路を辿つ
て行くと、先きの茶屋の支店であらう。僅かな平地を
利用して作られた東家の様なものがある。名も懐かし

ふ人が有ると思へば

「まー、四時間？」と如何にも仰山な顔、でもその
言葉に屈した様子はない、皆元氣そうに再びがや／＼
としやべり出す。

日光附近――亭々と茂つた老杉の間にちらほらと破
屋が有るのみで知らず／＼神秘的な淋しさに引きづり
込まれる様な氣がする。

灯ともし頃日光驛に着いた。宿は神橋館、それまで
の道に私共は旅館や土産物を賣る店の多いのに驚いて
しまった。

宿に入ると早速お膳が運ばれる、食後一休みして居
る時、先生が手拭片手に入つて來られた。多分お風呂
をめて來たのだらう、「どうだ。疲れたか？」

「え、もうとても疲れしました。」

「そうだらう、電車の都合で随分歩いたものな、明
治神宮の前に立つた時、襟を正す氣になつたかね」先
生は何かの本の記事を思ひ出して居るらしい。生徒の
一人笑いながら云ふ「先生、襟はありません、ネクタ
イです。」

「あゝ、そうだったな、アハ、……」に皆して大笑

い、五郎平茶屋と古風な暖簾靜かな山の大氣に瀧の落ちる凄じい音のみが響く。此の茶屋に腰を下ろし、華嚴の飛瀑を見た。

「生憎と此頃は水が少ないので肝腎な所から落ちて居りませんがな。」

茶屋のお爺さんが言ふ。成程いつも想像したのとは違ふ。懸崖には違ひないが天から落ちて来る様な長い瀧はない。僅かに岩間を漏れて出る小瀑があるのみだ。「つまらないことをしたね。」

「惜しいわね。」

彼方でも此方でも不平たらしく。

再び山上に集合して戻る。

夕暮車軸の雨を突いてレーキサイドホテルに着いた外人のみの宿泊所だから總ての事は洋式だ。夜私達はベットに寝かされた。皆曾て一度も横はつた事のないベットになのだから有頂天になつてゐる。暖い柔かなシートに包まつて結んだ夢の圓らかさよ。懐しい一夜は忽ち明けた。後で聞いた夜中にベットから轉げ落ちた人があつたそうなの……

七時出發 小笹の間に名も知らぬ可愛い、花の咲き

………柳はひつそりと垂れ堀の水は小波だに立たない。千代の松ヶ枝は晴れ渡つた碧瑠璃のみ空に亭々として聳え立つてゐる、私達は異常な感激にうたれて頭をたれた、君ガ代のいく久しきを祈りつつ……宮城前をさがると又もとの喧嘩な巷に出る、激しい音響と黄塵のまくし上げる中を私達は東京驛へと急いだ。——車中の人となつたと同時にバツと電燈がつく。お、懐かしい我家ももう灯ともし頃であらうをその電燈の下に卓を圍んだお父さん、お母さん、そして土産を待つ姉弟達の笑まじげな様がふつと頭に浮ぶ。此時誰しもの心が汽車よりもずつと先に故郷の家に着いて居た。

近畿地方

四年 和田 つる

出立前

目があいた。枕元の時計は一時を示してゐる。「まあ早くてよかつた。」安心してゐると耳元に大きな聲が聞えた。直に元氣よく「はい」と答へて飛び起きた。こみ上

亂れて居る……その間にある小徑を進んで歌が濱二荒神社に行つた。

昨日通つた馬返しを越えて日光に行く。

三時二十分上野驛着、直ちに淺草公園を見物し神田の旅館森田支店に入つた。昨日のホテルの待遇があまりに良かった爲か、今日のは著しく悪いのを痛感する。七時より外出を許された。その後へ曾て本校の英語の先生であつた鈴木先生が訪ねて来て下すつた。

九時に就寝——翌早朝出發した。

銀座の松屋呉服店に行く。自由の行動を許されたので意氣の相合つた友達同志、三々五々になつて陳列品を見たり土産物を買つたりする、皆が最も驚いたのは屋上に上りつめた時であつた。廣い東京市が一目に見える。之で震災前の建築よりずつと劣つて居ると云ふのだから、その震災前はどんなであつたのだらう。私達は想像する事も出来ない。此處を出たのは十一時だつた。日比谷公園で晝食をなし直ちに宮城に向ふ。

宮居なる松ヶ枝の色千代かけて

日の本の國、いや榮えあれ

大東京の真中だと云ふに何といふ靜寂さ！壯嚴さ！

喜びを抑へ、用意してあつたものを身につけて出掛けた。門の外へ一足出た時、冷へきつた夜の空氣が温つてゐた、顔一面に當つてヒヤリとした。外は暗い。所々に灯された電燈が霧に蔽はれて淡く邊りを照してゐるばかり。三人の踏む砂利のザク／＼する音より何の音もない。期待に期待を重ねてゐた關西旅行の日も来て、それから實行するののかと思へば、嬉しかつた。が又悲しい念に絡れた。こんな事ではいけないと思ひかへして、色々とお友達に話しかけた。「今幾時？」と問はれてハツと氣付いて腕を見れば、一時半、お友達のは二時過ぎ。妹が正午の合圖にあはせたのに私はあはせたのだ。心配でならない。異つてゐるなら、時間は少い、もし遅れたら楽しい旅行は愚か、暗い真夜中の沼津驛におきざりにされたら……。と思ふと心た、まらなくなつて急ぎ出した。

ずつと向ふにたつた一つの提灯が動いてゐる。お友達だらうか。「それなら未だ早いのかも知れない。」と稍々安心したもの、ステーションに近づいたのに、明るい幾つかの電燈が闇の中にはいつと浮んでゐるのみでシオンと静まりかへつてゐる。体は熱くなる、ド

キ／＼胸の鼓動が速くなつてくる。むちゆうになつて馳た。廣場にカバードゲが白く見える。四年生だらうか、三年生ではあるまいか、向ふで手まねきをしてゐる様だ。整列してゐる。のぞき見る様にして見ると、中山さんだつた、ホット安心して自分の場所に入つた限りない喜びがこの一つの團體の上を漂うてゐる。笑つてゐる人、忙しさうに口を動かしてゐる人もある。私も先きの心配は何時しか去つて、笑を禁じ得なかつたその笑の中に、思ひ出深き印象を作るやうに眞自面に過そうと決心した。私の後に貴島さん、田上さんが来てやうやく私達の組は揃つた。やがて先生のお指圖の下に間宮先生、吉田先生、寄宿の方々に送られて車上の人となつた。

沼津——山田——鳥羽

四年 藤井 貞

第一日 六月一日

午前二時三十八分、私達四年生百餘名を乗せた汽車は寢静まつた沼津の里にお別して、西の旅に向ひました。

未だ逢はない關西の風物人情等想像すれば、眠らうとして、反つて眼が冴えるばかりでした。

夜の帳が段々取られて朝靄につゝまれた窓外の景色の美しく見えて來たのは四時頃でしたか。白い小石と藍色の水とが縞になつて長く續いたのは大井川でした。曉の濱名湖の美しさは豫想以上でした。

限らない程廣い水の面は静かにゆれて、夢の様に白帆が浮んでゐる様はえも云ひ知れない眺でした。小さな驛にさへぎられたその景色は又暫し續いて私達を悦ばせました。

熱田を過ぎて、名古屋驛に乘換の爲め三十分程下車し、九時二十五分再び山田行の列車に乗りました。私達と一緒になつた此の地方の人達の「さうでなも」「さやうでおます」等云ふのを聞いて「西へ來たのだ」といふ感が判然しました。

色々の抱負と喜びに満ちた心を以て山田の地に下車したのは、午後一時も二十分程過ぎた時でした。

西都見學の第一歩を外宮へ、森閑とした杉小立の間を少しく行つて外宮に達した。神前に敬虔な心で拜しました。

赤い電車を微た館前で下りて、砂利の道を行くと、清楚な新緑の庭が展かれて、處々に紅のつゝじが頭をのぞかせてゐるのがいかにも愛らしく思はれました。館内には昔の遺物が種々飾られてありました。時代を象徴した裝束人形、肌栗立やうな名刀、弓、矢、冑甲、馬具。耳環等皆私達には珍らしかつたのでした。

農業館に伊勢の産物が主に飾られてあつた。時間の都合で、急がなければならなかつたのはほんどうに残念でした。又電車で内宮へ。

神橋を渡りその名も清い五十鈴川のほとりに出て口を嗽ぎ身も心も清められて、老杉の鬱蒼とした間を私達は只黙々として歩きました、胸一杯或る崇高な感激に満たされて。大神の御前に頭を垂れた時、あまりの畏さに眼の熱くなるのを覺えました。

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

全く此の心持でした。

レールの上の上を真つしぐらに走る大きな二見行の電車は私達にどんなに心よかつたか。

電車を下りて、お土産物を賣る店と、宿屋と、さざ

ゑを焼いてゐる家が軒をつらねる二見の町をぐんぐん歩いて、海岸に出ました。期待が多すぎたのでせうか？そこには大小二つの島が私達をあざ笑ふ様につゝ立つてゐました。

ごろ／＼の石の上に勞れ切つた足を投げ出して、鳥羽行の汽車を待ちました。

明日の地を想ひながら景色がよいと聞いてゐた鳥羽の長門館の一室に、眠りをむさぼつたのは十時も間近い頃でした。

鳥羽——奈良

四年 勝 又 甲 子

第二日 六月二日

目が覺めた。時計は四時五十分を指してゐる。先生のおつしやつた時間までには、まだ十分間、あるのに井口先生が起しにゐらつしやつた。すぐおきて床をたゝみ洋服をつけ洗面し髪を梳り、靴の整理する暇もなく集つて、日和山へ登つた。雨が少しふりだした。頂上は公園になつてゐて、前面に答志島萱島などがあつて、緑が彌増してゐる。おゝ!!!自然の美よ!!天工の美

よ、私達は思はず欄干に駆けよつた、此の様に素敵だつたなら日本三景之一に入れてよいと思つた。宿にかへり朝饗を攝り、七時三十分宿を辭して、奈良に行くべく車中の人となつた。車中は随分の賑である、十時十二分龜山着。乗りかへる、六間驛よりレンジ草島がありその中に校長先生自稱のカラシナが黄色とあり、配合がよかつた午後一時十八分奈良着。

すぐ旅館に荷物を置いて見物に行く。案内人二人についてで、二組に分れた。鹿が人懐しげに寄つて来る猿澤の池水さへ歴史を語り岸の柳も昔を偲ばせてゐる先づ春日神社へ參拜。祭拜は第一社甕槌神第二社經津主神第三社天現根命で藤原氏の祖神である。絢爛丹葩の如く、朱塗の樓門廻廊高々目もまばゆい位である若草萌ゆる春日野に神鹿群をなして遊ぶ様は、恰ら繪の様である。安部仲磨の

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも。

にて名高き三笠山は水谷川を隔て、北に峙つ。媛草山は禿山にて芝生に覆はれ所々に青松が點在する。頂上にてアイスクリームを飲み疲れを癒し、注意して下る

奈良——桃山——京都

第三日 六月三日

四年 高橋八重子

帝室博物館に入る。見物時間僅に二分間。案内人も驚いてゐた、鐘樓も見、次は誰も知る奈良の大佛。鎮座する屋の大きいためか割に大きく見えなかつた、南大門。仁王あり筋骨逞々恰も生きてるやうな表情である正倉院は外觀を仰いたのみ。藤原氏一門の氏寺たる興福寺や、八角寶珠形の南月堂も觀覽し、右手に五重の塔左手に三重の塔を仰ぎ、猿澤の池の畔を通つて松島館へ着いた。夕飯を頂いて先生のお許しの出るのを待つて外出。

大道の兩側に並んでゐる名物を賣る店や風雅な旅館などをみると、成程遊覽地。舊蹟地である、又大阪等とは正反對なゆつたりした地だとなづかれる。鹿の角細工のへらや箸繪葉書や鹿の模型の文鎮、其他食料品を買ひ集めて、九時迄に館へ歸る。床にいたが皆はうれしさうに語りひつゞけて眠らうともしない。楽しい旅の夜である。

静かな奈良の町の夜は明けた。

朝かなり時間があつたので七時十五分まで外出を許して下さつた、静かなも静かな奈良の町！旅の淋しい氣持におそはれてゐた私達にはすべてがしつくり合つて、たまらなく氣に入つてしまつた。

猿澤池は暗線の水をたへ歴史の數々を織込んであるだらうと思ふと、人間であつたなら古の様も語られるものをと、命なきものが悲しまれる。

其から三々、五々町中を散策して後、池畔に集合其處から驛に向ひ、間もなく八時十五分の桃山行の汽車にのつた。

なつかしい親しみある奈良の町！其地にもさやうならの一言を残したまゝ列車は進んで行く。

牧水先生の幾山河越へ去り行かば淋しさの果てなん國ぞ今日も旅行く

私達はそんな氣分で、旅の淋しさをいやが上にも味ひながら、九時廿六分、桃山につき、學生休憩所に荷物を托しまづ桓武天皇の御陵を拜する。

そして又同じ路を引返して途中右の路に入りすつと濃い緑の木々に覆はれた路を進んで 明治天皇陛下並

に照憲皇太后陛下の御陵を拜しまつる。

此兩陛下の御陵を拜し敬虔の念につまされつゝ學生休憩所にて装を整へ、京都行の電車に十餘分程のり、七條の橋の袂で下り、近くなる三十三間堂に行つた、もう晝近かつたので其前の御茶屋で晝食をすませ三十三間堂を見物した。本堂の細長い事、觀音像の多い事灯をきらさぬと云ふ軒燈なぞ見 博物館の前を通つて歴史に名高い方廣寺に行つた。

そして初めに大佛を見る、胸より上しかない大佛でもかなり大きい、案内人が片隅におかれてある銅の片を示しながら、「此は昔の大佛の残り金です。あとは總てお金にしてしまつたのでありません」「大佛様をお金に鑄るなんてほんとに昔はひどい事をしたものですね。」なぞ云ふ聲を耳にしながら、次にすゝむ鐘は思つたより小さな物、又あの國家安康の字も大きな度の強い眼鏡でもかけねば見えぬ程の小さいもの……

私共の期待があまり大きすぎた爲かも知れないけれどもほんとうに此があの家康を怒らせた鐘かしらと疑はれる。

私は「家康は割合神經質だつたのね」こんな小さな

字の言葉に氣をもひなんて……あれが計略なんだから仕方がないもの、主人の天下を取る者とも思はれない」と又家康がこればかりの字に神經をとがらせる程氣がつくなら何か世界的の發明でも出來たさうにと皮肉を云ひたくなる。

そんな事を考へてゐると、井口先生が鐘をうたれたあゝ此が方廣寺の鐘の音か……「大刀をさして頭を妙にゆつた武士が此同じ鐘の音をどんな氣できいたのだらうか。」などありし昔を胸に浮べながら報國神社に行き參拜をすませ、清水焼をやいてゐる家を見それから清水寺に行く、数多い石段を昇ると、京都の市中が殆ど目下に見え初夏のすがすがしい緑の中を吹き渡つて來る風も心地よい。

其から進んで行く道路の兩側は清水焼の店ばかり、きれいな花瓶、博多人形思ひ／＼の物を求めて小さな箱を手にながら圓山公園を通る。

随分歩く事はほんとうにがっかりする。辨慶に名高い橋の敷石とか云ふ丸い石の上を辨慶らしくなりすました様な氣で渡り、知恩院に向ふ知恩院の鶯ばり、左甚五郎の傘など見て次にインクラインを見

南禪寺に行く。石川五工門がゐたと云ふ高い山門又姿見の池を見て又其足で平安神宮にもうでる。平安神宮！其名の様に安らかな宮其前で禮拜し静かな美しい御庭を拜見する。
御苑にはもう散りかけたらしいあやめが物思はしげうごかぬ池水に影をうつしてゐる。廊は幼き日よみきした龍宮の様……
其御庭を一廻りして反對の路を宿屋に向ふ。
今まではあまりにゐるいた爲か、美しい詩の都に來たのだと云ふ感じも忘れられてゐたが、六時頃宿屋について見ると、やはり京都らしいゆとりある氣になつた其から夕食をすませ身仕度して外出する。
多くの大きな電燈のともされた夜の西京を心ゆくばかりあゆんで、だるいつかれ切つた身と心を休めたのは十時頃。

京都——大阪

四年 梶本蝶子

第四日 六月四日
今朝も例の如く五時頃皆床を離れた。窓を明けて空

を仰ぐと、青空一碧、一片の白雲も見出す事の出來ない輝しい朝である。

樂しき關西旅行も、もう三日は過ぎた、今日は京都の街を見物し二時三十分の列車で大阪へ向ふ豫定である。

朝の食事を済ませ荷物を整理し私共一行は布袋館を出で、三條小橋前で電車に乗り程なく下車して皆整列し御所へと歩を進めた、山紫水明の地と古より歌はれた京の町の朝。

そゝろに優雅な大宮人の纏り歩るいた様を思ひ浮べる。昨日の疲れも癒え白き小砂利敷きつめた廣き大通りをザク／＼と靴音軽く足を運ぶ。

路の兩側には緑の毛氈を敷きつめた如く、クロイヴアーは群り生じ暑さ中にも涼氣が感ぜられる。

御所の近づくにつれて、氣分が緊張する。御所の前へ着し整列し禮拜する。莊嚴な感じに打たれた。蛤御門と云ふ門を出で電車の人となり北野神社に着く。

現社宇は慶長年間の所造で本殿、拜殿等は我が國八棟造の最古最優のもの聞く。
一同社前に參拜を終り名にし負ふ金閣寺に向ふ。飽

杳々として限りを知らない大空は青色に晴れ渡り好天氣ではあつたが惜しい事には初夏とも覺えない暑さであつた。私共一行はハンカチで汗を拭ひ／＼歩いた。程なく目指す金閣寺に到着した。門を潜つて内部に入つた。

私共の眼に映じた金閣の三層。余りにあつけなく期待は裏切られ何んぞなく物足らぬ感じがした。

私共一行は説明を聞くべく部屋に入った、可愛らしい説明者は「あそこに見えます、あの石は……」と申します」と云ふ様な言葉で説明を始めた。

急な階段を二階、三階へと昇つた、三階の天井は檜の一枚板だとか、金箔ははげては居るが點々と残つてゐる金箔を見るとそゝろに足利義滿公の豪華な生活が思ひ出される。

三階より下り風雅な金閣寺の庭を見て、寺を出で嵐山行の電車に乗り嵐山に向ふ。

暫くして嵐山に着いた。音に聞えた嵐山！
全山緑に包まれ大堰川の清流に架れる渡月橋、實に繪の如き眺望である。側の茶屋に休憩し晝食をした、めかぬ眺めを見残して嵐山を後にし嵯峨より列車にて

大阪——神戸——大津

四年 藤田 静子

第五日 六月五日

天の恵も盡きたのか旅行には稀な晴天も絹絲の様な雨を落す空と變つてしまつた。

旅館から傘の長い／＼行列をつくつて雨に煙る朝の大阪の街を東へ／＼進んで行く。西洋人が東洋のマンチエスターと云ひ、私どもが水の都と呼ぶ様に大小の川は縦横に流れ是に架る橋の多い事は只驚歎の外なく世人の八百八橋と稱するものも誇大ではないと思はれた。市街の電車の軌道の四通八達し電車は皆満員で、又自動車の交通が夥しく、歩行者が祭の行列の様に雑沓を極めた光景を見商店が競つて華美を盡す様。

本當に我國第一の商業都市である事が思はれた。

歩を中の島公園に運ぶ。ベンチは雨に濡れてばつねんとして横つてゐる。

緑滴たる草木には雨露が宿つて、あの氣忙しい道頓堀の繁華に引きかへて！一孤島としての淋しさを思はせる。

京都に向ひ有名なる大伽藍、東本願寺を見物し二時三十分の列車で大阪に向つた。汽車中は實に楽しい。音樂を吟む人もあれば何か笑ひ興じて居る人も見える。車窓より近づく大阪の街を見れば、全市淡黒い煤煙に包まれ煙突林立してさすが日本有数の大商業地と云なすかれる。三時三十八分頃、驛に到着しまづ最初に大阪毎日新聞社を見學し次に大阪城に向つた。

大阪城着は規定の見學時間より遅れたが私共一行は特に許された。美しい水を湛へたお濠、何んとなしに昔を思はせる。入るとすぐ大きな門の如き所に達す。其處をすぎると有名な石垣の巨石を見る。小高き處より市中を見下せば全市皆煤煙に包まれ恰も「夢の都」の様な感じがする。

大阪城の見物も終へ電車に乗り、旅館虎屋に向ふ。虎屋に着いた頃はもう電燈は明るく輝き、あたりは薄暗い時分であつた。夕食を済ませ、九時半頃迄外出を許され皆思／＼に外出す。宿の二階より見える道頓堀の賑しさ堀に映する電燈大阪でなくては見られぬ眺めである。九時半頃皆歸舍し十時頃寝に就いた。

屹度夏の夕には大阪の商人達が晝間の疲れを癒やしに来るのであらう。目前に商人達の逍遙してゐる様と思はれる。公園にさよならをして、尙も歩を進めて造幣局へ行く、流石、我が國通貨の製造地だけに嚴重なものである。巡查の派出所が二ヶ所にある。

長いノスファルトの舗道を通つて中へ入つた時、恰も寶石の囁きかの様にカチャ／＼と云ふ音が漏れて来た。

五十錢銀貨が山の様に堆積してゐる。

五十錢銀貨もかう澤山あつて見れば、お金の様な氣がしない。これに比べれば狭苦しい財布の中に小さくなつてゐる銀貨の方が何んなに尊いかわからない。

仕事は皆分業である。

一人は目方を量り、一人は貨幣に模様をつけてゐる。器械から五十錢銀貨がゾロ／＼と出て来た時、皆アラ／＼の語を發せざるを得なかつた。

一回見通して戸外に出た。雨は少し止んで曇天である。これから神戸に行くべくステーションに急ぐ、途中にド・ジマビルディング、大阪市廳、圖書館等の西洋式の大建物が並んでゐる。

一行は大阪驛に到着した、これから神戸に行くのである、神戸といふ市に對しつ大きな幻想を盡きながら汽車に乗つた、まもなく三宮驛についた、

異國情緒に富む市!!

と直感せずには居られなかつた。スツ／＼と氣持よく歩く西洋人、耳輪をはめて黒い支那服を着てゆつくり歩いてゐる支那婦人、會ふ人毎に姿が違ふ。

何分間かの後、私達はドイツ商船の甲板上の人となつた、ドイツ人の余りになれ／＼しい様子が氣味悪く思はれた、

船内を一巡して又埠頭の人となつた、それから菊丸と云ふ船に乗つて神戸港へ向つた。

小波が船体に打碎け、しぶきが顔に當つて、その時の心地よさ、永久に忘れる事が出来ないだらう、神戸港について湊川神社に向つた。

「嗚呼忠臣楠子之墓」と鮮かに刻まれた文字、そゞろに楠公の忠義が思ひやられて自然に頭が下つた。それから重い足を引きずりながら、神戸驛に付いた、愈々これから大津へ行くのである。

大津——沼津

四年 竹村 うた

第六日 六月六日

六月六日 起床六時

あゝもう今日が旅行の最終日なのだ……さう思ふとた
まらなく名残惜い様な気がする。

起床がいつもより一時間もおそいので、朝寝の私に
とつては随分嬉しかった。

清らかな琵琶湖を臨んで朝食をすませる時は、實に
／＼氣持ち良かった。

お部屋へ来て校長先生のお友達からのお送り物のい
ちごを頂いて居ると、「さあ／＼早く出かけるんです
よ。」と橋本先生がいらつしやつた。

「あゝ琵琶湖廻りなのだ。」と思ふと、元來船に乗る
ことの好きな私は飛びたつほど嬉しかった。いそ
／＼と仕度をして、先きがけに船に乗り込んだ。

一同船に乗つた時、汽船は静々と湖面を走りだした。

「あゝ素的／＼」「何んて良い景色でせう！」「本當に
氣持が良いわ。」などとそこそこに聞え始めた、清らか

二二四

な湖面を吹き渡る風がそつと私共の面をかすめて去つ
た。

船にようと心配して居る人々も皆元氣で嬉々として
戯れて居る。

時々船長らしい人の説明も中々面白い。その度毎に
どつと笑ひくすれる皆の聲……北郷先生の眞面目な
お話の中た三井寺と石山寺との間違ひは又しても生徒
を笑はせずには置かなかつた。

遠く／＼かすかに三井寺を左手に見て、船はなほ鏡
の如き湖面をすべつて行く。ふと目を轉すれば、向ふ
から私達と同じ様な船が走つて来る。

多分もう見物して来たらしい。

船のすれちかふとき、何んだか自分達の乗つて居る
船の方が大きい様な氣がして鼻が高かつた。

八景の一つである比良山の雪の見えなかつたのは誠に
残念であつた。

はるか向ふに唐崎の松が見えはちめたかと思ふ間に
もう目の前に見える。本當に名高いだけあつて立派な
松ではあるが、周圍を垣で廻らしてあつたのは一寸風
流味をかいで居た様な氣がする。

ボコ／＼／＼船は氣持よく走り続ける堅田の浮御堂は
本當に良かった。麗しい湖面に影を映しながら立つて
居るあのゆかしい浮御堂……たまらない程私は氣に
入つた。

湖面を渡るそよ風は一層涼しい。

突然高島さんが「少し歌でも歌はない？」「え、歌
ひませう」「何を歌をかしら」「櫻亂るが良かあな
い？」忽ち「嵐そよと渡れば櫻の咲きみつこする……」

……と皆一齊に歌ひ出した時々色々な歌を歌つて調子
をはずして打ち興じて居る内に船はどう／＼石山寺に
ついてしまつた。石山寺！本當に／＼印象深い所だつ
た。石のきざはしを一步步上るにつれて頭上で鳴く蟬
の聲！初夏の氣分を良く表はして居る。

紫式部の源氏物語を著せる質素な一室であつてさな
がら古を偲ばしめる。石山寺で打つ鐘の音！あのゆつ
たりとした鐘の音……何んども云ひ知れぬ一種のな
つかしさ淋しさを感せしめる。何んて詩的なんだら
う！石山寺の秋の月——夕べに打つ鐘の音それは／＼
どんなに詩的であらう！きつと詩人であつたらきつと
天下の名文を作り出すであらうに……

どう／＼／＼ここから歸らなければならぬのだ。船の
中へは又我先きにと乗りこむのだつた。船長らしい人
が「まだ時間があるから南郷まで行きませう」と云つ
た時私はこの上ない喜びを感じた。

南郷まで来ると、船はどう／＼廻れ右をしてしまつ
た。そうして居るうちに美登里館の前へ横づけにされ
てしまつた。

しばらくして私達は荷物を持つて、なつかしい／＼
琵琶湖とも美登里館とも別れなければならなかつた。
もうこれが女學校に居る内の最後の旅だと思つたら、
なんどはなしに淋しいかなしい感に打たれて涙さへ顔
をつたふのであつた。「あゝさらばなつかしき琵琶湖よ
さようなら／＼」そうして私達は天津驛に向つた。

驛について、しばらくすると、なつかしい／＼沼津
行きの列車が来た汽車は随分こんで居て、とても全體
はこしかけられなかつた。

やう／＼のことで隅の一つがあいたので江藤さんと
二人でそこで晝食をすませた。あまり出入り口なので
私達の前は入れがわり立かわり遠ふ人が入つてくる。
午後二時頃重さうな荷物を背つた年とつたお婆さんが

二二五

私達の前にこしかけにする。突然「あんたはん東京のお方だらう？ほんまに言葉が活潑ぢやのう！」なんて云はれた。何んて嬉しいことだらう。去年の十一月までは朝鮮人とまでみられた私達が一躍して東京のお方とは……何んたる光榮の至りであらう！

汽車はごつごつ／＼なほはしりつづける。

早く家に歸つて皆を喜ばせたい……そう思ふと家の人々が走馬燈の様に表れて来る。第一に母の笑顔、妹のお土産をよるこぶ顔、弟！弟！そう思ふと私の心は曇らすには居られない。本好きの弟とあれほど約束して来たのにその本を買つてこないではないか？あゝそれなのに／＼弟はどんなに私の歸るのをまつて居るだらう？歸るといきなり「うたちやんお土産の本ありがどう？さきくだらう？そうしたら、私は……私は何んと云つて謝らうか？弟の失望の顔！そう考へ出すとたまらなく私の胸はかきむしられそうになる。段々たそれが近くになつて来た。窓に映する野生の月見草！それは本當に私にとつてなつかしいものであった。汽車はなほも走りつづけた。もうすつかり外は夜のとばりにとざされてしまつた。

修學旅行記

(大正十五年度)

龍華寺——久能山へ

一年 小池 崎 芳 子

今日のれ天氣を氣づかひつゝ、五時半頃には殆ど驛前に集つた。人數しらべも無事に終へ汽車に乗り込んだ頃は空はずつと晴れ出した。

汽笛一聲沼津を離れた。構内を出ると青々とした田舎の景色が左右に展げられた。汽車でもう何度も／＼通つて見しつてはゐるがやつぱり懐かしい景色だ。窓から吹き込む朝風がすこし冷たい。まもなく原驛についた。こゝから二三人誰か汽車通の人かのつたらしい汽車の中は殆ど私達ばかりで他のお客は一人もゐないのがうれしい。窓からふとみるともうお百姓さんはせつせと田に出て働いてゐる。汽車が通りかゝつたので鐵持つ手を休めてこちらを珍らしさうに立つてながめてゐた。汽車は到頭江尻に止つた。驛前に整列していよ

螢火の様に點々と光る燈火！小梢にかかる月のさやけさ！時たま歌ふ讚美歌！そうして長い間ゆられ／＼れてゐるうちに、いつか静々と沼津驛に到着した。黒山の如き出迎への人の中に私達は汽車から吐き出された。

なつかしい／＼母の姿が見えた。「お母さん只今」と云つたときなつかしさ、嬉しさで胸一杯になつた。「まあ、うたちやん無事でよかつたわねえ」と云つて下さつた。優しい母!! あゝ本當に／＼長い一週間の旅に出ただけ又一そう親のありがたみが身にしみた。諸先生のお迎をうけながら、校長先生のね話をうかがつて母と歸つた。空には光々と星がかがやいて居る。家に就いたのは十二時半すぎだつた。弟も妹も女中も皆待つて居てくれた。急に涙がこみ上げて来た。祖父母の泣いてよろこんでくれる。その様!! 本當に私も泣いてしまつた。これが卒業後のなつかしい尊い思出となることであらう!!!

入浴した後快い床に就いてぐつすりね入つてしまつた。

久能に向ふのだ。左手の標札に、久能山二里半餘と書いてある、かねて先生からさいてはゐたが今更の様にびつくりして顔を見合せる、これから二里餘も歩かれるかしら。でも遠足とおもへばこれ位はいつも歩いてきたのだからと元氣を出す。

混雑した踏切を渡つてからは、本道の通りをまつすぐに歩いてゆく、町の人が出て私たちの通るのを指さしてはどこの生徒だらうなんか語りあつてゐるまさか見せ物ではあるまいしね—とお友達と笑ふ、商店のならんだ町通がつきると田舎道へ出た、お庭に鯉職が立つてゐる、不思議に思つてゐると誰か「舊のお節句よ今日は」といふ聲がする、やがて鐵舟寺の門前を仰ぎ左手に高く森の茂みの中に堂らしいものが見える、やつぱり龍華寺だつた、舞鶴松が枝をさしのべて地面をはふ様に掩つてゐる立派な庭。大きいさばてんが珍らしい、蘇鐵もさすが立派なのがたくさんある、一同はこゝで休むことになつた、石段をのぼつて榜牛先生のお墓におまゐりする、珍らしい西洋風の平つたい石碑だ。吾人は須らく現代を超越せざるべからず」と碑文を皆口々によんでみるふと後をふりかへるとぼんやり

と雲上に高く富士の雄姿が現れた、観音山——ほんとうにその名前の通りだ。この美しい景色を飽かず眺めてゐたいなと思つてゐるともう先生が集つてと仰しやる涙に整理していよ／＼久能山に向つた、細い／＼田圃路、こんな所が道なのかしらと思はれる様な一本路、大丈夫なのだらうかと心配してついでゆくと足下に小さい一本の古びた杭——久能道と誌してある、しばらくすると今度は白い大きい道しるべが生ひしげつた葎の間立つてゐるそこに約一里と黒くかいて示してあるおや／＼と思つてゐるとしばらく行つた岐れ路に今度は一里八町久能に至る——とかいてある、段々遠くなるのですかつて先生にきいてゐる人もあつた。

山を切通した様な小路を出ると海岸へ出た、今度は廣い、山道をさた私たちは海をみてうれしかつた、砂田を圍つて南瓜やお麥などが植ゑてあるのも珍らしかつた、自働車の砂埃におそはれながらやつと久能についた、つかれきつてゐた人も目的の地にきた／＼皆元氣よく旅館に入り休んだ、出されたお茶はまた／＼間に吞みつくされてしまつた、しばらくしてお辨當も濟んだ元氣になつて下の店先に下りてお土産物などを買つて

ゐた人もあつた、これをついて登るのだといつて杖を買つた人もある、晝食を終へ一同は久能山に登つた、一つ二つ三つ……とこなきよく石段の数を数へてゆくものもある、千幾百段とか各々違つた数を語りあつて頂上についた、本殿に參詣をし奥の院のお墓に詣つたこれこそあの三百年の太平の基を築いた家康公の靈魂永へに眠る墓地かとおもふとしらす／＼頭が下つた、歸途お守をうける人も大勢あつた、少し下りた所で寶物館拜觀をする、徳川家代々の將軍の御具足御刀お手道具など調度のかす／＼が光つてゐる。

時間が迫つたので下りは一氣におりてしまふ二度旅館に入り荷物をまどめ整理、二里半の砂埃の道を静岡へ向つた、大邊長い白い道がかぎりなくつゞいてゐる、汗が帽子の下からしみ出る、疲れきつた足をひきづり静岡驛にやつとつゞき、三十分ばかり時間があつた、五時五分、私もは静岡を離れた卒業生の方が見送つて下つた、汽車は沼津をさしてまつしぐらに走つてゐる、長い／＼ブラツトホームそれはなつかしい沼津驛だ、驛前で一同集りお別れの挨拶をしてそれ／＼楽しい家路についた、私どもの女學校に入つてから、初めての

旅行はかうして楽しく一日で終つたのだつた、

箱根江の島鎌倉横須賀方面旅行記

二一年

旅 たつ朝

午前二時半、空には美しく星が輝いてゐる、街燈の光もいひ知れずなつかしい、いよ／＼うちに待つた旅行の朝なのだ、はきなれぬわらわちを氣にしつゝ、友と黙つて驛に急ぐ。

静かだ、淋しい程静かだ。長くひく細く太く地にひく影法師がゆれる、驛に近づく、もう大分集まつてゐるらしい。

少し朝といふには早いやうに思はれたけれど、お早やうと挨拶を交す。

定刻前四十分集合の笛がなつた。一班、二班と順に整列して、大勢の見送り人におくられてホームに入った。待つこと僅にして列車の姿は見えた。黒煙を夜天に柵引かせた機關車が闇をついて走つ来る。やがて速度はゆるんで、その偉大な體はびつたりと私達の前にとまつた。わづか二日の旅だけれど、大旅行でもする

かのように私達の心はおどつてゐた。車内の賑やかさ。田舎者が始めて汽車にのつたやう。

外はだん／＼明るくなつて来た。暗黒の世界から光明の世界へ。黎明の空の美しさ。

御殿場驛下車。ブラツトホームへ下り立つて思はず身ふるひした。寒い。本當に寒い。町はまだみんな眠つてゐる。門燈の屋號や旅館の名がぼんやり浮き出でて淋しい。

ワラヂのひもをしらべたり、荷物をかたげなほしたりして、いよ／＼之から出發。

清らかな空氣に肌を洗はせ乍ら、すべてが夢の様な景色の中を進む。と、霧の中から「ホークキョ」と鶯のこゑ。朝の露にしつとりぬれた緑の世界を、小鳥の歌をき／＼と歩む吾らの旅のたのしさよ。

林を越して野原。その野を過ぎて、やうやく山登りの第一歩をふんだのである。

芝園の様なみどりの山。その間にうねる白い路。はるか下になつた人家。小さな汽車。さうした四圍の景色に心ひかれて、思はず足は、はかどつて行く。と誰か「富士山……」と叫ぶ。まつ白な雪につ／＼まれて

聳えたつ富士の姿!! おゝなんといふ崇高き、何といふ神聖さだらう、「あゝいいねー」と感歎の聲がそここからおこる。歩んで行く程に、登つて行く空に、私達は富士と高きを同じうする様な感じがする。こゝまで来てやつと、山の陰にぼんやりと私達をながめてゐる太陽を見た。私達は心地よい朝光を浴びて進んだ。つきるかゝと思ふ路はいつまでも果てしなく続く。ずむ分歩いた。疲れた。くゝの聲が高くなる頃、やつと時の茶屋へたどりついた。こゝが長尾崎なのだ。眼前に連なる山はまだ朝もやの中にぼうつとかすんでゐる。

やがてお辨當。天然の音楽をき、乍ら味ふそれは、又いひ知れぬ美味だった。

(白井清子記)

峠を越へて小田原へ。

楽しい朝のお辨當は開かれた。もう六月といふに冷気はしん／＼と身にしみる。手はしびれ、唇の色は變つてくる。のどかかわいたが、水筒の水よりも茶屋で出してくれる暖いお茶に心がひかれる。ふるえ乍ら、楽しい食事は終つた。

「ビリ／＼／＼」と集合を知らせる笛の音が、寒く、空気をふるはす。自動車の通る廣い新道を歩み、長尾隧道へ入つた。山より絞り出される水が隧道の中にたまりまると水田のやう。冷たい雫は時にひやつと首筋へおちる。皆「きやつ／＼」とさわざ乍ら、やうやく出口に出た。峠の下に開ける景色。緑の毛氈をしきつめた様な原が廣々と展べられ、芦の湖水は山々の間にゆつたりと姿を見せ、原を流れる清水は時々キラツと日に光る。

急な細い坂道を、野原めがけてかけ下る。野原の草は割合に丈が高い。上から見た時は芝生の様に見えたけれど。

午前八時のやはらかな日は静に私達の上になさしてゐる。丸木橋を渡つたり、水田の脇を通つたり、まばらな人家の側を歩いたりして仙石原牧場跡へ出た。目眩の限り縁の原、所々に、葉の開いたわらびや、山うごか、精一杯に伸びてゐる。もつと早いとわらびが澤山とるれものをと思ひ乍ら、開らかないわらびをつんだり、うごの葉をたゞいたりして見る。原とはいへ、土地に高低があつて中々骨が折れる。姥子の温泉につく

温泉場とはいつても、只宿屋が一軒と二三軒の家がある許り。この邊は紅葉が多い。秋はさぞと思はれる。姥子を過ぎると道は儉悪になつて来た。足下をにらめ乍ら歩く。と變な匂がし出した。ゆで卵の様な香? あゝさう／＼硫黄の香。道の石の色が變に白つぽい、硫黄の故か、木々がひねくれた様に曲つてゐる。かうしてゐる中に邊りが明るなつた。木々が皆灌木になつたのである。大湧谷まで一丁と道しるべがたつてゐる。皆の口から口へ、「一丁よ一丁」よと傳はつて行く、どこともなくこつといふ物凄じ響がきこえて来た。もう大湧谷だ。白い石の道をやつと上つて大湧谷へ出た一軒茶屋がある。こゝは風の少し強い日にはすつかり煙につままれるといふ。こんな所に住んでゐるとはすい分度胸のよいことだ。案内者につれられて谷の方へ下る。風が吹いて来た。前が見えない。急いで茶屋の方へ退く。茶屋ではその脇の穴の中で卵をゆで、ゐた風の向を見乍ら、一人づゝ谷を下る。細い道だ。草は強いと私はつく／＼思つた。少しでも煙の出ない所、響のない所にはきつと草が生へてゐる。青々として、一段と緑が濃い様にさえ思はれる。大湧谷もすぎた。

山の中腹を開いた道は続く。暫く下つて強羅に行くべくケールブルカーにのる。随分の傾斜だが車体がその様に出来てゐるので、少しも動揺しない。車は除々にすべる。五分許りで無事着。

強羅からは再び徒歩、宮の下についた、こゝでお晝といふ豫定だが通り越す。

大平台からは電車。はき物をかへる。ピーと氣笛の響。電車は隧道に入つた、――明るみへ出た、トンネル、又トンネル、十二三も通つて湯本へつく。のりかへ。「あと三十分で小田原ですよ。」と先生が仰る。心持よい風は頬をなで、リボンをひら／＼させる。山かと思へば河。河かと思へば海。三十分も東の間。汽笛と共に小田原に電車は入つた。これより、汽車になるのだ。

(白石二三子記)

國府津から江の島へ。

「辨當々々」「お茶お茶」賣子の聲の賑やかさ。ピ。汽笛一聲發車。この邊の文化住宅の多いこと。桃色のはめ、青いふちどりの窓、赤い瓦やとたん屋根。地震の時を考へか、純日本式の建物は本當に少い。山をきつた赤土。その上に緑の草が夏の日をうけ、て輝

いてゐる黄金色づいた麥、それを刈る百姓の姿がチラホラ見える。水田には若々しい淡緑の早苗が可愛くきれいに植ゑられてある。

ガタン、ゴトンシュー。汽車は音を立てながら、黄金の麥の間を進む。

氣持よい青葉を渡る薫風をあびて、夢の國へ誘はれるのを覚える。青葉の並木、黄金の波。鐵橋に來た。水が少くて洲だらけだ。又文化住宅がつゞく。

二の宮。大磯。別荘の多いのが見につく。平塚驛。海岸が見え出した。松が澤山植つてゐて千本の様に氣がした。

藤澤。電車に乗りかへて、音楽とすれすれに走る。片瀬着、目新しい貝細工の店の軒を並べた細い道をさん橋までたどりつく。長い、長い、棧橋を渡るにつれて江の島はだん／＼濃く、はつきりと見え出した。

渡りつくして、江の島。
(岡村律子記)

海も島も赤い。かなたに帆船が數隻浮んでゐる。棧橋を渡りつめた所に鳥居がある。そこから道は坂になつてゐる。すぐ岩本樓といふ看板がめにつく。こゝか

今夜の宿なのだ。

一休みして江の島見物、まづ江島神社及江島の中澤神社參拜、後、細い階段許りの道を行く。兩側には貝細工やが軒を並べて、客をよぶ聲かかまびすしい。ふりむきもしない私達を女らは根氣よく誘つてあきらめず、はては「お歸りにおよりなさいましょう」といふ絶壁の上の茶屋の下には海水が寄せては返して岩を洗つてゐる。すぐ下で海士があわびをとつてゐるといふ。

岩本樓には私達の外二組の生徒が宿をとつてゐた。夕焼がみんなの顔を赤くそめてゐる。海も家も緑の木もみな赤い。パツと燈かついた。廣間にはもう夕食の仕度が出来たらしい。

夕食後九時迄自由外出。晝の疲れも忘れて風呂敷をかへて宿をとび出す。まづ向ひの家をひやかす。別に目にとまつたものもない。今夜は月のない晩だ眞黒な水がひた／＼と岸によせてゐる。七里が濱の方に灯がちらちら見える。皆無言で燈を見つめてゐる。

「歸らない？」とたれかさういつた。友は無言でうなづいた私達。は涼しい風を背にうけ乍ら宿に歸つた。

旅の一夜

(勝俣美重記)

うれしさに疲れも忘れて、今日一日の物語は中々つきようとしてもしない。容易には寝られさうもない人許り。床についてからの賑かさ。それでも夜が更けるにつれて、次第／＼に静になつて來た、高いびき、寢言。この間を縫ふて、かち／＼と夜廻りの拍子木の音あたりはしんと静りかへつて行く。

三時頃起きて髪を結つてしまふ人があるかと思ふと皆がお床をたゝんでしまつてから大きなあくびをし乍ら、不思議相に邊りを見廻して飛び起る人もある。やがて大廣間は整然とされた。心地よい潮風に吹かれて朝食。六時出發。棧橋を渡り切つた砂地に下りて記念撮影「誠にすみませんが、お顔を一寸拝借」と寫眞やさんの愛想よさ。皆のきどり様の面白いこと、寫してしまつて一度にごつと大笑ひ、私は動いたとか、笑つたとかあとのさわぎも大變だ。

小高い山、静かな海、名勝稻村崎など電車の中でながめる。やがて長谷についた。有名な露坐の大佛は地震の爲に頭が前にかたむき背中が丸くなつてゐる。隨

分やさしいお顔だこと。といひしれぬ優しさの中に。何となく極樂を想はせる。

觀音堂は古くきたないけれど、中の大きなてうちんが、古めかしく、なつかしい。正面に奉安の本尊十一面大悲觀世音菩薩の尊容をおがむ。長谷見學はこれでおしまひ。電車にのつて鎌倉へ行く。

鎌倉の空高く二三臺の飛行機が、羽音高くまつてゐた。丁度吾等を觀迎するかのやうに。

(佐々木千鶴子記)

鎌倉見物

鎌倉で電車を降りた。天氣は曇り勝だが見物にはむしろ好都合。緑滴る松の並木の間を鶴ヶ岡八幡宮に向ふ。大通りの真中に、八幡宮の參道は長く／＼つゞいてゐる。その兩側の土手にはすつと櫻の木が植ゑてある。春であつたならば——と想像はれる。

長く續いた石段の左にその昔實朝公を殺した公曉のかくれたといふ大銀杏が、こんもりと繁つて昔を物語つてゐる。

神殿は皆朱塗。本殿は修理中だつた。神奈川師範學校の横手の道を通つて、櫻の長い並木

路を鎌倉宮へと足を運んだ。

鎌倉宮にて護良親王を幽閉し奉つた土牢を見る。口狭くして中は深く望めば暗く陰惨な氣。心を打つ。親王の御上を忍び奉れば感慨無量である。それより寶物館を拜觀し細い道をたどつて頼朝公の墓に參拜した。公逝きて幾星霜。英雄墓もこけむして、僅に昔日の面影を傳へてゐるのみである。

忠魂碑。日蓮辻説法跡。頼朝屋敷跡などをへて、停車場へついた。十分間休息して横須賀行の列車にのる。汽車は山と山との間を走る。流石に丘陵地三浦半島であることを思はせる。トンネル七つを越して、横須賀に近づく。窓からちら／＼と見える軍港の眺。

あゝ何といふ壯觀だらう。港内の軍艦數十隻さすが日本一の軍港だ。海軍工廠の煙突は林立し、黒煙は空をそめる。後に山をひかへ海は底深く、半島は突出して灣を抱く。實に要害堅固な土地である。第一班第一組の先頭として先生の後にしたがつた。海軍々需部。海軍購買部などを經て鎮守府人事部にいたる。こゝで晝食をとつた。

横須賀にて

(木塚いと子記)

晝食後、海軍將校のお話があつた。

「女子は何故に軍港見學の必要があるか。

我國の海軍の現況はどうか。

軍艦の本務は何にあるか」

といふ様なことについて。御講話あ後、案内者につられて見學を初めた。先づ最初は、潜水艇私はずぐ話にきく日本海々戦の有様を思ひ浮べた。次に航空母艦、實に大きいものだこれは外部だけ、内部は陸軍の兵にも見せない様だ。

黒煙を勇ましく大空にはいてゐる、長門、榛名を遠くながめつゝ、一行は戦艦警手にのつた。中の各部屋々々を見て如何に軍隊生活か規則正しいかといふ事はつきり知ることが出来た。艦の中に神がまつてあるこれが、この艦の守護神になるのださうだ。つまり吾らの町村に氏神様があるのと同じことであるやがてもその甲板にもどつて寫眞をとつた。私達の軍艦見學もいよ／＼終をつげたのである。艦を下りてしまふと流石に名ごりが惜しまれて幾度も／＼ふりかへつて見た「さらばわが軍港よ。横須賀のまちよ。」

大船で乗りかへ、やうやく東海道線におちつくこと

が出来た。窓からながめると、あたりは紫の夕もやにぼんやりとけむつてゐる。もう日も暮れる。山北邊で全く暮れはてゝ民家に灯がつき初めた。

小山。すその。三島。沼津の燈が見えはじめ。なんとなくうれしさとなつかしさで、胸が一杯になる。汽車かついた。

ホームに降りたつた時、ふと淋しさが涌き上つて来た。たう／＼旅行も終つてしまつたのだ。

大空には澤山の星がキラ／＼と輝いてゐた。

(中島富美子記)

東京日光方面旅行記

十五年度 三西 小山 壽子

牛込驛で下車し靖國神社へ向ふ。祖父に手を引かれて、麥藁細工の籠をほしがつた幼い頃の思出がおぼろながら頭に浮ぶ。幾百萬の忠勇義烈の魂が永へに眠る社殿であると思へば眞心こめて禮拜した。踵をめぐらして木立の下を通り、遊就館の前を過ぎた。口径十五吋以上もありさうな大きな砲口其他の大砲小砲何れも其の當時を偲ばせる物ばかり。門内には飛行船の模型

のやうなものがちらと見えた。何處をどう行つたやらの記憶に残つてゐないが、聖徳太子奉讃展覽會場の前を通つた。帝室博物館に入る。大きな昔の門に東京帝室博物館と大書してあるのを見ると、何故か姿勢が正され心が緊張した。綺麗に刈り込まれた小さい芝生の上になん／＼へられた池の静けさ。晴天の日光を浴びて、樹の緑芝の緑が照り映える。陳列室に入つた。部屋が少し暗く何事かを秘めた不思議な宮殿にでも入つた様な氣がした。足利時代豊臣時代徳川時代等と分けてある水晶。翡翠。瑪瑙。其他種々の床置物昭憲皇太后の御使用品。或は古代土人の刀劍。金具等の貨幣。埴典。其他大きなものでは。金蒔繪の大長持箱、塑像、歴史上の參考品ならざる物はなしである。館を出て上野へ行つた。廣い道路の兩側の櫻樹には今年もあの雲と群る櫻花が愛らしくほ／＼えんでゐた事だらう。五重塔を右に見て上野高台地に行つた。一眸のもとに展開せられた大東京の盛況。煙突の林立、網のやうに、張られた電線。電車の響。自動車の警笛。自轉車の疾走銅像の西郷さんが後に悠然と構へて私共を見下して居られた懐かしい動物園にも行つた。小鳥類。魚類。獸類と順

々に見る。大象の所でもつと悪戯がしたかつた。

日光にて

十五年度三東 山中 榮子

喜に満ち／＼てゐる私共の心を曇らせたあの冷い昨夜の雨もからりと霽れて宿屋の窓から眺めれば山の緑が目覚むる許り鮮やかだ。

青い空輝やかしい日の光、私共の心は又喜びに躍つた。一夜の宿、神橋館に別れを告げ私共百三十人は再び水色の長い列を作つて日光山に向つた。間もなく大谷川の畔に出た。

神橋の朱欄は山の緑に映え雪と碎くる大谷川の流に映じて何んとも云へない一幅の繪であつた。長坂を上りまづ輪王寺の三佛堂より拜観した。薄暗い大きな／＼お堂の中に三つの矢張り大きい佛様が神々しく金色に輝いてゐた。

『東照宮』そう口さすんでもまだ見ぬ私共の目の前には華やかな麗しい社殿が浮ぶのであつた。長い間私共の夢見てゐたお宮は今近く私共を待つてゐるかと思へば歩調も自ら早くなる。正面の大鳥居をくゞれば朱塗

の五重塔老杉の濃い緑に映えて美しい。

石段を上れば表門があり、門の左右に塀を廻し右に三神庫境内唯一の素木造の厩には見ざる聞かざる云はざるの三猿の彫刻があつた。

御水屋を過ぎ多くの燈籠を眺め石段を上つた。飛越の獅子も私共には珍しく、鍾樓、鼓樓を左右に眺め石段を登ればおゝ其處には夢に繪にのみ見た陽明門が繪からぬけ出たやうな姿を表してゐた。

中通の天井には狩野探幽の描いた昇龍降龍の墨繪があり、樺の白塗の丸柱には雲紋の彫刻が施され裏側左角の一本は同じ雲紋の彫刻が反對なので逆柱と呼ばれるそうだ。その他目貫龍唐子の丸彫牡丹に獅子、木理の虎等精巧な彫刻をもつてあの大きな樓門が形造られてゐるのに今更驚いた。細かな／＼彫刻を一々丁寧に見れば日暮らしの名にそむかないだらう。

唐門は外國の名木を寄せて作つたものだから矢張り壯麗であつた。

拜殿はなほ私共の眼を驚かす麗しいもののみであつて、欄間の百花百鳥、唐戸の羽目の牡丹、唐草の彫刻、光澤のある蠟色塗りの勾欄、殿内の柱金欄卷、金

はかう考へた。

神秘な自然の美に恵まれた緑濃き日光山の中に華やかな麗しい美術の花が永久に萎むことなく爛漫と咲き亂れてゐる。この精巧な麗しい彫刻建築にはふが如き繪畫は當時の幾多の良匠名工の魂ではないか、あらゆる美術の粹はこの日光山に藏せられてゐると云ふても過言ではあるまい。

あの戦國時代の多くの勇將の收め得なかつた天下の政權を己が掌中に握り、三百年の幕府の礎を固めた聡明な幸運の英雄家康の永久に眠る所としてふさはしい感じがした。

日光より中禪寺まで

十五年度三中 田川美恵子

帝高山植物園を一覽して出た時「大空俄にかき曇り」とは形容し過るかも知れないがポツリ／＼と大粒の雨に打たれた。こんな雨で日光山へ登れるかしらと不安の雲に被はれながら、電車に乗つた。びつしより濡れた鞆を掛けたまゝ身動き一つ出来ない。がた／＼約一時間も走つたらうか、降りた所は馬返し。お茶

泥地に書かれた麗しい繪の襖戸、格天井の龍、東の間の天井、紫檀黒檀を用ひた大羽目に施された、その彫刻その蒔繪、總て善美を盡した裝飾には驚く外はなかつた。

本殿の美は云ふまでも無いけれど一般拜観は許されない處である。

左甚五郎の作と云はれる眠猫は是亦眞に迫る精巧なものであつた。

私共は長い／＼石段を登つて家康の墳墓に詣でた。お墓は唐銅の寶塔であの鎌倉時代の英雄頼朝の苔むす墓に較べてほんとに感慨に堪へなかつた。

一度廟前に立てば三百年の昔咲き誇つた徳川氏の榮華と勢威を目のあたり見る感じがした、陽明門に別れを惜しみ薬師堂に寄り鳴龍の不思議を語りつゝ天をも摩する様な杉並木の小道を二荒神社に向つた。

二荒神社拜観後大猷院に向つた。

仁王門石階上の牡丹門、唐門拜殿、其の彫刻の麗しさ精巧な事繪筆の眼のあたり匂うてゐるかの様のは東照宮に劣つてゐなかつた。

晝尚暗き老杉の生び茂る小道を植物園へ急ぎつゝ私

屋で足を休めながら、お腹をこしらへ元氣を回復した長い列をつくつて自然の光景を賞しつゝ、中禪寺へと歩を運んだ。雨はもうどうに霽れて頭上には柔かい陽光さへ輝いてゐた。實に都合のよいお天氣だ。山道に雨にまでお供をされては困つてしまふ。

案内樂な山道。自動車も通れる筈。廻り角を數へながら大分登つた、ぬる／＼したやうな崖の上にある切株が誰かか腰掛けてゐるやうに見えたり、黒く焼かれた木の轉つてゐるのが犬が寝ころんでゐるやうに見えたのは面白かつた。

廻り角を三十も數へてきたらうか、一軒の掛茶屋があつた。此處から見えるのが方等、般若の瀧木立の茂みに白布が掛け渡されてあるやう。又雨が一しきり降つて來た。黒い洋傘の行列となる。一心に歩いたからか体は少しも寒くはないが矢張り高山だけあつて冷たい。口から吐かれる氣息の白く見えるのにも氣付いた。「椽の木」「白樺」等の珍らしい樹も茂つてゐた。

油紙を肩に掛けた女連が黙々と山を降つてゐる。いつか雨はやんでゐた。後列の方々はもう大分疲れたと見えて隊がかなり長くなつてゐるので少時休んだ。

うに柵を廻らしてあつた。と又急に叢のやうなものが降つて來た。その中をレトキサイドホテルに向つた。

海のやうな中禪寺湖が見え出した、と同時に西洋館の廣い建物、私共は躍る胸を抑へて入つた。

十五年度三西 小山 壽子

日光驛を發して途中恙なく再び上野驛を踏んだ。東京の町の賑かさに氣をとられ、淺草の混雜を思ひうかべて知らず／＼の中に足が進む。もう淺草にも近い。急ぎに急ぐ。想像した様に日曜の日が思ひやられる程の人出であつた。淺草寺へ參詣して直ぐ、新築後の中店を通る。店頭の色艶かなことに驚かされた。

電車で目的地昇龍館に向つた。旅行最終の宿泊。嬉しい様な悲しい様な氣がした。

翌朝お茶の水驛で待つてゐる時に女生徒を見た。沼津なら清い空氣を吸ひながら、自然の美しさを味つてゆつくりする所を、何故か急速力で歩いて行く。こんなにしなければ東京の生活は中々忙しいのであらう。電車に乗り品川驛に降りて、義士の魂の永久に眠る泉岳寺へ行つた。想像してゐたお寺よりもずっと小さい

私が蹲んだすぐ足許に紫のあせた、すみれがたつた一つ淋しげに咲いてゐた「しをらしき花よ」と口吟んで立去つた。水のせゝらぎに混つてチリン／＼と物懐しげに聞える鈴の音、ふと前を見ると一匹の馬を引つばつた馬子が呑氣さうな足取りをして上つて行く、昔の山越へを連想する。大分歩いたと思つたら、下で見上げた煙つた高い所に違ひない、眼の前が薄く霞んで判然としない。高く聳えてゐる青葉の木々も、崖も上の方ばかり見えて下は雲にでも包まれたやうに、ぼつとしてゐる。まるで浮繪のやうだ。廻り角の數もだん／＼多くなつて行く、八十と勘定した時にはもう道も平になり、家もあちこちに點在して來た。今頃水仙が見られるのも高山なるがためであつた。いよ／＼到着した所は華嚴瀧、壯觀々々。銀河九天より落つといふのであらう。恍惚と見入つた時、瀧の廻りの大岩が廻るやうに動き、はては自分の体までもふら／＼としさうになる。勢よく落ちて來た水が一度にどつと割れんばかりの勢で瀧壺に水煙を上げて落ち込み涌き返る光景を心行くまで眺めた。落口の廻りには熊笹が生ひ茂つてゐる、そこには容易に飛び込めないや

様に思はれた。入つて正面が寺で、左手の石段を昇つて行く途中に、淺野長矩公の奥方のお墓があつた。段を昇りつめた所に、大石良雄以下四十六人の墓が並んである。線香の煙が長くゆるやかにたち昇つて何處ともなく消えて行く。拜禮後、墓に刻んである名を讀終つて遺物館へ入つた。義士の着物。武器類又は長矩公の御刀。奥方の御使用用品等大分年經た爲、中は朽ちて見るかげもないものがあつた。驚いたのは鎖襦袢、私共が假に着たとしたらとても一町は歩けまいと思はれた。再び整列して日比谷に向つた。日比谷公園に入り小學校時代に行つた見覚えのある門を入つて池に出た今少し時期が早かつたら、つゝじの花で公園が赤に牡丹色に彩られてゐたせうに。放射状になつた周囲の花壇には、尖草草、虞美草、西洋草花の種々か色とり／＼に咲き亂れて、寫生に餘念のない人も居た。ベンチに腰を下して晝食をすました。公園を出て暫く歩き駒に跨つた楠公の銅像を仰いで、宮城前の廣場に出でお堀の前に整列。姿勢を正して最敬禮を行つた。ふり返れば、地は美しく掃き清められ、前を仰げば、聖帝在します宮城の石垣が高く聳えていとも嚴かである。

記念の撮影をしてから又もや活動の巷に出て松屋へ入った。入口の化粧品棚の香水が眼を射る様に輝いて見えた。それよりも正面に造られた旗艦三笠の一部、皇國の興廢此の一戦にありの信號を掲げた時の光景。正面に立つ偉大夫は、誰の目にも東郷元帥だとわかつたでせう。左右に控へ將校方、信號兵人形ではあるが毛の一本一本から皺の寄せ方眼の輝きまでよくもこんなことに出来たものと、その精巧さ又この將校方を、人々の多く集まる入口に飾るといふ考案のよさに思はず感歎の聲を發した。衣服、帯地の賣場は見もせず直に玩具部文房部に行つた。見ると皆弟に買つて上げたいものばかり「姉ちゃん僕に買つて来ておくれ」「僕にもね」と出發前に頼んだ弟の顔が目前に浮ぶ、「有難う」とお土産を抱へて飛び廻る弟の姿を想像しながらあれこれ品を選んだ。

龜田さん達と屋上庭園に上つて見た。此處でも東京市中が見渡される。何萬といふ数知れない煙突の下に幾百萬の人々が生活の資を得るために、汗ほこりにまみれて働いてゐるに違ひない。美しい内部の品のために酔つた様な顔を風に吹かれて、やつとすがすがしい詰められた參道を進んで外宮參拜、電車で内宮に向ふ倉田山の下で、下車し、晝食後、徴古館を見る。原始時代の土器、鎌倉時代のものとも思はれる鎧冑、さては十二單衣に緋の袴等、古なつかしい風俗文物に接した。これより内宮へ。宇治橋を渡れば、即ち神苑である。

太古ながらの老杉、その影深きわたりより、廻りて流れる五十鈴の清流も神代まゝの玉琴をならして、我が皇統連綿としてつきさせ給はぬ事を物語つてゐる如く……

こゝ下口すゞぎ、手洗へば、身も心も引締るを覺えた。縁深き參道を縫うて御質素な白木造りの御神前に詣ふれば、只なんともいへぬ有難さに胸迫つた。それから電車で二見へ……

名所夫婦岩まで十二丁。途中天の岩戸とかいふ小さな真黒い洞の前を通つた。二見の浦へと重い足を引づつて辿りつけば、何の事、海中といふより海岸に大小の岩に太いおしめ繩が張つてあるのみ、一寸失望した。

歸りは小石ばかりの濱傳ひ、眺めやる伊勢の海、靜

心地がした。やがて外へ出て整列した。もう見學の目的も略々達せられた。丸ビルの中を一巡していよいよ東京驛に入つて控室の一隅に腰を下し發車時刻を待つ事になつた。待合室の天井の中央に取り附けてあるラヂオ擴聲器からもれるざら聲に驚かされ遂に車中の人となつた。

沼津——鳥羽

十五年度四年 乙竹 篠子

六月一日、曉の風身に浸みて一番鶏の聲聞く頃、私達の嬉しい心に乗せた汽車はホームを離れた。時に一時七分。

ウトウトとまごろむ旅の夢から醒めたら、汽車は丁度濱名湖畔を西へと走つて居た。折から來だ明けきなぬ黒色の湖、小波靜かにゆらいでくだける灯の影二ツ三ツ。五時十分朝食をすませ、六時二十二分名古屋に着く。四十分計りの見物に三々五々連立つて驛前の路をふらつく、大きな町であるが、いかにも塵の都といふ感がする。七時四十分過ぎ再び車中の人となり、龜山でのりかへ、十一時近く山田着、すぐに玉砂利敷き

かにないで、夕日にはえる眞帆、片帆、遠くかすかな汽船の煙も懐かしい。

また／＼歩を續けて六時六分の鳥羽行に乗り込んだそれから約十八分の後鳥羽驛に着いた。其の頃は日も大分かげつて山なみの影落してゐる所通つて長門館へ着いた、そして疲れた足を宿の二階へ投出し、又一杯のお番茶に喉を濕した、再生の思ひとは正に此時であらうか……

夕食後お湯に入り、八時から九時迄の外出、もと／＼漁師町の事とて、夜景は淋しい。かくして夜十時過ぎ、黒い志摩の波と、其處に瞬く灯に守られながら、疲れた中にも楽しい旅の夢をたどつたのであつた。

鳥羽——奈良

十五年度四年 飯塚 靜

六月二日
鳥羽で旅の第一夜を過した私達は、翌朝奈良に向けて出發した。汽車からは美しい鳥羽の海がよく見える警笛と共にゴーツと暗いトンネルに入つたかと思ふと

たちまち青い海原が目の前に迫る。そして緑の美しい木々が茶色の地膚と共によく調和してゐる島が、私達の目をふと愉快な気分にはきき入れる。島、トンチル、又島、又トンチルが一瞬々々の内に現れては消えて行く、この美しい鳥羽とも別れて、奈良へひた走りに行くと……午前一一五五分奈良着——

先づ細いしなやかな足と優しい眼を持つ鹿が餌を求めて顔をすりよせる愛らしい姿が第一印象に残る。宿に荷物をたくして、私達は武甕槌神、經津主神、天現根命を祀る春日神社に向つた。

悲しい姉背山の傳説ある塚を初めに第一鳥尾をぬけ明治天皇が奈良に演習なされて、宴會をお開きになつた御跡をすぎて行くと、左側に鹿の像が置かれてある此處で「第一神の甕槌の神が白鹿に乘られて春日山におうつりになつてからは、春日と鹿はつきものになつてゐる。」と案内人が説明する。この多く群りゐる鹿の保護として、あけびの木が植えある。そして毎年十月に鹿の角切りと云ふ盛大な儀式を行ふさうである。初夏の輝かしい陽光の洩れ来る青葉蔭で、しなやかな足を投げ出して静かに何事かを考へてゐる鹿は古典的

な奈良をそのまゝの姿ではないだらうか。可憐なその背に手を置き、奈良の都の物語りを尋ねたい氣がする燈籠の敷の多いのには驚いた。金の立燈籠拾一、金の吊燈籠九九〇、木の立燈籠一六、石立燈籠一七八九、これ等をともす油は春日神社のみにあるひよろ長いなぎの木の実からとるさうだ。そしてその油煙をどつてねつたものが有名な神社の墨である。若宮神社を経て本社に行く。

珍らしいリンゴの木が植ゑてある。その庭をリンゴの庭と云ふ、穫入れどき農夫が稻を差上げるので、稻垣と名稱のついた垣もある。朱塗の御社と樹々の緑とが、びつたり調和して感が好い。皇后陛下御下賜の御簾や近衛家より賜つた燈籠や、金の樋等貴重なものも澤山ある。左甚五郎の意匠になつた普通俗人が見たのではつまらないものどしか、思はれぬ塵にまみれた廻廊、七色の木からなつた神木を見た。土産物を買る優しい關西辯に心をうばはれ歩みながらふと、前を見ると、なだらかに美しい曲線をなす小山、若草山だ、大宮人の袖翻へして舞ひ、歌ひ、宴に耽つた有様をおもひ起す。全体若草に包まれ、青松の點在してゐる小高

に龜が呑氣さうに甲を干してゐる。

それから私達は疲れた足を宿に運んだ。

奈良の夕暮は美しい。

宵闇のしゞまはしつとりと古都奈良を包む。五重塔あたりで埒に歸る鳥が二つ三つ羽ばたきをしたまゝ、消えて行く鹿もねやにかへるであらう三々五々春日山の方に歸つて行く。彼等の今宵の淡い夢路は何だらう。たそがれゆく奈良!

法隆寺——大阪

十五年度四年 戸野谷ひで

可愛らしい、懐しい鹿とお別れして、約半時間の後法隆寺驛に着す。粗末なお茶屋に一休みして、所持品を預け法隆寺に趣く。私達は初夏の暑い陽に照らされて田中の細長い一本道を、棒になつた足を引摺りながら歩いて居た。暫くして山の麓に屋根が見え出した。

先づ境内の綺麗な砂に氣を奪はれ、ものさびた古庭に、限りない閑寂を味ひ、それから天王寺に向ふ。車内でお辨當を済まし、十一時に汽車を捨てて、すぐ天王寺公園に踏み入り、目新しい草花の間を通り、右に

い山だ。山焼の儀式の壯觀が思ひやられる。頂に登つた。紫に煙る廢都が静かに眠つてゐる。全く眠つてゐる。物音一つしない繪の都奈良は私達は何を物語り、何を教へようとしてゐるのか！懐かしい情緒に包まれて私達は何をうたつたならよいだらうか。

それから三月堂へ——天平時代と鎌倉時代の美術を奥深く秘めてある一名法華堂。

二月堂、四月堂を見る。次に東大寺に行く。奈良と云へば大佛を聯想する程、その名は知れ渡つてゐる大佛。流石に大きい。佛の高さ「五丈二尺五寸」面の長さ一丈三尺等と云ふ講釋はぬきにしても、實に大きい。その佛を入れた大佛殿が又々大きい。薄暗いガランとした御堂の内に塵にまみれて鈍く光る佛像を見るとき古代印度の大伽藍を彷彿させる。南大門には運慶、快慶の作の仁王尊がある。二つとも色は褪せ所々木はさ龍けて昔の佛は消え去せてゐる。

へ 五重塔を見て、猿澤池に、采女の職にある女官が御遇の哀へをなげいて身を投げるとき、衣を掛けたと傳る衣掛柳の影浸す猿澤池。昔の悲しい傳説は知らぬげ

は温室の大きい大きいバナナや、熱帯植物を仰ぎ、左には遙か新世界の通天閣を望みながら、青々とした涼しい藤棚の下へ出た。此處を通り抜けて、暑い電車通を真直に、天王寺へ足を運んだ。門を入ると、まあ物乞ひの多いこと、まるで此處の名物かと思はれる。池には龜が澤山重なり合つて甲羅を干して居る、丁度石を積み重ねた様に。参拜後すし詰にされ電車で造幣局を訪れる。間もなく立派な天満橋の前で、はき出され、市中第一と云はれて居る此の橋を渡つて、局に行く。門前でお荷物を下し、中に入る。規模の大きく、盛んなことが、第一番に私達の目を引く。中では、金、銀銅を平に展べる、丸く切るそれをお湯の中に入れて煮る、さます、刻印を施す、一ツ／＼目方を測る、ほんとに目の廻る程忙しく、又真剣に立働いて居る。凡そ一時間で見學し、之より有名な大阪城をめざして進む高く天を刺す記念碑、影なす櫻の並木の下を通つてだんだん近づく。先づ正面の大きな石におごろかされ、豊太閣の偉大な威光が偲ばれる。今は第四師團司令部が置かれてある。内濠は今水あせて葛が一面にはびこつて居る。私達は白い電光形の道をすん／＼歩み、高

く聳えて居る天守閣に登る。此處からは市中が手に取る様に見下ろされる。林の様な煙突から吐き出される黒煙は、晴天であるのに、空を灰色に染めて居る。暫く休んで此の高い天守閣にも足跡を残し、兼てから美しいと聞いて居た中之島公園へ行く。天神橋の真中から下へ降り、廣々とした運動場を過り、公會堂で禁酒に就いてのお話を伺ふ。此の間彼方でも此方でもお舟の漕ぎつづから、必度保津川で舟に乗つた夢でも見ていらつしやるのだらう。やがて異人口振の「ありがたう／＼」の聲を後に難波橋に出る。そしてあの名高い獅子の像を見ながら、豊國神社を素通りし、いよいよ朝日新聞社を訪ふ。今日は朝からお湯もお水も頂かないで、歩き續けた爲、非常にのどがかわいて苦しい。新聞社の前で列を正して見學する。唯騒がしいのと機械の速く動くのに氣をとられて、何が何であるかさつぱりわからない。三階まで一巡りして、元氣のない体を、漸くみかど屋まで運び込んだ。あまり廣くない三階へ通されて、愛嬌ある女中さん達のめづらしい言葉に笑ひながら、おいしいお茶で渴いたのどを濕ほし疲れた足

を

くりのばした。夜になると、晝の目ざわりがす

つかり美化された。あゝ、之が私達の理想して居た大阪であらうか？あまりにあつけない。けれども水の都であり同時に橋の都であると思つた。

大阪——神戸——京都

十五年度四年 奈良橋松枝

三時半起床、ともすれば見果てぬ夢を追はんとする眼を、冷たい水道の水に覺ましつゝ、漸く爽やかな朝の氣分を味ふ。手早く仕度を備へ、大阪辯宣しき女中さん相手に、朝食をとる。約十分の後一同車中の人となり、半ば眠れる煤煙の都を後に、灘酒で知られたる、灘の酒倉を車窓に見過しつゝ、懐かしき港町、神戸にと吐き出される。驛前に荷物を預け、心もさやかに身も軽く、南朝の忠臣楠公の眠れる湊川神社に参拜す。再び一同列を正して、大阪とは又異つた整ひを見せてゐる市街を通つて諏訪山公園にと向ふ。何と云ふ物靜かな懐かしい公園。素晴らしい神戸港の展望、四國の島が淡く遙かに海の紺碧と合して一幅の風景畫をばかし出してゐる。白帆の五つ六つ漂よふわたり。白砂青松の須磨明石と聞くも懐かし……。

「えらい生徒さんやなあ」幼い小供の口調に、大道構はず吹き出す。私達の姿は、間もなく見上げる様な巨大な洋館のみすらりと並んだ居留地の舗道を恰も外國に在るが如き、誇らしさも歩んでゐるのだつた程やかに濶歩する西洋婦人のすらりと伸びた足、今更に豚の如き洋服姿の自分達を振り返つて、今までの誇りも立ちすくむとは又滑稽な悲哀。大きな建物に吸ひ込まれ行く悠然たる、紳士、異國めいた陳列品等、皆自分達の瞳を廻轉さすに充分だ。税關其の他を見學して歩く中に、疲勞と睡眠不足とで生氣は失せるばかり長い長い道を神戸驛へ辿りついた時は、まるで、知覺を失つたものの様だつた。

何となく異國的な懐かしい情緒のほの匂ふてゐる神戸、明るい感じと、物悲しい暗い陰影との交錯したやうな、居留地。そして西洋婦人、支那娘眼ばかりギョロ／＼輝く印度人の頭の白い布、半意識の中になんか京都の停車場へはうり出された。迎へに來た宿の人に荷物を預ける。

憧憬の地、京都も、疲れ切つた私達の瞳にはあまり

に怨めしかつた。電車に少しくゆられ、再び重い足を引きづり、桃山御陵へと向ふ。途中、學生休憩所にて渴を癒し、稍々元氣を恢復して、砂利を敷きつめ美しく掃き清められた參道を登る。沿道の檜の奥深く茂れるも、何となく神々しく神靈に草木も伏すかと覺えてあな畏し。一同御手洗の水にて口をすすぎ、手を清め先帝の偉業を今更らに深く想ひ起しつづつ御陵に參拜す。それより桃山東陵を拜し、昭憲皇太后の御懿徳を慕ひまつる。乃木神社其の他にはさすがに身の緊張するを覺える。三條大橋行きに電車にて三條大橋に着、今宵の宿なる伏見屋旅館にまよこの様な體を投げ出した時、漸く京都に來たことを知つて今更の如く、美しき都を眺めやつた。暮色の中に美しく瞬く灯影に一同旅情を深くした。あゝ、明日は如何なる京都が私達を待つか。

京 都

平 田 の ぶ

兩親の温き膝下を離れてより五日目の曉はほの／＼と明けた。昨日の疲れの爲にか、まだ一人も起きてゐる

それより又疲れた足をインクラインに運んだ。インクラインより更に南禪寺に行き、そこから北野の、電車にゆられて、北野神社につき參拜の後。その後の道より金閣寺に向つた、赤土の道が數日來の晴天続きで歩く度にポコ／＼と埃が立つ。靴下までも眞白になる。その上日は頭から照りつけ、熱いことはこの上もない。歩くこと十三町、やがて鹿苑寺、俗に言ふ金閣寺に達す。この寺は足利三代將軍義滿の建立にかゝり、寺内には義滿公の遺物及狩野探幽と云ふ様な、大家の筆になる襖等を以て飾られてあつた。それから私共の目的たる三層の金閣に登る、楠の一枚天井、金箔のはげて見るかげのなくなつたのが、當時の榮華を語つてゐる。前面の庭を眺むれば自然の趣そのまゝの木石の配置は日本人思想の現れである。それより廣い庭を残りなく見物し、門前の茶店で、晝食をすませ、一休の後再び北野天滿に戻つた、そこで嵐山行の電車に身をまかせ、歌に名高き御室の里や、廣い嵯峨野の原を窓外に眺めてゐる中に、電車は嵐山についた。その名も麗しい渡月橋を隔て、綠滴るばかりの嵐山がくつきりと、澄み切つた大空に浮んでゐる。

る氣配なくかすかな寢息と共に皆楽しい夢路をさまよつてゐる。雨戸を繰る音が静な朝の空氣に響き、曉の寒さが夜着の間より入つて、旅の悲しさ緊々と胸に迫るを覺えた、その中一人二人の話聲が始まり、忽ちにしてこの室内は話聲、笑聲で埋つた。それから身仕度をして、朝餉をすませ、一同旅館前に整列し、御所拜觀にと向つた。京の大路を幾曲りも曲つて御所についた御所前は玉砂利を敷きつめ塵一つ認められない程清められてゐた。餘りの神々しさに。話を交はす人もなく黙々としてその砂利の上を歩き続けた。たゞ聞ゆるものはサツ／＼と砂利を歩む足音のみ……御所の御門につき一同敬禮をなす、此處が桓武天皇以來一千有餘年の帝都であつたのだと思ふと、心持が自然と改まつて襟を正さずには居られない。御所の次には平安神宮を參詣すべく歩み出した、長い／＼電車通り又は涼しい木蔭ある林を通りぬけて。一同の足が疲れ出した頃。平安神宮についた。神社は朱の麗はしく塗られた綺麗な建物で、その建方は御所の紫宸殿と同じ紫宸殿造りである。社の前には右近の櫻左近の橋が左右に控へ、朱の中にもその青葉が際立つて恰も繪の様である。

其裾を流れる大堰川は、幾つかの峽を縫つて、音もなく流れてゐる。一行はこの大堰川を背景に記念の寫眞をとつた。

峯に繋がれた屋形船。幾隻かのボートは私共の心をそゝる、やがて一同の希望は聞入れられて早一行全部は五隻の船の人となつた。船は緩かに揖して流れに逆上る。行に従つて兩岸の緑は益々濃く、河の面はあくまで青く澄む。岸の櫻は爛漫の春を偲ばせ、對岸の繪にも畫けない緑の楓は、花よりも紅である嵐山の紅葉を物語り、その昔大宮人の舟を浮べて、日夜詩歌管絃の夢を浮べたこの流れも。今はボートと變り、赤き日傘のチラ／＼と浮ぶも、時勢の變化のはげしいのを示してゐる。一寸岸について舳先を換へ。流れのまゝ、にをせば、上る時とは異りはや船の岸は見える。このまゝ、下流まで流されたい心を抑へ名残惜しくも船を去る。それからこの樂しかりし嵐山を後に歸りの電車に乗つた、四條で電車を乗かへ祇園に行つた。古代情緒の溢れる祇園の町を通りて、素盞鳴尊を祀つてある八阪神社に詣づ。京都一の遊覽地圓山公園は、神社近くにある。そこで祇園の夜櫻を見る。

最早夕暮近いので、急いで智恩院に行く。智恩院は東山の中腹に在り。その山門の大なることは全國第一である。智恩院を去つて、痛む足を引きづりながら、暮せまる電車通りを歩く、やがて懐かしい三條大橋が見えた。

「もうすぐだ。」と心の中にうなづく。

「お歸りやす。」ふと氣付くと、もう伏見旅館についてゐる。疲れた足を投げ出して暫く休み、夕食後、一行列を正し、先生に引率されて新京極に行く。新京極は町巾の狭いのに拘らず、所謂京ブラの人はなだれを打つてこの明るい巷を埋めた。その間を私共は縫ふ様にして歩いた。電燈の光は眩ゆく不夜城の様、飛ぶ様にして買物をすませ、又宿に戻つた。

人々は永久に再び味ふ事のむづかしい最後の夜なので、明日あるをも忘れて騒いでゐたが、何時の間にか夢に入つた。

京都——近江

十五年度四年 沼尻 里

今日も亦晴、恵まれた私達の旅も今日が最後と思へ

ば、何となく名残が惜しまれる。

三條小橋の宿を出ると、直ちに清水寺に向ふ。音羽山上に設けられた舞台よりは、峽谷の楓の緑をどほして洛西南のくすんだ街の屋根が見える。此所を發して方廣寺の呪の鐘。豊國神社、帝室博物館、三十三間堂と順次見學して最後に東本願寺に行く、神社佛閣に慣れた私達は宏壯な大伽藍にも別に驚かされない。

亦愛くるしい小鳩に戯れようともしないで、皆喉をうるはすのに夢中だつた。やがてお堂の左手に靴をぬぎ、大師堂にぬかづく。右が堂に續く廻廊に何か黒い魂がと思つて近くと、塵埃にまみれて、うづ高く巻かれた髪の毛の山、黒髪の繩である。偉大な信仰の力よ!!あれ程女の魂とまでされた緑の黒髪を惜げもなく何千何萬の犠牲が.....。宗教が人心を動かす峻嚴な力を深く暗示された。

午後十二時卅分。懐かしい京都とも別れを告げて、最後の目的地たる近江へ.....。

十二時四〇分頃、大津驛着、驛前の宿に荷物をたくすと、直に湖上遊覧船で、近江八景遊覧に出發する。湖水を圍む連山は蒼々たる緑の綫をなし、湖面は涼風に

騒いでゐる。瀬田の唐橋を上に見て川の様な狭い間を進む。水邊には初夏の香高い葦がしげつてゐる。水鳥の飛び立ちそうなる所である。石山港に船を待たせて寺に向ふ。土産物を賣る店の籠籠「石山の蟹符」と書かれた文字と共に人の目を引く。トンネルをなした緑樹をくゞると其處には古いみ堂がある。そのみ堂の入口の右に平安時代特有の窓がある。その昔、紫式部があの有名な源氏物語を書いた所かと思へば、昔のおもかげもしのばれて、床しい。み堂に入ると中は眞暗、その中にみあかしのみがゆら／＼ともえてゐるのは、丁度暗黒に佛の救ひのみ光を認める様で、尊い。此處を出ると、右手に岩根の眞清水がチヨロ／＼流れてゐたことも思はれるあとをのこして奇巖が幾つも峻立してゐる。石のきざしを上つて此處であたりの景色を見て船にかへる。堅田浮濟堂も唐崎の松も、粟津も矢走の浦も知らぬ間に過ぎてしまつた。近江八景一なる比良の暮雪は、雪なく、暮る、には間があり、唯青い峯が眼に入るばかり。三井寺港で船を乗りすると、運河に沿つて寺に向ふ。緑を縫ふ繪日傘が美しい。櫻樹が青々と茂つてゐる。

一帯に近江八景は夕が美しい。その清らかな眺をこそ愛すべきであるのに、巡覽が早かつた爲、期待を裏切られた感がある。

五時五十九分發上り列車で歸校の途につく。

あたりは漸く暮色に包まれて列車の窓邊は蛙の鳴音が淋しい。

諸役員表

大正十四年度級長

第一學期

○ 四 學 年

正級長 副級長

東	鈴木むつ	渡邊 幸
中	風間歌子	増田 貴美
西	稻葉すま	藤田 静子
○ 三 學 年		
東	村松はるの	奈良橋 松枝
中	飯塚しづ	森 たく
西	千秋恵以	沼尻 里
○ 二 學 年		

東	中	西	東	中	西	東	中	西	東	中	西
山中榮子	田川美惠子	小山壽子	金子福	田米開レイ	木塚いと子	梶本蝶子	島田たき	長島松江	伴野千代子	鈴木千鶴子	平田のぶ
和田あや	宮崎壽恵子	龜田愛	龜山信子	松田静子	内藤静	熊谷尚子	鈴木億子	旭敏子	木村照子	西川波留子	原百合子
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年

東	中	西	東	中	西	東	中	西	東	中	西
白井清子	小野基	勝俣美重	鈴木せつ	風間歌子	藤田静子	奈良橋松枝	飯塚しづ	千秋恵以	山中榮子	田川美惠子	小山壽子
杉山八重	芹澤政子	白石二子	渡邊幸	増田貴美	稻葉すま	村松はるの	乙竹篠子	沼尻里	和田あや	北川貞子	龜田愛
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年

大正十五年度級長

東	中	西	東	中	西	東	中	西
飯塚しづ	平田のぶ	伊野千代	山中榮子	田川美惠子	小山壽子	木塚いと子	勝俣美重	白井清子
堀内貞子	原百合子	千秋恵以	龜田愛	藤田けん	星野文子	岡村律子	多家房江	白石二子
年	年	年	年	年	年	年	年	年

校友會役員

會長	副會長	學藝部第一部長	學藝部第二部長	運動部長	會計部長	購買部長
五十嵐校長先生(八月マデ)	小林校長先生(六月ヨリ)	村松先生	高北先生	井口先生	北郷先生	間宮先生
大正十四年度	第三學年	第四學年	坂倉時々	伊藤春江	廣瀬こど	江藤君子

購買部委員

第三學年

武士はる江 木村照子

森 たく

小池ちよ 林田千鶴子

沼尻 里

第四學年

杉山まさ 梶本蝶子

鈴木億子

島田たき 大熊さよ

旭 敏子

學藝部委員

第四學年

藤田静子 風間歌子

稻葉すま 鈴木せつ

増田貴子 渡邊 幸

鈴木みゑ 鶴田華子

和田つる 佐藤はる

校友會委員

第四學年

熊谷尚子 高橋八重

濱野芳子

田川出鶴子 長島松枝

第三學年

伴野千代枝 村松はるの

飯塚しづ 森 たく

千秋恵以 平田のぶ

第二學年

小宮山貞子 長岡のゑ

堀 イウ 大原しづ

金子 福 龜山信子

木塚いと子 内藤 静

田米開レイ 松田静子

大正十五年度

校友會委員

會長

副會長

學藝部第一部長(學藝會、講演會等)

學藝部第二部長(圖書等)

運動部長

會計部長

購買部長

第一學年

東組 高見澤あい子

中組 佐藤かつよ

北川貞子

小林校長先生

鶴矢 先生

村松 先生

高北 先生

大井 先生

北郷 先生

間宮 先生

鈴木たへ

岡本政子

西組

大久保よし

小池やす

東組

第二學年

中組

大川 秀

前田 紫都

西組

杉山 やゑ

小野 基

東組

第三學年

中組

内藤 静

金子 福

西組

鈴木 伊勢

西島 田鶴

東組

和田 あや

杉山あき江

中組

長岡 のゑ

小野すゞ子

東組

第四學年

中組

眞野 ひさ

武士はる江

西組

原 百合子

西川 波留

東組

鈴木千鶴子

島田たづ子

中組

運動部員

東組

第三學年

西組

北川 貞子

山村喜久江

東組

二又川はな子

宮坂 すみ

中組

堀 イウ

吉川 美彌

東組

第四學年

西組

井出 徳子

岩田 喜子

中組

林 さわ

森 たく

西組

鳥野 文

小川 あつ

購買部委員

第三學年

東組

一杉 滿枝

飯田 つる

中組

野田まつ江

増山 富美

西組

小宮山貞子

伊海 良子

東組

第四學年

中組

沼尻 里

林田千鶴子

西組

金子 政子

木村 照子

東組

小池 ちよ

久松 みや

中組

學藝部委員

西組

第四學年

東組

堀内貞子

鈴木千恵子

中組

飯塚しづ

村松はるの

東組

平田のぶ

乙竹篠子

西組

伴野千代子

奈良橋松枝

中組

上島信枝

西組

千秋恵以

大正十三年度受賞生徒

褒状賞状受領者 (大正十四年三月)

◎在學四箇年精勤ニ付褒状ヲ受クルモノ

第四學年

西原文枝 山本美子 飯田のぶ 山本さき

◎本學年中精勤ニ付褒状ヲ受クルモノ

第四學年

大嶽とし 後藤喜久江 高橋靜枝 木村はる

工藤千代 飯田たけ 芹澤ちる 松井千代

杉本二三

第三學年

勝又甲子 梶本蝶子 秋山まつ 廣瀬さと

山口俊子 和田つる 栗田悦子 久川せい

眞野初枝 松井豊子 秋元ふじ 若林靜江

野田しづえ 杉山まさ 芹澤えん 藤田靜子

杉山乙女 久川貞子 渡邊 幸 杉山富子

濱野芳子 脇田くの 渡邊ふみ子 金刺雪江

諏訪部まさ 橋本秀子 坂倉時子 山本しげ子

杉山筆子 旭 敏子 稲葉すま

服部とら 酒井よし子 杉山つる

第二學年

野秋万里子 半田廣子 織田 靜 千秋惠以

眞野ひさ 田中光子 森 シゲ 木村照子

大野さく 井出美登里 金子幾江 奈良橋つや

片岡貴美 奥村秀子 菊地里久 久保田春江

金刺末子 杉山千代 三浦けい 長倉 達

前田 糸 芹澤秋子 老林とし 井出徳子

田代みねよ 東 はな 土屋ちる 伴野千代枝

淺沼恒子 石田わか 齋藤こま 鹽崎やす

金田富美子 船山うた子 山内さと 徳田 時

中村まさ子 遠藤さだ子 大川花枝 堀内貞子

林田千鶴子 一川あや子 小池ちよ 平田のぶ

山形正得

第一學年

芹澤 幸 吉村初枝 望月さき 田村きみ子

杉本芳枝 井口たけ 加藤初枝 齋藤花江

青木百合子 眞野けい 淺賀豊子 宮田仁子

渡邊とみ 蛭川千敏 宇野婦佐

青木壽枝子 大嶽はるる 大石ふさ江 長倉えい

◎學術優等操行優秀ナルヲ以テ褒状ヲ受クルモノ

第四學年

佐々木昌子 鈴木武津子 鈴木幸枝 木村はる

芹澤すみ 中島節子 森 茂枝

第三學年

風間歌子 稲葉すま 鈴木せつ

織田 靜 武土はる江 村松はるの 村松八重子

鈴木千鶴子 千秋惠以 平田のぶ 飯塚しづ

伴野千代枝

第一學年

山中榮子 龜田 愛 小山壽子

◎學術優等操行優秀ナルヲ以テ靜岡育英會ヨリ賞

状賞品ヲ受クルモノ

第四學年 佐々水昌子

◎學業操行共ニ優秀ナルヲ以テ石本獎學賞ヲ受ク

第四學年

鈴木武津美 鈴木幸枝 木村はる

第四學年

鈴木武津美 鈴木幸枝 木村はる

田中きぬ子 龜田 愛 川口喜代子 芹澤 愛

星野文子 片岡しげ 横山新子 川添てる

宮坂すみ 石原清子 市川幸子 鈴木初枝

水野富子 藤田けん 吉川美彌 勝又とし江

佐々木智恵子 木村伊佐江 川村るん 土屋さみ子

杉村嶺子 鷺巢さみ 遠藤さわ子 高木義子

芦川壽子 渡邊しま 川口ゑつ 河野芳枝

土屋かほる

◎學業成績ノ進歩特ニ顯著ナルヲ以テ褒状ヲ受ク

ルモノ

第四學年

中嶋節子 野田壽子 菊地はる 眞野きん

淺井伊志 木村はる 中村千枝子 中村富士子

千田しづ

第三學年

鶴田華子 島田たき

第二學年

武士はる江 久松みや 織田 靜 千秋惠以

金田富美子 堀内貞子

◎大正十四年度受賞生徒

第四學年

◎學術操行共ニ優秀ナルヲ以テ褒狀ヲ受クルモノ
鈴木せつ 藤田静子 風間歌子 渡邊 幸
梶本蝶子 稻葉すま 廣瀬さと 島田たき
◎本學年間學業成績ノ進歩顯著ナルヲ以テ褒狀ヲ受クルモノ

廣瀬さと 田上久米子 高橋八重 坂倉時子
藤田静子 仁藤叶代 諏訪部まき 若林静江
山口俊子 石崎 文 小笹とさき 吉田勝子
宮川ふじみ 江藤君子 土屋文夫 杉浦ゑい
和田つる 市川よし 梶本蝶子 福本晴子
金刺雪江 土屋はな子 坂倉さく 増田幸子
土屋まち

◎在學四ヶ年間精勤ニ付褒狀ヲ受クルモノ

和田つる 坂倉時子 芹澤ゑん 久川せい
眞野初枝 松井豊子 野田しつる 秋元ふじ
脇田くの 金刺雪江 濱野芳子 旭 敏子
◎本學年間精勤ニ付褒狀ヲ受クルモノ
梶本蝶子 杉山まさ 渡邊 幸 瀬戸文子

鈴木せつ 杉浦ゑい 森津留子 仁藤叶代
遠藤やゑ 西山 都 樋口敏江 増田幸子
小林いよ 齋藤歌子 渡邊ちゑ 杉山つる
杉山富子 若林静江 酒井よし子 宮川ふじみ
荻生篤子

◎學術優等ニ付靜岡縣育英會ヨリ賞品ヲ受クルモノ
鈴木せつ

◎同上ニ付石本獎學賞ヲ受クルモノ
藤田静子 風間歌子 渡邊 幸

◎就學以來十箇年間精勤ニ付希望社々記念品ヲ受ルモノ
杉山まさ 梶本蝶子 芹澤ゑん 杉山筆子
風間歌子 増田幸子 秋元ふじ 杉山つる
眞野初枝 野田しつる 脇田くの

二、第三學年以下

◎學術操行共ニ優秀ナルヲ以テ褒狀ヲ受クルモノ

第三學年

飯塚しづ 平田のぶ 伴野千代枝 千秋恵以
乙竹篠子
山中榮子 田川美恵子 小山壽子 小野すゞ子

第二學年

藤田けん 龜田 愛 北川貞子 和田あや
星野文子

第一學年

木塚いと子 勝俣美重 白井清子 白石二三子
田米開レイ

◎本學年間學業成績ノ進歩顯著ナルヲ以テ褒狀ヲ受クルモノ

第三學年

鈴木千恵子 島田たづ 乙竹篠子 武士静子
山形正得 鈴木一枝 宮本つね 鶴矢豊子
上杉若枝

第二學年

星野文子 増山富美子 天軸法子 二上文子
岡本喜久子 會田節子 小野すゞ子 坂 菊江
蛭川千敏 長岡のゑ 増山美根子 遠藤さわ子
野田まつる 石原清子 川口ゑつ子 加藤初枝
川田富美子 藤田けん 鈴木伊勢 芹澤 愛
小栗恒子 福本允子

◎本學年間精勤ニ付褒狀ヲ受クルモノ

第三學年

中村まさ子 木村照子 花崎みよ 三浦けい
井出徳子 大野ふみ 淺沼恒子 野口れん
鈴木龍江 大橋さくよ 秋元桃江 八木橋すみ
磯西初代 久保田春江 平松とくゑ 金刺末子
佐藤志津子 半田廣子 徳田 時 久松みや
島田たづ 小池ちよ 乙竹篠子 古谷ちよ
山形正得 鈴木一興 堀内貞子 菊地里久
鹽川かづゑ 鈴木千鶴子 大石とよ子 杉山千代
佐藤千代 千秋恵以 野秋萬里子 沼尻 里
芹澤秋子 笹井貞子 上杉若枝 井出美登里
竹中 幸 齋藤こま 一川あや子 片岡貴美
平田のぶ 岩崎たね 田中千代 市川はな
船山歌子 田中光子

第二學年

吉川美彌 大谷きよ 蛭川千敏 坂 菊江
大嶽花子 伊海良子 武田茂子 遠藤さわ子
川口喜代子 長倉ゑい 土屋きみ子 野田末子
横山新子 大嶽はる 加藤初枝 眞野けい
和田あや 川添てる 後藤ゑい 小池信子
森 初枝 鈴木伊勢 北川貞子 佐々木智恵子

勝又 靜 望月きみ 川村るん 大石ふさ江
 星野文子 藤田けん 漆間百合子 芹澤 愛
 杉浦のぶ代 田川美恵子 八木 愛 太田笑美子
 青水百合子 井口たけ 山本まつ 二上文子
 市川幸子 芹澤 幸 小栗恒子 阿野芳枝
 鈴木初枝 渡邊とみ子 勝又とし江 杉山嶺子
 青木壽枝子 鷺津さきみ 吉村初枝 田中きぬ子
 端山はつ 水野あい 片岡よし子 江藤ソノ
 齋藤花枝 植松ふじ江 宮坂すみ 渡邊好子
 土屋かほる 淺賀豊子 杉山長子 關トミ子

第一學年

大石さと 矢田ちる子 馬見塚八重子 中山八重
 杉山あや子 石井志津子 増山春江 杉山八重
 田代さくゑ 杉本早苗 東 さと 沼尻喜登
 加藤靜枝 栗原米子 植松幸枝 稻葉もと子
 川添マサ 上島靜子 渡邊よね 鈴木美子
 大和瀬清子 新井正枝 坂倉榮子 西島綾子
 鈴木芳子 丸尾 操 飛奈華子 藤本正子
 齋藤梅子 芹澤正子 遠藤よしの 太田夏子
 遠藤はる 米倉君枝 岡村律子 小早川つね子

森田利子 高村テイ 飯野雪江 古山茂子
 田米開レイ 木村一枝 松岡ゆう 水口菊江
 森田記美代 勝又しげ 植松かをる 齋藤千代子
 太田麻利 後藤藤興 宮内芳子 野田末子
 濱野とみ 竹中サワ 持田正子 田中いくゑ
 勝俣美重 石原靜子 佐藤通子 杉山けい
 後藤清子 渡邊壽々江 木塚いと子 谷北しづ
 植松まさ 鈴木ふさ子 秋山美佐尾 杉山 恒
 稻生明子 鈴木喜美代

大正十三年度校友會經費第三期精算報告書

(自大正十四年一月 至同年三月)

收 入

一金九百八拾九圓七拾三錢也
 內 譯
 金五百四拾六圓九拾壹錢 繰越高
 金四百參拾六圓貳拾五錢 生徒第三期分會費
 金六圓四拾貳錢 (一、七四五八分)
 金拾五錢 寄附金
 通告簿代

運動部費

一金貳拾八圓五拾五錢也
 內 譯
 金七圓 甘酒一斗代
 金拾參圓 バレーボールニケ
 金五拾五錢 石灰
 金七圓四拾錢 ボール空氣入及ボール
 金六拾錢 中奉書二十枚
 一金參圓拾錢也 會計部費
 內 譯
 金四拾錢 糊
 金七拾錢 出納簿一冊
 金貳圓 領收證五百枚
 一金貳拾圓也 基本金積立
 內 譯
 金貳拾圓也 基本金積立
 內 譯
 金貳圓 豫備費
 金貳圓拾錢 日枝神社謝儀
 金貳圓拾錢 校友會長ノ印
 金參圓 學藝品展覽會夜警辦當料

支 出

一金四百七拾五圓也
 內 譯
 一金壹百六拾壹圓參拾四錢 學藝部第一部費
 金參拾貳圓拾錢 學藝品展覽會費
 金拾五圓 故伊藤教諭へ香料及弔電料
 金參圓 井上教諭へ餞別
 金貳百〇參圓五拾六錢 川合きよへ火災見舞金
 送別會費
 (委細は原簿参照)
 金參拾五圓 大島先生へ餞別
 金五圓 鈴木つる先生へ餞別
 金五圓 鈴木きよ先生へ餞別
 飯田健次郎先生へ餞別
 一金貳百七拾四圓也 學藝部第二部費
 內 譯
 金壹圓參拾五錢 原稿用紙三十帖
 金貳百六拾六圓八拾錢 校友會報六百六十冊
 金壹圓拾五錢 讀出人四冊
 金四圓七拾錢 日本住宅百圖

利用品出品ニ對シテ

- 入會金
- 通告簿賣上代
- 利子
- 生徒第一期分會費
- 學藝部第一部費

支 出

- 一金壹百參拾壹圓拾錢也
- 內 譯
- 金參圓
- 金七圓
- 金八拾五圓參拾四錢
- 金壹圓
- 金參圓
- 金貳圓
- 金貳圓
- 金七圓
- 金貳拾圓七拾六錢
- 一金七拾壹圓參拾六錢
- 內 譯
- 金六拾九圓七拾六錢
- 和宮御事蹟外三十六冊代
- 學藝部第二部費
- 母の日會費
- 平尾道子へ香料
- 東山氏車代
- 玉木氏車代
- 鵜崎氏茶菓代及車代
- 桑原氏茶菓代
- 新入會員歡迎費
- 吉川周氏へ禮
- 杉山けいへ火事見舞
- 杉山周氏へ禮

荒麥一斗

- 故伊藤教諭追弔會諸費
- ボール一打代
- 手帖二冊

二荒伯講演費

- 七圓也
- 拾七圓五拾錢也
- 五拾錢也
- 拾壹圓五拾錢也
- 家庭園藝と庭園設計外三冊
- 收支差引金壹百拾九圓九拾參錢也
- 右之通りニ候也
- 大正十四年四月二十日
- 會計部長

大正十四年度校友會經費第一期精算報告書

(自大正十四年四月 至同年七月)

收 入

- 一金壹千拾貳圓九拾九錢也
- 內 譯
- 金百拾九圓九拾參錢
- 縣ヨリ獎勵金(廢物)
- 線越高

石 灰

會 計 部 費

- 金五拾錢
- 一金八圓參拾六錢也
- 內 譯
- 金八圓參拾六錢
- 一金百六拾圓也
- 內 譯
- 金百拾圓
- 金五拾圓
- 第一、二、三、四學年修學旅行補助
- 富士登山旅行補助
- 水泳補助費
- 水泳臺
- タンク五ヶ
- 青梅綿及釘
- ヨシズ四十五枚
- 錨三ヶ
- 大貫、角棒、丸太
- 針金及釘
- 糸
- 七寸竹三本
- 赤モス黒モス

戸棚臺三ヶ

運 動 部 費

- 一金壹圓六拾錢
- 一金壹百五拾四圓〇六錢也
- 內 譯
- 金貳圓
- 金五拾五錢
- 金壹圓
- 金貳拾五錢
- 金四拾五錢
- 金壹圓
- 金參拾圓參拾六錢
- 金拾八圓貳拾五錢
- 金五拾圓貳拾錢
- ケットボール三、テニスボール
- 庭球選手へ補助
- 庭球選手慰勞會菓子代
- パレーボール三、バス
- 輪修繕及釘代
- ボール一打
- フットボール中袋外三
- ボール二打
- 丸もの
- チット卷五
- バスケットボール臺二ヶ

大正十四年度校友會經費第二期精算報告書

(自大正十四年九月 至同年十二月)

收入

一金九百參拾壹圓貳拾六錢也

内 譯

金百五拾六圓參拾七錢

金貳圓八拾四錢

金六圓

金七百拾五圓拾錢

金參拾七圓

金拾五錢

金參圓貳拾錢

金拾圓

金六拾錢

綴越高

八王子高女水泳部ヨリ寄附

入會金

會費

寄附(運動會ノ際)

利子

雜收入

贊助員寄附

通告簿

支出

一金七拾壹圓拾五錢也

内 譯

金貳拾圓

金壹圓拾五錢

金參拾圓

學藝部第一部費

五十嵐前會長へ餞別

同前御見送り入場券

市川先生へ類焼見舞

金壹圓九拾錢

金貳圓

金拾圓

金六圓七拾六錢

一金八拾八圓也

内 譯

金八拾八圓

一金九拾參圓七拾四錢也

金五拾錢

金六圓拾錢

金壹圓九拾錢

金四拾五圓

金七圓貳拾四錢

金參拾圓

金參圓

茶碗五十

水泳ノ際水供給所ニ御禮

人夫四人

事力代ノ一部

答案用紙費

用紙八万枚

豫備費

石油罐二ヶ

展覽會用印刷代

荒麥一斗

富士五湖めぐり補助

馬力代

船及船頭代

薪(水泳ノ際)

次期繰越金

收支差引金百五拾六圓參拾七錢也

右之通りニ候也

會計部長

大正十四年九月一日

金參圓

金五圓

金五圓

金七圓

一金參拾六圓拾五錢也

内 譯

金五拾六錢

金九圓五拾錢

金八圓拾錢

金九圓八拾錢

金參圓七拾錢

金參圓九拾錢

金參拾五錢

金貳拾四錢

一金貳百貳拾九圓七拾八錢也

内 譯

金參圓貳拾錢

金貳拾四圓

金壹圓五拾五錢

金拾六圓拾錢

龍澤寺へ茶代

皇孫殿下御安産祈願幣帛料

皇孫殿下壽榮祈願式費

奥村ふじ弔慰金

學藝部第二部費

乾板二枚

洗心雜話外七冊

子供の科學十月號外四冊

物理學の要點外四冊

日本誇外一冊

少女の友十一月號外三冊

印肉入及印肉

レットテル二百枚

運動部費

ペンキ及ハケ

ストツブウオツチ

石灰三俵

靴下二十五足代

金貳圓拾錢

金四圓四拾錢

金八拾四圓貳拾壹錢

金四拾六圓

金壹圓參拾貳錢

金參圓

金拾參圓五錢

金貳圓

金貳拾參圓四拾錢

金四圓四拾錢

金壹圓五錢

一金壹圓六拾四錢也

内 譯

金五拾錢

金壹圓拾四錢

一金貳百四拾八圓四拾貳錢也

内 譯

金五拾錢

金八圓八拾錢

色モス大巾五尺

旅費(鶴矢先生外三名)

競技大會出場費

スパイク補助

紙テツプ外三點

マロク材料代

靴下二十一足

スパイク補助

バレーボールニバス

ケットボール一

ボール二打

色モス五尺

會計部費

紙入レ

封印外六點

大運動會費

糸繩十一尋

ハードル八ヶ

金四圓

金壹圓貳拾五錢

金四圓貳拾貳錢

金壹圓拾四錢

金五拾錢

金拾八圓

金拾六圓八拾錢

金六圓

金九圓五拾錢

金貳拾圓七拾九錢

金六圓

金參圓拾錢

金六圓四拾四錢

金貳圓參拾七錢

金壹圓

金拾五圓六拾錢

金參拾參圓八拾錢

金拾壹圓

金貳圓

金四圓九拾錢

パレール用柱ニ卷金ツケ

素繩五把外三點

藥品代

リボン二丈八尺五寸

細繩五把

音樂隊

賞品ソノ一

四寸花火三本

プログラム

封筒外六點

空彈一〇〇

呼子三ヶ外二點

印刷代外四點

石灰二卵十五ヶ

繩十把

パン百三十袋

人夫十二人外二點

太井産

親子井四

二十米卷尺

金拾壹圓五錢

金拾六圓五拾七錢

金五圓

金參拾七圓八拾錢

金貳拾九錢

一金拾貳圓參拾八錢也

金六圓四拾錢

金五圓九拾八錢

一金百七拾八圓七拾七錢也

金百貳圓四拾四錢

金參圓

金壹圓七拾錢

金壹圓八拾錢

金貳拾壹圓六拾參錢

金拾七圓五拾錢

金拾貳圓

金貳圓五拾錢

金四圓貳拾錢

金八拾五錢

金參圓

金六拾壹圓九拾七錢

金拾三圓五拾七錢

金貳圓五拾錢

金拾七圓貳拾九錢

金九拾圓

金壹圓九拾九錢

金四拾五錢

金四拾錢

金參拾五圓

金六拾壹圓六拾錢 展覽會用六ッ綾三反、天然四卷

一金貳拾圓也

金貳拾圓

金拾壹圓拾錢也

金拾壹圓拾錢

二五四

チユーブ外二點

体育大會經費

來賓用菓子

ガット張替外四點

のし紙

答案用紙費

半紙白紙二ペ

半紙二ペ

豫備費

東宮御成婚記念事業へ

神饌料

荒麥一斗

支出請求用紙五百枚

明治神宮競技大會出場費

鐵鋼張替人夫

スバイク補助

蒸菓子

ボール二打

中村少尉講演演辨當料及車代

妙法華寺へ茶代

金昌俊氏へ謝禮

卒業生へ一閑張

卒業生へリボン

筑前琵琶演奏車代

福引品

送別會菓子

ノシ紙、紙テープ、クレオン

染料代

送別會裝飾目籠代

饞別(橋本二五、井口五、鈴木、五、の三先生)

鈴木、五、の三先生)

基本金積立

積立

答案用紙費

二五五

金拾貳圓

收支差引金百五拾貳圓九拾七錢也 次期繰越金

右之通りニ候也

大正十五年一月七日

會計部長

大正十四年度校友會經費第三期精算報告書

自大正十五年一月 至同年三月)

收入

一金七百四拾九圓七拾貳也

内 譯

金百五拾貳圓九拾七錢

金五拾圓

金拾圓

金貳圓

金拾五錢

金五百參拾四圓六拾錢

支 出

一金參百圓貳拾貳錢也

内 譯

金七圓

金貳圓

長持一ヶ

會計部長

大正十五年一月七日

會計部長

大正十四年度校友會經費第三期精算報告書

自大正十五年一月 至同年三月)

收入

一金七百四拾九圓七拾貳也

内 譯

金百五拾貳圓九拾七錢

金五拾圓

金拾圓

金貳圓

金拾五錢

金五百參拾四圓六拾錢

支 出

一金參百圓貳拾貳錢也

内 譯

金七圓

金貳圓

金八拾五錢

金參圓

金六拾壹圓九拾七錢

金拾三圓五拾七錢

金貳圓五拾錢

金拾七圓貳拾九錢

金九拾圓

金壹圓九拾九錢

金四拾五錢

金四拾錢

金參拾五圓

金六拾壹圓六拾錢 展覽會用六ッ綾三反、天然四卷

一金貳拾圓也

金貳拾圓

金拾壹圓拾錢也

金拾壹圓拾錢

二五四

チユーブ外二點

体育大會經費

來賓用菓子

ガット張替外四點

のし紙

答案用紙費

半紙白紙二ペ

半紙二ペ

豫備費

東宮御成婚記念事業へ

神饌料

荒麥一斗

支出請求用紙五百枚

明治神宮競技大會出場費

鐵鋼張替人夫

スバイク補助

蒸菓子

ボール二打

中村少尉講演演辨當料及車代

妙法華寺へ茶代

金昌俊氏へ謝禮

卒業生へ一閑張

卒業生へリボン

筑前琵琶演奏車代

福引品

送別會菓子

ノシ紙、紙テープ、クレオン

染料代

送別會裝飾目籠代

饞別(橋本二五、井口五、鈴木、五、の三先生)

鈴木、五、の三先生)

基本金積立

積立

答案用紙費

二五五

一金拾九圓參拾六錢也

豫備費

內 譯

金五圓
金壹圓九拾錢
金五圓

亞鉛板塀下端へ金鋼張手間賃

荒麥一斗

女師第二部受験生附録

(塚本先生)旅費

封筒六百枚(記念事業寄附金入)

金四拾六錢

出納簿

金五拾錢

封筒一万枚代

收支差引金參白九拾九圓〇四錢也

內 譯

會報費

五拾圓也

秋鹿四郎氏寄附金

右之通リニ候也

大正十五年四月十四日

會計部長

東宮御成婚

奉祝記念事業會計報告

兩陛下銀婚

收入

一金壹千百八拾圓六拾錢也

收入總額

內 譯

金九拾貳圓

大正十三年三月ノ卒業生寄附

二五六

大正十四年三月ノ卒業生寄附

在校生寄附

職員寄附

桐樹賣却代

展覽會利益金

修繕費ヨリ

校友會豫備費ヨリ

金百參拾圓

金六百〇壹圓

金貳拾圓

金四圓五拾錢

金八拾圓六拾六錢

金百五拾圓

金百〇貳圓四拾四錢

支 出

一金壹千百八拾圓六拾錢也

內 譯

金參拾圓

金四拾壹圓參拾錢

金五圓

金貳百參拾八圓〇七錢

金八拾參圓四拾錢

金參拾七圓五拾錢

金參拾圓

金貳拾六圓

金四拾八圓

金參拾五圓四拾錢

支出總額

櫻樹植付人夫賃及支柱用竹及繩代

染井吉野櫻二拾株並運賃荷造

櫻苗植付人夫二人半

とたん板貳百枚及針金釘

庭園設計費

煉瓦七五〇本

砂、砂利代

三河セメント大樽四本

杉二間並貫上六入二拾束

温室の土臺及煉瓦積立

金貳百四拾圓

金七拾五圓

金拾圓九拾參錢

金參拾圓

金貳百五拾圓

收支差引殘高ナシ

右之通リニ候也

大正十四年九月一日

會計係

物置小屋建築一切費

亞鉛塀建設人夫參拾人分

パイプ代

鉢代

温室建築材料及建築費

大會費 (音樂會。學藝會。展覽會)

1、賞品費	1.23	1.23
2、音樂會費 (1)	41.02	42.25
3、圖書展覽費	4.92	47.17
4、家事展覽費	11.34	58.51
5、學藝費	4.04	62.55
6、裁縫陳列費	.22	62.77
7、賣店費 (しるこ)	.71	63.48
8、習字展覽費	.50	63.98
9、賣店費 (こゝろ)	1.63	65.61
10、雜費 (1)	33.16	98.77

11、同上 (2)

12、印刷費

祝賀費

1、接待費	12.70	12.70
2、式場費	4.70	17.40
3、追弔式費	17.30	34.70
4、菓子代	46.00	80.70
5、辨當代	70.00	150.70
6、門飾費	9.59	160.29
7、萬國旗	15.00	175.29
8、記念エバガキ	85.10	260.39
9、謝恩費	268.99	529.38
10、同窓會より	300.00	829.38
11、寄 附	24.00 (御厨銀行)	853.38
	2.00 (日枝神社)	855.38
	2.00 (淺野るゝ氏)	857.38

購買部利益金累進表

大正十三年第一學期末	金拾五圓四十錢
同 第二學期末	金壹百七十圓七十二錢トナリ
同 第三學期末	金貳百貳拾參圓二十八錢トナリ
同 十四年第一學期末	金四百七十圓九十七錢トナリ
同 第二學期末	金六百四十七圓六十錢トナリ
同 第三學期末	金六百九十四圓七十三錢トナル
校友會食品部手数料	
大正十四年五月	金八圓三十五錢
同 六月	金十四圓五十錢
同 七月	金十圓五十錢
同 九月	金七圓十錢
同 十月	金十七圓七十七錢
同 十一月	金十圓五十錢
同 十二月	金七圓四十錢
同 大正十五年一月	金十三圓十一錢
同 二月	金九圓廿二錢
同 三月	金五圓四十錢
同 四月	金六圓三十六錢

同 五月 金十一圓 二五八

◎同窓會報告

報告

學校で創立二十五年記念式を催さるゝに就て同窓會に於ても後援を爲したいといふので二月中旬卒業生の有志の方々が學校へ集會になりました。郡立以前の諸姉はとても御會合は六ヶしと考へ郡立第一回より便宜の位置にお住の方々へ合計六拾六名程書信を發し發起人たる事を御願ひいたし。其後數回に亘つて郡立第二回竹中、間宮、牧野、和田、大石、第三回より横山、池田、渡邊、縣立第一回より小池、野田、香谷、古澤縣立第二回より小栗、風間、中村、遠藤、杉山、島本第三回より西原、増山、望月、鈴木の諸嬢會合執務されてその結果この醜金を見る事が出来まして、尙祝日賣店の斡旋をなさつて獲た利益金をも併せて企業費とし寄附いたしました。(マシン器購入に充つ)又住所不明の爲に返送された書面も澤山あつて甚だ残念に堪

へませんでした。學校の謝恩費は主として十年以上勤務の職員並に五年以上在職された舊職員の表彰費に充てられたのです、同窓會としてはこの外に現在の職員で五年以上勤務の方々へ薄志ではありますが記念品を呈上いたしました。

創立記念祝賀會寄附者氏名

(記念號ヲモ合記シ後ニ一括シテ支出部ニアグ)

回数	姓 名	金員	回数	姓 名	金員
二二	伊藤 一江	壹圓	二一	小島 よね	貳圓
一七	伊藤勢都子	參圓	一九	原 ちる	壹圓
四	渡邊ゆき子	拾壹圓	專五	森光 みね	參圓
一八	鈴木惠津子	六圓	二二	酒井 みや	拾圓
一八	小嶋 とも	參圓	二二	杉本 二三	壹圓
四	八代美代子	參圓	一八	鈴木 利子	四圓
二二	川口 光子	貳圓	二三	鈴木ますゑ	貳圓
八	杉本 あさ	貳圓	一六	川口さだ子	貳圓
二〇	成田 壽惠	參圓	二三	望月 照子	壹圓
			二一	山田しげ子	貳圓
			二一	松村 秀子	六圓
			二二	豊田 ふみ	參圓
			一九	佐藤 光子	壹圓
			一八	中山 俊子	參圓
			一〇	勝亦 ちる	六圓
			二三	大賀 とし	貳圓
			二一	谷口 花	參圓
			二一	伊東 さく	壹圓
			二三	摺谷 きみ	參圓
			二〇	高須 清子	四圓
			十	小島 艶子	貳圓
			廿三	杉山 隆	四圓
			三	小林 絹子	六圓
			廿一	増田 きみ	貳圓
			廿	池田 あき	參圓
			十八	武井 のぶ	貳圓
			十一	矢部 静重	參圓
			廿二	木村 壽子	壹圓
			廿一	室賀よし子	貳圓
			十九	笹原 園子	壹圓
			十七	九鬼 春子	拾壹圓
			廿二	小栗かね子	貳圓
			十三	三谷 令子	貳圓
			十一	中山ます子	四圓
			專三	齋藤 たつ	四圓
			十一	大久保賤江	參圓
			十九	和田 よし	壹圓
			廿三	漆間 くり	貳圓
			十八	高須きぬ子	四圓
			十五	高瀬 明子	六圓

一三 深澤 よし 壹圓	一四 栗原 公子 貳圓	一九 和田 秀子 貳圓	二一 梶 すゞ子 壹圓
二三 鹽川たか子 壹圓	一八 増山美代子 參圓	二三 吉川 文子 貳圓	二三 柏谷 梅子 參圓
二三 増山美喜子 參圓	一六 伴野 利枝 貳圓	四 木下佳枝子 五圓	二二 柴田惠喜子 六圓
二二 伴野 光枝 壹圓	二〇 坂田 松枝 貳圓	二二 杉本 徳枝 壹圓	二二 奥村 花子 壹圓
一七 青木 静子 六圓	二四 小林 静恵 貳圓	二二 遠藤 千代 壹圓	二一 土屋 さち 壹圓
一七 清水 幸子 拾壹圓	一八 田村 益子 參圓	二二 大古田美代 貳圓	二四 伊藤 春江 壹圓
二〇 横山 愛子 貳圓	二二 島本 はる 參圓	二三 植松 やす 貳圓	一六 林 とし 貳圓
二二 渡邊とし子 壹圓	二二 山本 藤子 壹圓	一四 山本 めう 參圓	一七 齋藤 美子 壹圓
二四 江藤 君子 貳圓	二〇 江藤 しづ 貳圓	一五 鎌野 菊枝 貳圓	二 大塚 すゑ 參圓
二四 竹村 うた 貳圓	二四 和田 つる 壹圓	二二 鈴木 惠美 四圓	一八 松島 松枝 貳圓
二三 中野 照子 參圓	一 市川あい子 貳圓	一八 水野 よし 參圓	一四 小早川愛子 參圓
一六 坂東 鶴子 貳圓	二二 長倉千枝子 參圓	二一 海瀬 鼎 貳圓	二二 關 はつ 參圓
二三 西澤 光子 壹圓	二二 松井 みわ 貳圓	二三 長岡 桃枝 壹圓	二二 大野 桃江 壹圓
實四 齋藤 美枝 壹圓	二二 杉山 より 貳圓	二一 飯田 琴代 貳圓	四 宮内 冬子 四圓
一八 秋山ふみ子 六圓	二二 杉山志津子 參圓	二四 藤井 貞 五圓	二四 原 操 五圓
一七 淺田 淑子 六圓	二一 深谷 清子 四圓	二三 芹澤すみ子 參圓	二二 水野千代子 參圓
二三 磯部 春恵 壹圓	二四 増田 貴美 壹圓	一六 高村 數子 壹圓	一四 秋山 光子 六圓
一九 鈴木 みち 壹圓	一九 竹中 久代 壹圓	七 杉山 まつ 壹圓	一二 内田 とき 貳圓
一九 生田 ふみ 壹圓	一九 牧野しづえ 貳圓	一八 植松 愛子 貳圓	二三 岩田伊久子 貳圓
一七 名取 喜子 貳圓	一八 河邊 静枝 貳圓	一七 小澤 つる 拾壹圓	二三 渡邊はる子 貳圓

二三 佐藤 隆子 參圓	一四 伊藤那珂子 參圓	三 古田 松子 貳拾圓	九 曾根 こと 六圓
二一 日吉 松美 參圓	四 日吉 いち 壹圓	二四 増田 幸子 壹圓	二四 市川 美子 貳圓
二四 貴島 武代 貳圓	二三 久保千枝子 壹圓	二四 脇田 くの 壹圓	二四 伊藤 たか 壹圓
二〇 二宮 ふさ 貳圓	七 北出 あい 四圓	二四 小島 かつ 壹圓	一八 鈴木 なみ 參圓
二〇 佐藤かね子 參圓	二二 八木 榮子 參圓	二一 芹澤ひで子 參圓	一一 井關 治子 貳圓
二二 鈴木 はる 貳圓	二四 鈴木 まさ 壹圓	一九 土屋 智代 壹圓	二〇 田代 しま 壹圓
一六 大木 つね 壹圓	一七 金田 なみ 壹圓	二四 土屋 まち 參圓	一六 杉本 さと 參圓
一一 早川八重子 參圓	二〇 高柳てる子 參圓	二一 市川 梅子 五圓	三 松島 きみ 壹圓
一一 大谷木のぶ子 貳圓	一六 伊藤喜和子 四圓	二一 古澤 ひで 參圓	二一 旭 みと 壹圓
二四 島山 吉野 壹圓	八 石塚 きみ 貳圓	二四 旭 敏子 壹圓	二四 鈴木 せつ 壹圓
二四 本多 照穂 壹圓	二四 中山 すゞ 壹圓	二四 藤田 静子 壹圓	二一 稻垣 静子 參圓
一九 齋藤 えつ 壹圓	一八 鈴木 うた 壹圓	一五 大城 貞子 四圓	二二 小宮山登志子 貳圓
二三 鈴木 幸枝 參圓	二四 佐野 通子 壹圓	二三 天野 貞 壹圓	二四 高島 うめ 壹圓
二四 野田しづゑ 壹圓	二四 川口 こう 壹圓	二四 長倉 はる 貳圓	二一 香谷 芳子 參圓
二四 黒澤 かつ 壹圓	二四 稻葉 すま 參圓	二一 植松茂里子 參圓	一六 植松美津代 貳圓
二四 杉山 乙女 壹圓	二二 杉山 すゑ 壹圓	一九 大石 はな 參圓	二一 奥山三木恵 貳圓
一六 片山 文子 參圓	二四 杉山みどり 壹圓	二一 渡邊 秀子 貳圓	四 山田 なか 六圓
二三 中村富士子 壹圓	一 今村 とき 四圓	二四 海瀬 美枝 壹圓	二四 酒井よし子 壹圓
二四 市川 こと 壹圓	三 淺田 かよ 貳圓	二〇 高遠喜美江 貳圓	二一 岡田じゆん 壹圓
七 山下 だい 參圓	二四 鳥羽みさ子 壹圓	一五 吉田 つや 壹圓	二四 小笹とき 壹圓

一一 小澤よし子 五圓
 一二 吉川 富美 壹圓
 一三 杉山 まさ 壹圓
 一四 松岡 俊子 壹圓
 一五 松井 豊子 貳圓
 一六 岡田千枝子 五圓
 一七 原 とら 貳圓
 一八 森田 壽 四圓
 一九 田村 龍江 貳圓
 二〇 藏納喜代子 貳圓
 二一 瀬戸 文子 壹圓
 二二 建部 くわ 五圓
 二三 西山 初代 貳圓
 二四 朝日 たけ 貳圓
 二五 諸井 豊子 貳圓
 二六 喜多川喜久 壹圓
 二七 高橋かねよ 壹圓
 二八 山本 つぎ 壹圓
 二九 齋藤 秋子 貳圓
 三〇 宮川ふじみ 壹圓
 三一 吉川 榮 壹圓
 三二 荒川 みよ 壹圓
 三三 島田みつる 貳圓
 三四 廣瀬 さと 貳圓
 三五 松井千代子 參圓
 三六 原 あき子 貳圓
 三七 高木まさ子 壹圓
 三八 久保 みや 貳圓
 三九 岡本 清子 四圓
 四〇 藏納富久子 參圓
 四一 佐藤 幸子 參圓
 四二 山田 たか 參圓
 四三 望月 豊子 貳圓
 四四 鈴木 勝子 貳圓
 四五 井出 政子 貳圓
 四六 杉山 つる 壹圓
 四七 高橋 りく 壹圓
 四八 田川田鶴子 壹圓
 四九 大橋うめ 貳圓
 五〇 福永 うら 貳圓
 六一 高島 静惠 貳圓
 六二 芹澤 米子 貳圓
 六三 増山 銀子 壹圓
 六四 美濃部あい子 參圓
 六五 宮口 まさ 壹圓
 六六 諸星 あい 壹圓
 六七 眞野しゅう 六圓
 六八 栗田 悦子 壹圓
 六九 吉岡 たみ 壹圓
 七〇 鈴木武津美 貳圓
 七一 鈴木 みる 壹圓
 七二 田邊 春子 貳圓
 七三 樽井 達子 壹圓
 七四 杉山 芳子 參圓
 七五 稻生 秀子 貳圓
 七六 廣田 きよ 參圓
 七七 小野田静江 壹圓
 七八 淺野 彌生 壹圓
 七九 高島美惠子 參圓
 八〇 仁藤 叶代 貳圓
 八一 富坂こど子 參圓
 八二 水口 みち 參圓
 八三 杉山 文子 四圓
 八四 渡邊 操 壹圓
 八五 渡邊 幸 壹圓
 八六 熊谷 尚子 壹圓
 八七 西原 文枝 壹圓
 八八 坂倉 時子 壹圓
 八九 高橋 松代 壹圓
 九〇 小池 とし 壹圓
 九一 松浦 治 壹圓
 九二 黒野 静江 五圓
 九三 秋山 好子 貳圓
 九四 安間みよ子 四圓
 九五 小澤 しげ 壹圓
 九六 宮内 ゆき 四圓
 九七 齋藤かほる 貳圓
 九八 野田 竹 貳圓
 九九 遠藤 いく 壹圓
 一〇〇 高橋 静子 參圓

一九 長橋 静江 壹圓
 二〇 久松 文子 壹圓
 二一 杉山 秋子 壹圓
 二二 瀬尾 悦子 壹圓
 二三 池谷 雪江 貳圓
 二四 石井 もと 壹圓
 二五 瀬尾 嫩 參圓
 二六 渡邊 静江 壹圓
 二七 風間 照子 壹圓
 二八 室賀 行子 四圓
 二九 武山 かの 壹圓
 三〇 大井 みつ 貳圓
 三一 鈴木 億子 壹圓
 三二 大嶽 伊真 壹圓
 三三 市河 宣子 參圓
 三四 仁王 清江 壹圓
 三五 高橋 静枝 壹圓
 三六 杉山 ふみ 四圓
 三七 土屋 華子 參圓
 三八 木村 泰子 參圓
 三九 佐野 艶子 貳圓
 四〇 奥村 玉枝 壹圓
 四一 森 きく 壹圓
 四二 稻生とみ子 貳圓
 四三 大木千代枝 貳圓
 四四 諏訪部まさ 貳圓
 四五 牧野 とめ 壹圓
 四六 渡邊 勝江 壹圓
 四七 風間 歌子 壹圓
 四八 持田 はつ 貳圓
 四九 武山いくよ 壹圓
 五〇 石崎 文 壹圓
 五一 増田千恵子 貳圓
 五二 高梨かつ子 壹圓
 五三 小野 きせ 貳圓
 五四 仁王 糸江 壹圓
 五五 岩崎 さわ 壹圓
 五六 大熊 きよ 壹圓
 五七 土肥 はる 壹圓
 五八 遠藤 倭子 五圓
 五九 中村 りん 貳圓
 六〇 水口 くに 參圓
 六一 渡邊 ちる 參圓
 六二 奈木 千代 壹圓
 六三 渡邊 千代 壹圓
 六四 中村 長 貳圓
 六五 山田 秀子 貳圓
 六六 鈴木ひさ子 壹圓
 六七 高橋八重子 壹圓
 六八 小池 よし 壹圓
 六九 濱野 慶子 壹圓
 七〇 渡邊 もと 壹圓
 七一 中村 いと 五圓
 七二 渡邊 婦美子 壹圓
 七三 武 カン 貳圓
 七四 野田 簪子 貳圓
 七五 杉本 常子 壹圓
 七六 野田さきの 參圓
 七七 山本しげ子 壹圓
 七八 加藤富士子 五圓
 七九 富坂こど子 參圓
 八〇 水口 みち 參圓
 八一 杉山 文子 四圓
 八二 渡邊 操 壹圓
 八三 渡邊 幸 壹圓
 八四 熊谷 尚子 壹圓
 八五 西原 文枝 壹圓
 八六 坂倉 時子 壹圓
 八七 高橋 松代 壹圓
 八八 小池 とし 壹圓
 八九 松浦 治 壹圓
 九〇 黒野 静江 五圓
 九一 秋山 好子 貳圓
 九二 安間みよ子 四圓
 九三 小澤 しげ 壹圓
 九四 宮内 ゆき 四圓
 九五 齋藤かほる 貳圓
 九六 野田 竹 貳圓
 九七 遠藤 いく 壹圓
 九八 高橋 静子 參圓

一九 間宮 童子 壹圓	二〇 間宮 梅子 壹圓	六 堀井 京子 壹圓	一六 荒井 靜 參圓
二三 阪東 しん 貳圓	一七 直井 えつ 貳圓	二三 肥田 藤枝 壹圓	二四 土屋しげ子 壹圓
二二 辻 ちか 參圓	二四 眞野 初枝 壹圓	七 佐々木せん 貳圓	二四 田上久米子 壹圓
二四 金刺 雪江 壹圓	二一 秋山 よし 貳圓	一七 鈴木彌春代 貳圓	一三 湯淺 貞 參圓
二〇 片岡 たま 壹圓	實十 山本 けん 壹圓	二三 川崎 たか 壹圓	二三 大嶋 その 壹圓
二三 山本 あき 壹圓	九 渡邊 とみ 貳圓	二〇 山本 君子 壹圓	二三 山本 美子 壹圓
五 中野 うめ 貳圓	一 大木 千代 參圓	一四 田峯 雪子 三圓	專四 土屋 せき 貳圓
一六 鈴木 やす 四圓	五 土谷 浪子 壹圓	一 池谷 しん 五圓	二 米倉 秀子 四圓
一九 碓井 やす 壹圓	一九 山本 花 壹圓	一 菅沼 しげ 四圓	一三 植松 千年 壹圓
一四 植松よね子 貳圓	二四 増田 しげ 壹圓	實七 植田 愛 壹圓五拾錢	七 前山 こと 壹圓
二四 山本しづ江 壹圓	二三 大嶽とし子 壹圓	二一 前山 ふく 貳圓	二三 芹澤 千江 壹圓
二一 神谷 ゆき 壹圓	二二 兼井 ひで 壹圓	一七 富樫 もと 六圓	一九 和田 貴 壹圓
二一 齋藤 濱子 貳圓	實七 岩田壽々衛 參圓	一九 小山 花 壹圓	二二 向笠 はる 貳圓
一一 寺澤 ブシ 貳圓五拾錢	一四 關谷ちよ 貳圓五拾錢	二三 岩崎太代子 壹圓	一九 白石倭文子 五圓
二四 森 津留子 壹圓	二二 宮川 茂 壹圓	二四 久川 貞子 壹圓	二〇 久川喜久江 壹圓
七 杉山 直子 五圓	二三 長倉 貞子 五圓	二一 日吉 はな 壹圓	二二 片岡 静子 壹圓
九 望月 よう 貳圓	二四 樋口 敏江 壹圓	二三 森 やゑ 貳圓	一〇 八木 雪枝 貳圓
九 秋元 ゆき 參圓	一九 望月 ゑつ 貳圓	四 山岸 でん 六圓	二三 勝又雪江 壹圓五拾錢
二二 伊海 芳子 壹圓	二三 勝又 久惠 壹圓	一二 大石 うめ 壹圓	二四 橋本 秀子 壹圓
二三 青木 壽惠 貳圓	二一 鈴木 信子 參圓	一九 田邊 幾代 參圓	九 勝亦 玄 參圓

二〇 萩原 あや 參圓	二四 杉浦 えい 壹圓
二四 鶴田 華子 壹圓	二一 河野 育 貳圓
二〇 益田 よし 壹圓	二二 益田 榮子 壹圓
二四 福本 晴子 壹圓	二四 秋山 まつ 壹圓
十一 森 つね 貳圓	實九 秋山 静江 壹圓
二二 武繩 ミチ 貳圓	二四 秋元 ふじ 壹圓
一七 高田 てる 壹圓	二一 木村八重子 貳圓
二一 大島 笹子 貳圓	二〇 秋元 まつ 貳圓
一九 六熊美津子 壹圓	二二 栗林 ちゑ 貳圓
二四 梶本 蝶子 壹圓	二四 遠藤やゑ 壹圓五拾錢
七 齋藤 きぬ 參圓	二二 相原田鶴子 貳圓
一五 鈴木 八重 壹圓	二二 宮口 てい 壹圓
四 神尾 ひで 貳圓	二四 武藤富美子 貳圓
二四 安藤 久世 貳圓	二四 山岸 玉代 貳圓
四 加藤 ふみ 貳圓	一三 富原 とよ 貳圓
一一 一杉 み津 六圓	二三 野上しづ子 貳圓
一八 中尾 フミ 三圓	六 相磯 節 三圓
二 山田 ひさ 四圓	一八 稻葉 静江 貳圓

内

記念號費へ 二百三十三圓

通信印刷費 四十五圓

卒業生茶話會 六十圓

學校謝恩費へ 二百圓

學校祝賀費へ 一百圓

村松、和田、橋本、土屋、四先生 記念品費 五十四圓

後ノ通信費 八圓六十錢

差引 金三百九十七圓九十錢

(外ニ祝賀會ノ節卒業生ノ賣店利益) 金四十八圓六十錢ヲ加フ

同窓會々計

收入之部

前年度繰越金

十四年三月卒業生ヨリ 寄附金七十五人分

運動會賣店利益金

金拾九圓八十五錢

壹千〇九十八圓五十錢

五百〇四人

二六五

金貳拾圓八十錢 定期預金利子
 金壹百參拾七圓 十五年三月卒業生寄附金一人一圓
 計金五百二十七圓〇參錢
 支出之部
 金八圓三十錢 十四年十一月卒業生動靜調費用
 差引金五百拾八圓七十三錢

卒業生名簿第四回報告

索引 (氏名ノ下ノ數字ハ) (卒業ノ回次ヲ示ス)

了の部 (卒業當時ノ姓名ニヨル)

青木	さく一	秋山	さく一	秋山	つや二	青木	くみ九	青木	れん〇	有馬	とく〇
青木	あや四	足立	あさ五	秋元	ゆき五	秋山	つね二	秋山	ます二	秋元	喜與三
青木	いど六	阿部	貞子六	秋山	しゆう七	青木	たま三	青木	たまた三	秋山	たい三
秋山	國野七	足助	まさ七	青木	しづ八	渥美	ちせ三	淺井	伊志三	淺賀	はる三
青木	静枝八	青木	さめ八	秋山	つね八	淺賀	はる三	飯田	はる二	池田	八重二
青木	さみ八	青木	静九	秋元	ゆき九	飯田	くめ二	井上	きせ二	井上	さく二
						今澤	ふみ二	市河	とみ三	岩崎	やす四
						伊藤	ひやく四	市川	まさ四	市川	まさ四
						岩崎	きよ五	岩崎	とし五	石井	せい五
						飯塚	あき二	飯塚	あき二	飯塚	あき二
						井上	さく五	井上	さく五	井上	さく五
						井口	いと三	井口	いと三	井口	いと三
						池谷	雪江六	池谷	雪江六	池谷	雪江六
						今澤	智恵六	今澤	智恵六	今澤	智恵六
						飯塚	常子七	飯塚	常子七	飯塚	常子七
						岩崎	てつ七	岩崎	てつ七	岩崎	てつ七
						市川	ふみ八	市川	ふみ八	市川	ふみ八
						伊奈	厚子九	伊奈	厚子九	伊奈	厚子九

青木	とく三	秋元	ます子三	秋山	ちよ七	飯田	はる二	飯田	くめ二	伊藤	たま二
秋山	すゑ子八	足立	ひさ九	青木	とく二〇	池田	八重二	井上	きせ二	石井	のぶ二
淺沼	絹子二〇	有谷	ぬい二〇	荒川	文字二〇	今澤	ふみ二	市川	ひろ二	飯田	あい三
安藤	久世二〇	淺野	俊子二〇	旭	敏子二〇	市河	とみ三	市川	ひろ三	市河	ふこ二
秋山	まつ二〇	秋元	ふじ二〇			飯塚	あき二	井上	さく二	井上	さく二
岩崎	ふじ一	市川	さく一	石橋	ちか一	伊藤	ひやく四	市川	まさ四	市川	まさ四
今井	りう一	池谷	ひで二	岩崎	こと二	市川	きよ四	岩崎	とし五	石井	せい五
飯嶋	あき二	井上	ちか二	池田	いね四	岩崎	きよ五	飯塚	あき二	飯塚	あき二
井田	たへ六	石井	くに六	市川	とく六	井上	さく五	井上	さく五	井上	さく五
井出	とめ七	碓	はる七	岩崎	せい七	井口	いと三	井口	いと三	井口	いと三
飯島	みね七	岩崎	とみ七	池田	よね七	池谷	雪江六	池谷	雪江六	池谷	雪江六
泉名	たま八	飯田	つた八	伊東	きよ八	今澤	智恵六	今澤	智恵六	今澤	智恵六
市河	ぬい九	石橋	どの八	市川	けい八	飯塚	常子七	飯塚	常子七	飯塚	常子七
岩田	わか九	市川	ゆき九	市川	江九	岩崎	てつ七	岩崎	てつ七	岩崎	てつ七
井上	愛九	市河	いど九	池田	はま九	市川	ふみ八	市川	ふみ八	市川	ふみ八
井上	まら二	井上	雪枝二〇	井口	きよ九	伊奈	厚子九	伊奈	厚子九	伊奈	厚子九
井口	つな一	石橋	みつ二	岩崎	ちか二〇						

磯部	さち	飯沼	静子	池田	あき
石橋	紀子	稻井	りい	市川	花子
井口	よし	伊倉	とし	今西	英子
岩田	静子	稻村	たね	市川	梅子
稻生	秀子	飯田	琴代	石橋	わい
伊東	さく	飯田	よし	犬塚	すみ
伊藤	一江	市川	たき	碓	静江
伊海	芳子	泉名	清子	井上	登志江
井出	ゆきえ	岩田	伊久子	岩田	芳枝
和泉	しげ	稻生	信子	岩崎	太代子
岩崎	さわ	郷部	春恵	飯田	のぶ
飯田	たけ	稻木	たね	石塚	ゆき
稻葉	ゆき江	和泉	はな	岩田	和子
今井	松枝	伊藤	春江	伊藤	たか
市川	美子	市川	こと	稻葉	すま
稻村	稻子	石川	こと	石井	もど
石崎	文				
上田	たみ	植松	ぬい	内田	いろ
植松	ぬい	宇津木	いせ	植田	みよ

宇佐美	やす	植松	千年	内海	與志
植松	ヨネ	上原	とく	白井	芳子
上田	さだ	植松	八重	内村	まさ
上田	はる	植松	とき	宇田	ちよ
植松	りん	内海	美知	内田	津多
植松	美津代	内田	さだ	植松	光江
植松	壽子	碓井	やす	上杉	榮
漆間	花子	植松	茂里子	海野	あさ
漆間	くり	植松	やす	梅原	みち
植田	愛				

オ
ウ
の
部

岡田	なつ	岡田	のぶ	小澤	ひさ
大橋	うめ	岡田	みぶ	長田	きみ
岡本	かめ	小川	くに	大古田	ゆき
岡田	千代	大熊	みどり	大竹	ひさ
小澤	つね	岡野	ひろ	小野	いち
奥山	ゑん	大村	やす	長田	くら
岡田	せい	小澤	さか	岡野	充
小川	はま	岡田	琴	大川	さだ
小野	いま	大木	つね	岡田	翠
大竹	のぶ	大川	千枝	大島	ひさ
大島	せき	岡田	富士	大川	あい
大嶽	いち	岡野	いそ	大隈	たい
小尾	伊代	岡野	貞子	岡本	ふく
奥田	てい	岡田	千代	大嶽	りやう
大村	英代	小川	むら	大槻	ふじ
大塚	でん	太田	かめ	大槻	さく
大石	さく	大槻	はまの	大槻	きく
大場	とし	大木	つね	小野	多賀
岡田	まさ	岡田	志保子	小澤	静子

大島	かね	大嶽	とし	太田	登喜
大川	いち	太田	益子	大熊	勢都子
奥村	艶子	大竹	静江	岡田	フミ
小澤	静	大木	千代枝	岡本	かつ
岡田	幾代	大井	みつ	小澤	久
大石	はな	大熊	満子	太田	友子
小川	静子	大島	笹子	奥山	三木枝
大川	しづ	大塚	梅子	岡田	千枝子
大原	勝子	岡田	じゆん	大野	桃江
大古田	美代	岡田	静江	岡根	谷千萬
小野	マツ子	小野	みさを	小野	田しづ江
小栗	かね	奥村	はな	大島	その
大司	チエ子	小澤	しげ	岡本	清子
大西	ちよ	奥村	玉枝	大川	みさほ
大嶽	いま	大嶽	八重	大嶽	とし
荻原	末雄	小澤	よし	小野	きせ
岡田	きり	大竹	すみ江	大嶽	はな
太田	よし	大嶽	い江	小野	喜久江
		小笹	とき	荻生	篤子

カ
の
部

河野	かのー	加藤	なかニ	川田	けいニ	川村	すみ子一八	川	ゑい一八	勝地	まさ子一八
川田	きみ三	金子	しゆう三	金森	か江三	勝又	なを子一八	風間	八重子一九	片岡	愛子一九
神部	ふゆ四	海瀬	なか四	川	さわ四	勝又	ひさ江一九	片岡	たま三〇	川	みよ三〇
片岡	ふく四	勝亦	かしく五	海瀬	うめ五	加藤	静枝三〇	川口	ツ子三〇	神尾	はな子三〇
寛	良五	金子	千代六	金子	たけ六	川口	綾子三二	神谷	ゆき三二	川口	みよ三二
加藤	だい七	加藤	喜女七	川田	しげ七	海瀬	静枝三〇	勝又	みよし三二	加藤	利世三二
河野	千代七	風間	壽八	上河	のぶ八	河合	つる三二	蒲	マサ三二	梶	まさ子三二
勝地	ろく八	神部	きみ九	川田	静九	川口	たか三二	加藤	久江三三	川口	一子三三
川村	るゐ二	片山	さく二	河邊	さく二	川口	光子三三	片岡	静三三	兼井	ひで三三
海瀬	家壽二	金子	はな二	勝地	はな二	風間	照子三三	柿島	せつ三三	片岡	美代子三三
川口	いと二	風間	しん三	神谷	てい三	川合	きよ三三	加藤	文三三	勝又	正子三三
加藤	つる三	加藤	ふぢる三	川島	春子三四	勝又	雪江三三	川崎	久恵三三	勝又	久恵三三
河邊	よね四	川村	敬四	河野	美津四	川口	よし三三	川崎	たか三三	勝又	よしゑ六實
神部	かね五	川田	つね五	貝山	もと五	片山	常三三	勝又	よしゑ六實	間宮	公古三〇實
川口	やを五	海瀬	すわ五	川口	なか一專	海瀬	あや七實	勝又	よしゑ六實	勝間田	智恵子三三
加藤	よし一專	川	りう三專	勝間田	さと六專	川口	こう三四	梶	とし子三四	梶	蝶子三四
片岡	ひで二六	片山	由喜子二六	川口	しげ二六	金刺	雪江三四	城內	さる一	木内	たかニ
金子	俣二六	神谷	ゑい二六	金田	なみ二七	風間	歌子三四	城內	さる一	木内	たかニ
神部	いさ子二七	河邊	静枝二八	風間	静江二八	貴家	さちる一	城內	さる一	木内	たかニ
葛西	静二八	神尾	秀子二八	勝田	嘉子二八	貴家	さちる一	城內	さる一	木内	たかニ

キの部

城內	とく四	木村	さわ四	木村	ひろ五	久保	はる二	久保	れい三	工藤	しげ三
貴家	ますみ六	木村	あき七	城內	榮九	栗田	てい三	工藤	しん三	口野	よし四
木村	やゑ九	木村	しげ九	菊地	かつ一〇	久保田	よね二四	栗田	清二五	桑原	せき四專
木村	すゑ一〇	木村	ふじ二	菊地	つや二	工藤	登み子二八	藏納	富久子二九	工藤	てる九
岸本	とよ三	木下	貞三	木村	千代二四	栗林	ちる三三	久保田	さく三三	久保	ふみ三三
菊地	ゑい二四	木村	いと一實	木下	ふみ一六	工藤	ちよ三三	久保	つる三三	久保	千枝子三三
木下	たい一六	菊地	八重七	城內	ため七	栗田	悦子三四	釘宮	幸子一九	黒澤	かつ二四
木村	八代二八	城內	艶子一九	木村	倭子一九	栗田	悦子三四	熊谷	尚子二四		
木村	花枝三〇	喜多川	さみ三〇	木村	ふみゑ三〇	小島	しづ二	小早川	さく三	小出	てる三
菊地	春江三〇	木村	八重子三二	木村	ひさ子三三	後藤	みす七	小池	ふさ八	小林	はる八
木村	きよ三三	木村	壽子三三	菊地	貞子三三	後藤	やゑ九	後藤	要九	後藤	まさを二〇
菊地	とし三三	菊池	はる三三	城內	静子三三	後藤	つる二二	後藤	つる二二	後藤	文二二
木村	はる三三	木村	泰子三三	貴島	武代三四	小柴	さく二〇	小泉	公子二四	小池	静江二四
久保	かく一	栗田	とり二	栗田	いち四	古根村	ちる二三	小池	いと二五	小池	きみ二五
工藤	いま四	栗田	とし五	熊澤	あさ六	後藤	さだ二四	小島	文子二六	後藤	勝代二六
久保田	せつ六	栗田	とし六	栗田	とく七	後藤	みよ四實	小堆	みつ二八	小島	とも二八
久保	みや七	栗田	富尾八	栗田	かつ一〇	小森	ヨシ二六	小山	花二九	小林	さと二九
栗田	はる一〇	藏納	喜代子二	栗田	静二	後藤	鹽子二九	小林	ちか三〇	後藤	雅子三〇
久保	みつ二	栗田	かつ二	隈部	千恵二	小池	よし二九	小池	ちか三〇	河野	育二
						小長谷	乙じ三〇	小池	とし三二		

香谷 芳子二	小林 千代二	小宮山登志子三	榎原 千代七	齋藤 美七	笹原きよ子七
後藤喜久惠三	小林 とし三	小原 すみ三	坂 富み子八	齋藤 ゆき八	佐久間芳枝八
小宮山壽々惠七實	後藤千鶴子七實	後藤 壽子七實	佐々木廣子九	齋藤 さく九	齋藤アキ子九
小泉 鎮子九實	後藤 澤子九實	小原 りき一〇實	笹原 園子九	齋藤 惠津九	佐藤 けい九
小池 さく二四	小林 いよ二四	小林 静惠二四	齋藤 千惠九	佐野 艶子一〇	佐藤かね子一〇
小宮山静子二四	小島 かつ二四		齋藤 濱子二	佐久間清子三	齋藤 つね三
			笹山 織江二	齋藤かほる三	齋藤 けい三
齋藤 やす一	佐野 てう二	佐野きよし三	佐藤 幸子三	佐藤ひさ子三	酒井みや子三
齋藤 みよ四	齋藤 ふみ四	齋藤 しづ五	佐々木昌子三	佐野 松枝三	佐藤 りう三
齋藤 みつ六	齋藤 ふみ六	坂本 さと六	佐藤まさ子三	西郷たか子三	榎原 はな七實
佐藤 こと七	佐藤 こと七	齋藤 みつ七	坂倉 さよ八實	齋藤 とみ四	齋藤 妙子四
佐々木せん七	佐藤 さよ八	佐伯 はな八	齋藤 歌子二四	佐藤 はる二四	佐藤 花子二四
澤 あさ八	齋藤 花九	齋藤 さよ一〇	佐藤 みち二四	酒井よし子二四	坂倉 時子二四
笹原 しの二	笹原 しも二	佐藤 年二	坂倉 さく二四	佐野 通子二四	崎口 愛子二四
齋藤 よし二	佐藤 静重二	齋藤 その二	清水 玄九	柴田 つる九	白岩 ちる二一
笹原 うめ二	笹原 たへ二	坂 光子二	志賀 かん三	清水マツコ二四	白岩 さと三
佐藤さよ子二四	佐藤 すへ二四	笹原 とき二四	島田 くめ五	白岩 やす一實	清水 伊志三專
齋藤 菊枝二五	佐藤 みつ二五	佐藤 やす二專	神保 ふさ三專	神保 さよ六	榎木 まつ二四實
笹原 せい二專	齋藤 しげ二專	笹原 芳二實	柴田 義七	白岩 喜み七	
佐山 香代二六	齋藤はる子二六	榎原 あや二七			

入の部の

島本 シヅハ	柴田 利子二八	笹原 なの三〇	鈴木 ひろ二四	須賀 なか二四	鈴木 より二四
白岩 ひで三	澁谷 清子三	島本 はる三	鈴木 百代二四	鈴木とよ子二四	杉山 かつ二五
島田みつ江三	鹽川 たか三	白岩 てる六實	杉山 みね二五	鈴木 いと二專	鈴木 うめ二專
庄司 ゑつ七實	白石倭文字二九	島津 てい三	杉山 なみ二專	杉山 てい二專	鈴木 乙梅二專
島田 操二〇實	島田たき子二四		鈴木 清枝二專	鈴木 しか五專	鈴木 せい六專
			鈴木 くら二	鈴木 てる六	鈴木 せい六專
杉山 くら二	鈴木 つる二	杉山 いと二	鈴木 こう七專	鈴木 てる六專	杉山 せい七專
鈴木 いを二	鈴木 ふみ三	鈴木 若代三	杉澤 いく三實	鈴木 けい二實	須田 美枝四實
鈴木 きく三	杉山きく三	杉山 うめ四	鈴木 つる二	鈴木 うら四實	杉本 里二六
杉山 ひで四	杉山しゆう六	鈴木 なみ五	鈴木 富子二六	鈴木 たけ二七	鈴木 とし二六
鈴木 いく五	杉山 あさ七	杉山 てる六	鈴木 くら二	鈴木 彌春代二七	鈴木 トシ二七
鈴木 ふみ六	杉山 さだ八	鈴木 きり七	杉山 ぶん二六	杉本 愛子二七	鈴木 すゑ二七
杉山 しん七	鈴木 つる九	須磨 かつ八	鈴木 恵津二八	鈴木 久子二七	鈴木 千代二七
杉本 みつ九	鈴木 操一〇	杉山 ちか九	鈴木 ふく二七	鈴木 富子二八	須磨 エツ二八
杉山 くら九	鈴木 ふじ二	鈴木 くに二	鈴木 さよ二七	鈴木 宇多二八	杉山 鶴子二八
鈴木 きん二	鈴木 のぶ二	鈴木 岩江二	杉山 恵津二八	鈴木 千代二九	鈴木 三枝二九
鈴木 まつ二	鈴木 のぶ二	杉野 良子二	鈴木 恵津二八	鈴木 千代二九	砂崎ふじ子三〇
鈴木のふこ三	鈴木 のぶ二	鈴木 芳子二	杉山 芳子二九	杉山 とも二九	首藤 房江三〇
鈴木 芳三	鈴木 のぶ二	鈴木 芳子二	杉山 さき二九	杉山 たつ三〇	杉本 常二
杉山 みと三	杉山 茂三	鈴木 あい三	鈴木 やす三〇	杉山 梅子三	

杉山	文子 ^三	杉山	頼子 ^三	鈴木	信 ^三	關	ます ^四	關	あき ^五	芹澤	さい ^一 專
杉山	うめ子 ^三	杉山	しづ ^三	杉山	八千代 ^三	關本	けい ^一 專	關	ふき ^七 專	關	千枝 ^二 實
杉山	すゑ ^三	杉本	らん ^三	杉本	徳枝 ^三	千田	もと ^七	芹澤	よし ^七	關	静枝 ^八
鈴木	はる ^三	鈴木	勝子 ^三	鈴木	のぶ ^三	芹澤	まさ ^八	瀬川	登志 ^九	芹澤	米子 ^三
鈴木	あい ^三	鈴木	恵み ^三	杉山	ひつ ^三	芹澤	ひで ^三	芹澤	光子 ^三	關	はつ ^三
杉本	治 ^三	杉本	二 ^三 三 ^三	杉山	隆 ^三	芹澤	すみ子 ^三	芹澤	千江 ^三	千田	しづ ^三
鈴木	とし ^三	鈴木	武津 ^三	鈴木	六四 ^三	關	みき ^六 實	芹澤	春江 ^八 實	芹澤	くに ^八 實
鈴木	うた ^三	鈴木	幸枝 ^三	鈴木	マスエ ^三	關	やす ^九 實	瀬川	文子 ^二	芹澤	ゑん ^二
杉山	秋子 ^三	鈴木	みつ ^七 實	杉山	さと ^八 實	瀬川	悦子 ^二	田中	きみ ^一	田中	てふ ^二
鈴木	初枝 ^八 實	鈴木	ゑい ^九 實	鈴木	かね ^二 實	田中	きみ ^一	武士	しげ ^五	高橋	まつ ^五
杉山	とし ^二 實	諏訪部	まき ^四	杉浦	ゑい ^二	田中	しづ ^三	田中	ミツエ ^六	建部	くわ ^六
杉山	富子 ^三	杉山	つる ^三	杉山	乙女 ^二	高野	のぶ ^五	高木	はる ^七	多羅尾	正 ^七
杉山	まさ ^三	杉山	筆子 ^三	杉山	みどり ^二	谷井	その ^七	高橋	はる ^八	高島	みき ^八
鈴木	億子 ^三	鈴木	まさ ^三	鈴木	みゑ ^三	高田	あい ^九	多家	はん ^九	武士	よし ^九
鈴木	博子 ^三	鈴木	ひさ子 ^二	鈴木	せつ ^二	武	よね ^九	立川	幸 ^九	樽井	みつ ^二
芹澤	ふみ ^二	世古	清枝 ^三	芹澤	よし ^四	田中	静江 ^二	民門	文枝 ^二	田中	るい ^二
瀬尾	嫩 ^五	芹澤	ふさ ^六	關本	とよ ^七	田代	いと ^二	高橋	いく ^二	鷹羽	やう ^二
關本	まつ ^七	關	ちる ^九	瀬川	ゑみ ^二	高梨	まさ ^三	田代	いく ^二	田村	清子 ^三
芹澤	とみ ^二	芹澤	とら ^二	關口	すみ ^二	高梨	まさ ^三	高橋	りく ^三	田村	清子 ^三

セの部

タの部

高木	こずゑ ^二 五	田中	せい ^一 專	田岡	はな ^五 專	高橋	八重 ^二	田川	田鶴子 ^二	田上	久米子 ^二
高田	たけ ^六 專	高島	ちか ^一 實	高島	とら ^四 實	高嶋	うめ ^二	田中	綾子 ^二	竹村	うた ^二
高田	みつ ^一 六	田代	きよ ^一 六	田代	政子 ^一 六	千葉	てる ^五	千秋	ちか ^二	中鉢	チトミ ^三
種田	千代 ^一 六	高田	里江 ^一 六	高木	はな ^一 七	辻	うめ ^四	坪井	てる ^五	堤	しげ ^七
田中	九萬子 ^一 七	田村	せい ^一 七	田代	とみ ^一 七	土屋	こう ^九	土屋	ふく ^九	辻	賤江 ^二
高島	ふく ^一 七	田村	くに ^一 七	高梨	浪江 ^一 八	土屋	よし ^二	土屋	珠 ^三	土屋	喜子 ^四
竹村	よし ^一 八	高須	きぬ子 ^一 八	高嶋	幸 ^一 八	土屋	たき ^二	土屋	静子 ^二	土屋	しづ ^二
武井	のぶ ^一 八	竹中	久代 ^一 九	高橋	かね ^一 九	土屋	たか ^三 專	土屋	幸枝 ^七	辻	ゑつ ^七
武山	いく ^一 九	樽井	タツ子 ^一 九	高遠	喜み江 ^一 〇	土屋	たか ^三 專	土屋	智代 ^九	辻	さち ^九
高須	きよ ^一 〇	但馬	スミエ ^一 〇	高田	ひさ ^一 〇	土屋	その ^七	土屋	キヨ ^{一〇}	辻	みや ^三
竹澤	初子 ^一 〇	田代	島 ^一 〇	高田	春江 ^一 〇	土屋	その ^七	土屋	智代 ^九	辻	さち ^九
高橋	さた尾 ^一 〇	高辻	マツエ ^一 〇	高柳	てる ^一 〇	土屋	さち ^三	辻	ちか ^三	土屋	しう ^三
田中	ます ^一 〇	高橋	富子 ^一 〇	田中	よし ^一 〇	土屋	さち ^三	土屋	ちか ^三	土屋	まき ^{一〇} 實
谷口	花 ^一 二	田畑	菊枝 ^二	高橋	つる ^三	土屋	秋子 ^三	土屋	つせ ^六 實	土屋	まき ^{一〇} 實
高梨	佳壽 ^二	高村	コウ ^三	高島	み恵 ^三	土屋	華子 ^三	土屋	まち ^三	土屋	文夫 ^二
樽井	ます子 ^三	田中	八重子 ^三	田中	久 ^三	土屋	しげ ^三	鶴田	華子 ^三	土屋	文夫 ^二
武	カン ^三	武繩	ミチ ^三	武山	かの ^三	手塚	あき ^七	手塚	やす ^三	寺尾	たき ^五
竹澤	ふじ ^三	高橋	静江 ^三	高木	まさ ^三	寺尾	けい ^一 專	手塚	とら ^七	手塚	はな ^{一〇}
田畑	貞子 ^三	樽井	りつ ^三	高島	年 ^六 實	寺尾	けい ^一 專	手塚	とら ^七	手塚	はな ^{一〇}
武井	房子 ^八 實	種田	イク ^{一〇} 實	瀧口	志津江 ^{一〇} 實	寺尾	けい ^一 專	手塚	とら ^七	手塚	はな ^{一〇}

トの部

鳥羽山とき一 飛奈 きん二 土井 まん五
 鳥羽山花七 飛奈 きぬ七 時 静子八
 飛奈 八重二 鳥羽山あさ三 戸枝 豊二
 富樫 モト七 戸田 千代八 土佐谷とし子九
 鳥羽山富貴子三〇 富樫 キヨ三 遠野 貞子三
 鴛矢 秀子三 土肥 はる三 伴野 はつ九
 富田富み枝二 樋田 きそ七 鳥羽山み佐子二四
 富岡 かよ二四

ナの部

中野 しん一 永井 いそ二
 中村 かゑ三 永井 やす三 長倉 うめ四
 永井 たき六 中村 松枝七 奈良橋あさ八
 中西 琴九 長倉 りん九 永倉 さめ〇
 長倉 榮〇 中村 きぬ二 長倉 みよ二
 奈良橋みわ二 長倉 てう二 永倉 たか三
 中村 八重三 永岡りやう四 永倉 てる四
 長澤 やま四 中村 房子四 長倉 良四
 永野 梅子四 長倉 清五 永井 しが五
 中西 ろく二專 中川 てふ三專 永井 なほ四專

中野 かつ五專 中村 しま六專 長澤 きわ四實
 永倉 とし六 中村 静江六 猶井かね子六
 中川 きん六 長澤 静子六 名取 喜子七
 中村 たき七 中山 俊子八 成島 ふく八
 長倉 ます八 永田富み子九 中村のぶ江九
 中島 由枝九 長澤 綾子九 長橋 静江九
 長澤 雪江〇 成田壽恵子〇 長澤 てい〇
 奈良橋千恵子〇 長澤 梅子二 中村 光子二
 長倉千枝子三 那須 美津三 中村富士子三
 中村千枝子三 中野 照子三 長倉 貞子三
 成島 三保四 名倉 み代七實 長澤 よし三
 長岡も、江三 長倉 はる二 長橋 なみ九實
 中野 ふじ三 長倉 松枝二 中野壽々子二
 長澤 靖世二 中川 政枝二 永野 花枝二
 西尾 ちる一 仁王 もと二 贊川 たよ二
 仁王 とし六 仁王 さだ六 仁木 よね七
 西 とよ八 仁藤 とし八 西山 ゑつ八

ネの部

西山 みき八 仁王 艶〇 丹羽 よし二
 贊川 加納三 西原 愛五 西山 らく二五
 仁王りやう一專 西原 やす五專 西山 うら七專
 西原 よね三專 西家 さく四專 西川富美代六
 西山 きぬ九 二宮 ふさ〇 二宮 芳江〇
 西原 文枝三 西澤 美津三 西山 初代三
 仁王 清江三 西尾 はる六實 西山 ふで六
 西山 ゆみ〇 仁藤 叶代二四 仁王 糸江二四
 西山 都二四

の部

根上 仙七 根上 愛九
 野田 たね六 野秋 静枝六
 野田みどり二 野田 幾枝二
 野田 こと四 野秋 こう四
 野崎 さい六 野秋 千枝六
 野際 清八 野田さくの九
 野崎 つね二 野上しづ子三
 野秋 政子六實 野田しづる二四

ハの部

阪東 あい一 服部 くに二 原 きよ三
 馬場 よね三 原 そで四 萩原ちさし六
 阪東 ふさ七 原川 すま七 馬場 きよ九
 阪東 賀〇 馬場 てい一 服部 ゑい三
 半場 てい三 阪東 たか三 橋木 利衛四
 阪東 ひで四 濱野 せん四 橋木 利衛四
 早川 三千四 萩原 くら五 林 有子五
 早瀬 ひさ五 原川 たつ三專 原 とも四專
 原川 いし四實 坂東 鶴六 伴野 利枝六
 馬場美智恵六 橋爪 幸七 長谷川 閑八
 原田 松枝八 原 ちる九 長谷川 慶九
 萩原 綾〇 島山 ムツ〇 長谷川貞江〇
 原 よし子二 萩原 まさ三
 秦 芳枝三 原 陸子三 濱野 綾子六實
 伴野 光枝三 服部 良九實 原川 静枝九實
 原 きん六實 島山 吉野二四 原 操二四
 長谷川さく九實 濱野 芳子二四 橋本 秀子二四
 久松 のと九 平松 ちる〇 泥谷 いく二

彦坂 きち二	日吉 みつ二	泥谷 良二五	細谷 はる二九	堀内 種子二〇	本多 照穂二四
平松 静江八	平田 きよ九	平澤 よし五專	間宮 すゑ二	間宮 まつ三	松井 きぬ三
廣瀬 しづ六專	日吉 はな二	日吉 松美二	増山 よし五	松島 しげ五	眞野 みつ六
久松 文子三三	肥田 藤枝三三	久松千代子六實	増山 やよ七	増山 みど七	横 八重八
平野 たけ九實	久川喜久江二〇	平山 數子二六	松平 文八	眞野 あき八	松田 ひろ八
一杉 花子二八	一杉 なみ二八	廣瀬 さと二四	前山 貞八	増田 うめ八	松浦 いど九
樋口 敏江二四	久川 貞子二四	久川 せい二四	松岡 雅二	前田 あき二	増田 うめ二
古川 三枝一	古川 玉枝五	古山 雅治五	松井 とき三	横 ふみ三	増田 つね二
深井 ふさ六	古谷 みつ六	深澤 きよ二	増田 いね五	間宮 さだ二五	増田 なつ二五
船山 ひろ二	古谷 ゑき二	藤井 はる二	横 はる二	町田 美江二五	増田 いさ一專
古川ちやう二五	深澤 千代二五	古谷 末二五	松本 つる二專	松島 きゑ二專	増山 たよ一實
福室 さと三專	福室 しげ六專	古澤 ひで二	増山 もう二實	眞野喜美子二六	増山 たけ二六
船山よしの二六	藤本 キク二九	藤原 瀧江八實	松井 はる二六	間宮 幸子二七	眞島 久子二七
深澤 静子二	深澤 長二	藤井 とも二	増山美代子二八	増田 てい二八	増山 治枝二八
藤井 金子三	古谷 ひろ三〇	藤井 晴子二四	増田 ふく二八	松平 千代二九	牧野 しずゑ二九
藤田 静子二四	藤井 貞二四	福本 晴子二四	間宮 章子二九	増山 銀子三〇	間宮 梅子三〇
本多 れん一	本多とくゑ三	堀田 ぬい八	松村 重三〇	前山 福子三二	益田 ヨシ三〇
堀内 みつ二	本多 茂穂二	尾谷 静六專	増田 わか三〇	増田 きみ三二	松村 秀子三二

眞野 實枝二	増田千恵子二	松岡 俊子三	光林 折枝二七	光林 はま二	三橋 いし三
松平 八重三	松浦 治三	間瀬 富美三	宮川ふじみ二四	室伏 しづ四	室賀 夏子八
益田 榮子三	増山美喜子三	丸尾 鈴子三	村松 いつ三	村松 せつ二	向笠 くめ三
眞野 きん三	松井千代子三	増田みつ江三	武藤 春九	村瀬 敦子二五	向尾 きん六專
増田 かわ九實	松井 豊子三	松井トキワ二四	村田みどり三	村田 静枝二六	室賀 美子三
眞野 初枝二四	増田 幸二四	増田 貴美二四	村井さの江一實	向笠 はる三	向笠 たけ三
増田 幸子二四	増田 しげ二四	宮口 てい一	室賀 行子三	村井 みち七實	村田 みち八實
水谷 この一	三宅 きよ一	宮澤 福松二	村田 慶三	武藤 富美二四	
水野 みち二	宮澤 富貴二〇	美濃部あい五	村松 納八實	森田 きくゑ三	望月 はな五
水口 政九	宮崎 もと二四	宮坂 とき二	森 たね	森 静世九	望月 しづ二
水野 とし二	水町 仙二五	水野 房二四	森山 元九	諸井よしゑ二四	森川 とき一專
宮澤 倭枝二五	水口 乙矢五實	水口 はつ三	望月 元九	森 ゆき二實	森田 茂子二六
宮澤 さい四實	水口 乙女二七	水野 澄子二七	望月 とき二	諸井 豊子二七	望月 幸子二九
宮澤まさ枝二六	宮坂 歌子二七	水野 澄子二七	森 まつみ二七	森田 龍江二九	森田 幸子二九
三井 いち二八	宮崎 乙女二七	三井ちる子二九	森 榮子二九	森 やゑ子三三	持田 はつ三三
水口 玉子二九	水口くに子三〇	宮口 まさ二	森 茂枝三三	望月 高次三三	望月 てる三三
水口みち子二	水野 松代三	水野千代子三	望月 豊子三三	望月 高次三三	望月 てる三三
宮川 茂三	三浦もと子三	宮内 由江二七	望月 保波三三	望月 高次三三	望月 てる三三
宮坂 てい三	宮内 ゆき八實	宮内 由江二七	望月 保波三三	望月 高次三三	望月 てる三三

森 きく三

森津 留子

森田美津子

二八〇

山形 りる一
山本 つな三
山田 きく四
山縣 てふ五
矢部 ちか八
矢崎 春九
山田 かね三
山崎 さく四
矢田 きみ五
山本 さい五
山田 つき三
山田 八穂四
山本 菊枝七
山越 春子八
山田 清子九
山本 花子九
山形 侑依〇
八木 あき〇

山田 つる一
山本 ちか三
山本 しづ四
山中 京子六
山本 くら八
山本 すぎ九
山本 あさ三
山本 めう四
矢部 豊五
山中 あき一
山田 ゑい七
山中 ふく四
山本 りん八
山田 しげ八
山田 君九
柳下 千代九
山本 君子〇
山田 かね〇

山本 ふさ二
八代 みよ四
矢田 きく五
山本 政七
山本 貞九
山田 ふみ三
山崎 よね三
八木 とも四
山本 うめ五
山田 さち一
山縣 さく二
山本 千代四
山田 とく子八
山田 みね八
山田 美代九
山崎 フミ〇
山添 美尾〇
山田 はなよ〇

山本千代子
山本 藤子三
八木 清子三
山本 きみ三
山本 ケン〇
山口 俊子二
山本 静江
湯浅 佳枝四
湯山 やす六
依田 しづ五
吉田 くま〇
吉田 ます二
吉田 なを四
横山 隆子六
横山 公子九
吉田 コウ九
横山 愛子〇
吉澤敏子二
吉田ゆき三
横山幸子八
吉川光子一

山本 てる二
八木 榮子三
山本 アキ三
矢部 美津三
山田 あい三
山岸 玉代二
山本 しげ子二
遊佐 貞八
湯原 さく九

山本 きく三
矢田富美恵三
山本 美子三
山本 てる八
山添 公子二
山本 つぎ二

横山 淨子八
米山 きよ二
横山 八重二
依田 喜和六
横山とわ子八
横川 みつ九
吉川 榮〇
吉岡 タミ二
横山幸子八
吉川光子一

米山 ぎん二
横山 ふじ二
吉田 艶五
吉村 ふみ六
吉田 益子八
吉川 富美二
吉川 文子三
吉田 勝子二
吉川光子一

ワの部

渡邊 しづ江一
渡邊 きよ六
渡邊 さやう八
渡邊 清九
渡邊 くに〇
渡邊 わか二
渡邊 けい三
渡邊 りつ五
渡邊 せい五
渡邊 艶四
渡邊 たけ六
若林 君枝八
和田 貴九
渡邊 みわ〇
渡邊 よし子二
渡邊 みよ二
渡邊 もと三
渡邊 静江三
渡邊 きよ八
渡邊 さよ八

渡邊 きく三
渡邊 かつ七
渡邊 實枝九
渡邊 なか〇
渡邊 みよ〇
渡邊 ふさ二
渡邊 道子二
渡邊 さと五
渡邊 うら三
渡邊 ふじ六
渡邊 坂江七
和田 よし九
渡邊 光子九
渡邊 操二
渡邊 静江二
渡邊 とし子三
鷺巢 せき三
渡邊 たか三
渡邊 きよ八

渡邊 はる六
渡邊 とき七
渡邊 とも九
渡邊 ふく〇
渡邊 利〇
渡邊 てい二
渡邊 道四
渡邊 壽五
渡邊 たつ六
渡邊 登美枝六
和田 のぶ七
和田 秀子九
渡邊 うら〇
渡邊 秀子二
渡邊 勝江三
渡邊 京三
渡邊 はる三
渡邊 喜美子三
渡邊 いよ九

若林 愛子二
渡邊 千代二
渡邊 幸二
若林 静江二
渡邊 ちる二
渡邊喜代子二
協田 くの二

和田 つる二
渡邊 婦美子二
渡邊 くの二

秋元 さく (大沼)東京北品川九
青山 さく (小川)田方郡戸田村
今井 りう (浅井)東京市芝區三田四國町二ノ七
市川 さく (加藤)沼津市上本町岩崎旅館
岩崎 ふじ (駿東郡金岡村東澤田)
江藤 あき (杉本)沼津市本通杉本寫真館
江藤 きた (平山)佐世保市八幡町
石橋 ちか (宇木)福岡縣若松市山手通六丁目
江藤 さだ (宇木)福岡縣若松市山手通六丁目
岡田 なつ 轉居先不明
岡田 のぶ

卒業生名簿

◎第一回本科 三十二名 (明治三十六年三月)×印ハ死去 (五十音順)

貴家さちえ (佐藤) 東京市本郷區駒込吉祥寺町三〇
 木内 さえ (秋山) 東京府下中野村
 久保 かく (鈴木) 御殿場町新橋
 河野 かの (清水) 栃木縣栃木町西原川向
 齋藤 やす (木田) 沼津市町方
 田中 きみ (後藤) X
 中村 こと (早房) 沼津市緑新地中村方
 西尾 千枝 (中村) 静岡市水落町
 野秋 たく (海老沼) 沼津市八幡町
 坂東 あい (市川) 東京市本郷區弓町二丁目二五番地
 古川みつえ (龜山) 甲府市白木町九六鐵道官舎
 水谷 どの (青島) 遠江見付町
 本多 れん (池谷) 沼津市追手町 池谷忠慶方
 中野 しん (金岡村岡ノ宮)
 宮口 てい (内藤) 伊勢四日市市
 三宅 さよ (寺尾) 安部郡千代田村上土
 森 たね (今村) 日本女子大學卒東京芝區田町四ノ六
 鳥羽山とき (今村) 日本女子大學卒東京芝區田町四ノ六
 山形 りえ 東京府下池袋町七一六
 山田 つる 片濱村東門間 山田喜代作方

渡邊 靜枝 原町原
 ◎第二回本科 三十名 (明治三十七年三月)
 秋山 つや (河内) 女高師卒、茨城縣助川驛目立村諏訪壺イノ三
 上田 たみ (長倉) 沼津市三枚橋町
 池谷 ひで (米倉) 申府市錦町
 岩崎 こと (勝又) 静岡市紺屋町
 碓 あき (荒川) 名古屋市東區杉村町一一七〇
 太田 ひろ (杉浦) 沼津市上土
 川田 けい 榛原郡菅山
 木内 たか (山田) 沼津市城内町條内
 加藤 なか (本多) 田方郡長岡温泉
 栗田 どり (長橋) 富士郡元吉原村大野新田
 佐野 てふ 沼津市下小路町
 杉山 くら (中山) 東京府下代々幡町代々木一五八七
 鈴木 つる X
 杉山 いと (渡邊) 富岡村富澤
 小島 靜 (渡邊) 滿州安東縣
 鈴木 いを 田方郡中狩野村船原
 芹澤 うめ 田方郡伊東町
 芹澤 フミ (矢下) 清水村柿田

田村 しづ (牧山) 日本女子大學卒、東京府下高田町四ツ家町
 田中 てふ (淺野井) 東京市日本橋區本銀町二ノ八
 永井 いそ (竹下) 静岡市梅屋町
 仁王 もと (野澤) 東京府下田端一六四 野澤裕方
 子上 ひさ (山田) 渡邊裁縫女學校卒三島町三島病院側
 費川 たよ (三木) 沼津市城内町条内 鈴木安平方
 服部 くに 富士郡加島村
 飛奈 きん (風間) X
 間宮 すゑ (大塚) 三島町菰池三、三二一番ノ一
 宮澤 福松 (小林) 高田市篠辻町
 水野 みち (石森) 名古屋市東區七曲町
 山本 ふさ (佐藤) 東京府下世田ヶ谷羽根木一七〇五
 ◎第一回専修科 十八名 (明治三十七年三月)
 碓 つね (菊地) 札幌市北二條東二丁目
 川口 なか 沼津市上本町
 加藤 よし (犬伏) 名古屋市東區西二葉町十八
 白岩 やす (佐藤) 沼津市市道
 鈴木 いと 沼津市下本町
 杉山 てい 浮島村根古屋
 關本 けい (杉本) 沼津市通橋町

杉山 なみ (加藤) 東京市下谷區上野花園町十三
 田中 せい (山田) 青島市甘肅路四六號 山田五郎方
 森川 とき (齋藤) 沼津市城内添地町
 増田 いさ (中川) 富士郡吉原町寺町
 山中 あき 沼津市城内
 山田 さち (丹野) 東京府下下澁谷町澁谷三〇
 石田 よね X
 仁王りやう X
 芹澤 さい X
 鈴木 うめ X
 寺尾 けい X
 ◎第三回本科 三十一名 (明治三十八年三月)
 井上 ちか (金子) 東京市四谷區傳馬町一丁目一〇
 岡田 みぶ (静岡市) 外安東村丸山八〇
 長田 きみ (披田) 日本女子大學卒、臺北大正街一條通二三ノ一
 大橋 うめ 函館市豊川町
 小澤 ひさ 東京市芝區三田四國町戸板裁縫女學校
 川田 きみ 沼津市三枚橋横宿
 金子しゆう (眞野) 沼津市楊原區我入道
 金森 かえ 富士郡富士根村

白岩 さと (川上) 東京市芝區白金猿町十三川上工作所
 佐藤 きよし 宮城縣桃生郡廣淵村
 鈴木 若代 原町桃里
 鈴木 きく (山本) 東京市外濫谷八六六
 世古 清枝 (岡本) 東京市赤坂區氷川町一七
 小早川 きく 三島町久保
 永井 やす (白岩) 沼津市千本
 馬場 よね (中俣) 兵庫縣武庫郡西郷町大石馬場方
 小出 てる (清水) 新潟縣三條町仲町
 本多 かくえ (高須) 遠江磐田郡井通村氣子島
 中村 かえ (木村) 沼津市通橋町
 間宮 まつ (古田) 東京市小石川區大塚仲町四十一
 松井 きぬ (小林) 深良村新田
 田口 しづ (佐藤) 富士郡吉永村桑崎
 森田 さくえ (羽田) 住所不明
 山本 ちか (大志摩) 富山市泉町五十九
 山本 つな 轉居先不明
 渡邊 さく (金子) 富士郡今泉村田宿
 原 きよ ×
 鈴木 ふみ ×

杉山 さくえ ×
 岡本 かめ ×
 村松 いつ ×
 ◎第二回專修科 二十五名 (明治三十八年三月)
 石井 せい 田方郡葦山村南條
 大林 英代 沼津市通橋町大林方
 小川 むら (石井) 田方郡田中村大仁
 中西 ろく (鈴木) 北米、カナダ、バンクーバー、オーレンホルムス
 松本 つる (濱村) 東京府下豊多摩郡内藤新宿角筈
 松島 きみ 沼津市上土町
 佐藤 やす 沼津市川廊町
 清水 伊志 「岩田」朝鮮平安地道朔州影山事務所
 鈴木 乙梅 「關」朝鮮京城大平町
 山田 つき 田方郡葦山村南條
 後藤 かね 富士郡須津村
 上田 たみ 本科ノ部出ヅ
 江藤 さだ 同
 齋藤 やす 同
 木内 たか 同
 杉山 くら 同

第四回本科 三十名 「明治三十九年三月」

池谷 ひで 同
 仁王 もと 同
 川田 けい 同
 田村 しづ 同
 山本 ふさ 同
 秋山 艶子 同
 宮澤 福松 同
 鈴木 つる 同
 芹澤 ふみ 同
 池田 いね 「菅野」金岡村東澤田池田方
 飯島 はる 轉居先不明
 植松 のい 「大沼」沼津市上土町
 小川 くに 「手塚」女子英學塾卒業、朝鮮京城貞洞三九
 大古田 ゆき 「渡邊」東京市外下濫谷二五英渡邊網治方
 神部 ふゆ 「宮内」山形聯隊區司令部宮内鐵太郎方
 海瀬 なか 「山田」大阪府住吉區天王寺町文野里三二五〇
 川 きわ 「坂本」住所不明
 片岡 ふく 「平田」女子職業學校卒業美東京府下入新井町不入斗
 栗田 いち 「日吉」田方郡葦山村山木

後藤 きよ 「新井」沼津市仲町
 齋藤 ふみ 「加藤」鳥取縣米子町鐵道官舎
 杉山 ひで 「神尾」大阪市西成區出城通七丁目
 杉本 そは 清水村堂庭
 芹澤 よし 轉居先不明
 辻 うめ 「太田」田方郡戸田村
 奈良橋 けん 沼津市楊原下香貫
 長倉 うめ 「工藤」愛媛縣松山市柳井町
 八代 みよ 東京女子商業學校卒業、沼津市上土
 山田 きく 「永倉」金岡村岡ノ宮
 湯淺 住枝 「木下」東京市小石川區久堅町七十七
 室伏 しづ 「大和瀬」新潟縣廳土木課長官舎
 杉山 うめ 「笹田」×
 齋藤 みよ ×
 木内 たく ×
 原 そで ×
 木村 きわ ×
 山本 しづ ×
 青木 あや ×
 工藤 いま ×

◎第三回専修科 二十名 『明治三十九年三月』

渡田 かよ 沼津市山王前町
 青木 よし 『中宮』富士郡大宮町
 飯田 意誠 大連市柳町七十九番地
 石井 ちよ 『岡村』住所不明
 原川 たつ 『齋藤』東京府下大森町小谷一六一二
 川 りう 『室伏』清水村長澤
 土屋 たか 沼津市上七町
 中川 てふ 『川村』静岡市吳服町
 福室 さと 『横山』富岡村千福
 水口 はつ 清水村伏見
 神保 ふさ 『笹瀬』東京市赤坂區青山南町六丁目三三五
 森田 こみ 『河口』沼津市楊原下香貫
 馬場 よね 本科ノ部ニ出ヅ
 岡田 みぶ 同
 金子 修 同
 松井 きぬ 同
 小早川 さく 同
 河野 かの 同
 世古きよえ 同

第五回本科 三十二名 『明治四十年三月』

足立 あさ 『鈴木』三河國一條驛
 秋元 ゆき 『鎮』田方郡三島町六反田
 今井 さら 『梅村』東京市麴町區下六番町四八
 板橋 いよ 東京市麴町區山本寺三ノ四幸畑方
 内田 いそ 『岡村』住所不明
 勝亦かしく 『小野』小山町
 海瀬 うめ 『中野』沼津市下本町
 寛 良 『小島』横濱市磯子町三二一
 木村 ひろ 『中村』神奈川縣鶴見天王院前
 栗田 とし 『上林』三島町田町
 齋藤 しづ 『淺田』田方郡上大見村地藏堂
 鈴木 なみ 『土屋』清水市波土場八六
 鈴木 いく 『大島』住所不明
 武士 しげ 沼津市上土町
 高橋 松代 沼津市魚町
 高野 のぶ 『伊東』鷹根村椎路
 千葉 てる 福島縣平町鷹匠町
 寺尾 たき 『石垣』清水村新宿

瀬尾 嫩 藥劑師、沼津市楊原吉田町
 坪井 てる 東京裁縫女學校卒業、静岡市人宿町二丁目
 土井 まん 『直井』日本女子大學卒業、東京府下代々木
 初臺五二〇

岡田 千代 東京市麴町區飯田町五丁目
 古山 雅治 『平山』横須賀市元町廿一
 古川 玉枝 『阿部』東京市芝區白金今里町一五六、古川方
 松島 しげ 『渡邊』沼津市上土町松島方
 美濃部 あい 沼津市下小路町
 望月 はな 『森』賀茂郡松崎町
 増山 よし 片濱村松長
 山縣 てふ ×
 岩崎 ふみ ×
 島田 くめ ×
 矢田 きく ×

◎第四回専修科 十一名 『明治四十年三月』

内村 まさ 『杉山』沼津市下小路町
 大塚 でん 『山岸』沼津市綠新地
 桑原 せき 『土屋』田方郡修善寺町温泉場
 鈴木 清枝 『原』田方郡修善寺町温泉場

◎第六回本科 三十九名 『明治四十一年三月』

笹原 せい 『大塚』富士郡須津村増川
 永井 なほ 『鷺巢』横濱市西戸部町石崎一七八九
 原 とも 『武藤』住所不明
 渡邊 うら 『大庭』深良村深良
 植松 ぬい 本科ノ部ニ出ヅ
 青木 あや ×
 大槻 ふじ ×

齋藤 ふみ 住所不明
 杉山 しう 「川島」神奈川県横須賀市汐入
 神保 きよ 「山田」東京市外千駄谷五六二
 杉山 てる 「原田」支那北京順治川外西草做胡同
 鈴木 ふみ 「前田」大阪市北區東梅町二七
 栗田 とし 「後藤」富士郡須津村神谷
 坂本 さと 「竹内」横濱市野毛町一ノ二四
 芹澤 ふさ 「田邊」沼津市西條町
 建部 くわ 名古屋市東區出來町二ノ五九
 多々良 けふ 富士郡鈴川驛前
 永井 たき 「黒田」神奈川縣久良岐郡金澤村長濱
 野秋 静枝 「高島」神奈川縣足柄上郡松田町惣領
 仁玉 とし 「杉浦」×
 深井 ふさ 「白岩」北海道千島
 野田 たね 「大原」神奈川縣三浦郡浦賀町大谷
 萩倉 ちさる 富士岡村神山
 山中 京子 「堀井」沼津市宮町山中方
 依田 しづ 「小島」滿州本溪湖石山町六十四
 田中 みつえ 「櫻井」×
 仁玉 さだ 「秋山」×

大熊 みどり 「伊藤」×
 渡邊 はる 「吉村」×
 眞野 みつ 「鈴木」×
 古谷 みつ ×
 阿部 貞子 ×
 第七回本科 五十七名 「明治四十三年三月」
 秋山 しう 轉居先不明
 秋山 國野 轉居先不明
 足助 まさ 「小山」遠江相良町
 碓 はる 「大村」三島町久保町
 井出 とめ 「佐野」静岡市茶町二丁目
 岩崎 せい 「古池」千葉縣原市郡菊間
 岩崎 とみ 「山本」泉村茶畑
 飯島 みね 「望月」東京府下代々木山谷一〇九
 池田 よね 「川島」富士郡吉原町
 梅田 あい 「北出」名古屋市中區市場
 宇津木 いせ 女子職業學校卒業、長泉村宇津木茂作方
 遠藤 まさ 「杉山」北米加洲タマリンド市
 江藤 せつ 「杉本」富岡村今里
 江藤 すぐ 「杉山」伊豆田方郡長岡

大竹 ひさ 横濱市西戸部町境谷一六七〇
 小澤 つね 「光林」金岡村岡ノ宮
 岡野 ひろ 「穴水」東京小石川區指ヶ谷町四七
 小野 いち 沼津市本通
 奥山 えん 「川崎」八丈島樫立村
 大村 やす 沼津市城内添地
 加藤 だい 「山下」長野縣南佐久郡北牧村山下晟方
 加藤 喜女 「玉城」東京府下中野町千光前三〇四三
 川田 しげ 「池谷」南洋スマトラ島
 久保 みや 沼津市城内西條町
 栗田 とく 「上村」×大正十一年九月二十八日死亡
 木村 あき 原町原
 佐藤 こと 「前山」沼津市上十町一九
 後藤 みす 「芹澤」金岡村西澤田
 佐藤 こと 「市川」神戸市都野町三丁目五番地
 佐々木 せん 女子職業學校卒業、鎌倉町雪ノ下三八六
 杉山 しん 「岩崎」神奈川縣鎌倉郡戸塚町吉田
 鈴木 きり 富岡村千福
 關本 じよ 「服部」泉村平松
 關本 まつ 「杉山」清水村堂庭

齋藤 みつ 「植松」横濱市長者町四丁目四五
 河野 千代 「米山」沼津市七反田
 高木 はる 「遊佐」女子美術學校卒業、横濱市青木町栗田谷
 多羅 尾正 奈良市天高市町？
 飛奈 きぬ 「齋藤」山形市諏訪町三七〇齋藤文藏方
 堤 しげ 「中尾」東京小石川區大塚下町六九堤方
 手塚 あき 「原田」方郡三島町田町
 中村 松枝 「水口」沼津市千本濱中村方
 根上 仙 原里村杉名澤
 谷井 その 住所不明
 坂東 ふさ 「菅沼」沼津市追手町
 原川 すま 住所不明
 増田 みよ 「眞野」田方郡江梨村
 増山 やよ 「田中」清水市港上二丁目
 増山 みと 「芹澤」泉村茶畑
 山本 政 沼津市追手町旅館
 渡邊 かつ 須山村
 渡邊 とき 「諏訪」岡山市南方七五四
 柳下 三己 「大鹽」女子高等師範學校卒業×
 杉山 あさ ×

鳥羽山 花 ×
 土屋 とし ×
 仁木 よね ×

◎第五回専修科 十一名 「明治四十一年三月」

井上 さく 「土屋」東京府下澁谷町一八五六
 青木 ちよ 「加藤」泉村茶畑
 磯部 巳子 「中井」沼津市上本町磯部方
 木下 きう 「青木」田方郡葦山村原木
 鈴木 しか 「須山」村須山小學校長宅
 間宮 みね 「森光」日光町田母澤御用邸内
 平澤 よし 「富士郡」吉原町平澤喜太郎方
 中野 かつ ×
 西原 やす ×
 遠藤 しづ ×
 田岡 はな ×

第六回専修科 十七名 「明治四十二年三月」

太田 かめ 「長沼」東京市日本橋區箱崎町四ノ一長沼龜藏方
 大石 さく 「加島」山梨縣甲府市穴切町
 勝間田 さと 「土屋」高根村清後
 齋藤 しげ 轉居先不明

鈴木 せい 御殿場町深澤
 鈴木 さら 原町原鈴木平十方
 鈴木 てる 佐野村大島
 杉山 しう 本科ノ部ニ出ヅ
 高田 たけ 原村一本松高田徳三郎方
 尾谷 静 大平村小山野田勇次郎方
 福室 しげ 「大城」京都府綾部町郡是製糸會社
 廣瀬 しづ 「湯田」東京裁縫女學校卒業、長野縣下伊那郡飯田町
 渡邊 たつ 田方郡中狩野村雲金
 向尾 きん 「早川」東京市牛込區喜久井町三十六番地
 田中 光江 ×
 中村 しま 東京女子美術學校卒業 ×
 大槻 さくえ ×

第八回本科 四十五名 「明治四十三年三月」

青木 しづ 「鶴田」住所不明
 青木 静枝 「秋元」大岡村下石田秋元公雄方
 青木 さめ 「松井」住所不明
 青木 きみ 「石塚」東京府下平塚村戸起二、九八石塚廣強方
 井上 けい 沼津市御成橋通り
 石橋 この 鷹根村鳥谷

泉名 たま 「郡山」東京女子美術學校卒業、東京牛込區新小川町
 伊藤 きよ 「北川」臺北市泉町一丁目一北川喜輝方
 西 とよ 「市川」東京市牛込區北町三番地
 岡田 せい 「西内」東京市外大崎町下大崎一五五
 河上 のぶ 「田中」爪哇洞水
 勝地 ろく 「岩野」東京神田區佐久間町三丁目廿一
 栗田 富尾 「正木」東京市京橋區築地三丁目六七
 小林 はる 沼津市志多町
 佐藤 喜代 「大森」日本女子大學卒業、東京市牛込區赤城下五三
 佐伯 花 「江口」片濱村西間門
 澤 あさ 「杉本」東京市神田區錦町一丁目一番地
 杉山 さだ 東京市小石川區原町十三番地にノ二
 高橋 春 「大野」東京府下目白
 小池 ふさ 大阪方面不詳
 高島 みき 沼津市八幡町
 風間 壽 「森田」沼津市追手町一丁目
 仁藤 とし 「芹澤」女子師範二部卒、臺南市竹園町一ノ二
 西山 ちづ 北米加洲
 奈良橋 あさ 「秋山」田方郡中郷村安久
 西山 みき 「石川」三島町小中島

長田 くら 「小野」甲斐南都留郡吉田村
 堀田 ぬい 沼津市八幡町
 平松 静江 「吉澤」富士郡加島村柚ノ木
 松平 文 「青木」庵原郡興津町横山
 室賀 夏子 「松本」日本女子大學卒業、東京日本橋區伊勢町
 眞野 あき 「金高」東京京橋區新築町三島商會
 前山 貞 「鈴川」沼津市上土町一二〇
 増田 うめ 「大石」静浦村獅子濱
 矢部 親 沼津市通横町
 遊佐 貞 北海道膽振國有珠郡
 横山 淨子 片濱村今澤横山捨吉方
 渡邊 さやう 「伊東」大阪市住吉區上住吉二六七伊東豊吉方
 飯田 つた ×
 横 八重 「川口」×
 須摩 かつ 東京女子職業學校卒業 ×
 時 静子 ×
 秋山 つね 「多田」×
 松田 ひろ ×
 山本 くら ×

◎第九回本科 六十三名 「明治四十四年三月」

青木 静 「中島」上海福州路十九
 秋元 ゆき 沼津市追手町二丁目
 青木 くみ 「蛭海」東京市淺草區向柳原町一〇
 市河 のひ 「望月」文部省臨時教員養成所卒業、仙臺
 市東七番町一二六
 市川 ゆき 沼津市楊原區上香貫
 岩田 わか ×
 市川 いと 「鈴木」沼津市我入道町
 井上 愛 「加賀」東京市神田區表神保町七
 市河 ひで 「緒明」東京府下池上村字提方
 市川 きよ 「尾川」田方郡三島町大島
 植田 みよ 「安間」名古屋市熱田區中門
 宇佐美 やす 静岡市宮ヶ崎町
 小澤 さか 「石井」女子高等師範學校卒業、東京府下北田端五八
 岡野 充 「依田」東京市小石川區宮下町三九
 小川 はま 金岡村中澤田
 岡田 琴 「曾根」田方郡三島町大社前
 大川 さだ 「高井」横須賀市深田町一五七
 神部 きみ 沼津市楊原西嶋町

川田 静 「吉田」沼津市末廣町舊商業學校前
 木村 やゑ 「渡邊」原町原三四三
 木村 しげ 「鳥養」東京赤坂區青山南町
 後藤 要 「望月」富士郡吉原町
 齋藤 花 沼津市楊原殿ノ前
 柴田 つる 轉居先不明
 關 ちゑ 「川邊」三島町市ヶ原
 立川 幸 「兵頭」横須賀市澤田一四八
 高田 あい 「南澤」東京市淺草區二丁目
 多家 はん 沼津市平町多家方
 木内 榮 改名「中村貞子」女子職業學校卒業熊本市黒頭町
 後藤 八重、赤池「女子師範」二部卒業富士郡大宮町黒田
 土屋 こう 「野中」静岡方面住所不詳
 土屋 ふく 「齋藤」沼津市仲町
 根上 愛 「岩田」静岡市縣立中學校前
 中野 茂枝 「辻」東京市本郷區蓬來町六辻聞一方
 中西 琴子 「川口」女子師範二部卒業、駿東郡高根村小學校
 長倉 りん 「今杉」沼津市上本町
 武 よね 沼津市城内町町方
 馬場 きよ 兵庫縣武庫郡西郷町大石

久松 のと 沼津市楊原小學校
 松浦 いと 「杉山」田方郡三島町木町
 平田 きよ 「久保田」神戸市港川町三丁目三番地四十八ノ四
 武藤 春 「岩瀬」東京市本郷區駒込神明町十三
 森山 之 東京市麴町區上二番町六
 増田 ふみ 清水村徳倉
 森 静世 東京府下下澁谷中野伊重方
 杉本 みつ 沼津市楊原外吉田町
 鈴木 つるよ 東京市四谷區南町十九番地伊東方
 杉山 ちか 「梅原」田方郡三島町久保町
 山本 貞 大阪府下吹田町出口
 杉山 くら 「徳倉」東京市深川區扇橋町三小名木川橋
 矢崎 はる 東京女子職業學校卒業
 水口 政 「鳴戸」田方郡伊東町玖須美
 清水 玄 「勝亦」沼津市楊原上香貫市場
 山本 すぎ 「長畑」女子師範二部卒業、大阪府港區朝日組
 柳下 淑 筑前國久留米市柳下大藏方
 湯原 さく 轉居先不明
 渡邊 實枝 「瀬川」田方郡三島町大社前
 渡邊 とみ 片濱村松長

◎第七回専修科 六名 「明治四十四年三月」

市川 江 ×
 武士 よし ×
 池田 はま ×
 渡邊 きよ ×
 野村 綾 ×
 淺沼 みつ 片濱村大諏訪淺沼義信方
 關 わき 「里澤」駿東郡小山町紡績會社々宅九ノ一
 西山 うら 北米加洲ロスアンゼルス市
 鈴木 こう 「芹澤」沼津市楊原上香貫二二七
 山本 ゑい 「戸田」清水村戸田
 杉山 せい ×

◎第十回本科 廿九名 「明治四十五年三月」

有馬 ぞく 「栗田」朝鮮鎮海番町海軍官舎
 井口 つな 「田代」長泉村三島驛前
 今井 幸 東京市麴町區下六番町四八梅村方
 井上 雪枝 「八木」神戸市和田宮通四丁目四〇三菱倉庫
 栗田 はる 「木村」長泉村下土狩
 小柴 さと 「初又」田方郡内浦村三津
 齋藤 きよ 「鈴木」東京市本所區綠町二ノ廿三

鈴木 操 【關】女子英學塾卒業、北米加洲ロスアンゼルス
 後藤まさを 【池田】和洋裁縫學校卒業、東京本所區元町二十五番
 菊地 かつ 轉居先不明
 井口 緑 【荻野】三島町停車場前
 仁王 艶 【小島】神戸市六番町一丁目五十七小島達方
 永倉 さめ 【賀川】三島町七五一賀川大治郎方
 長倉 榮 【柳田】大阪天王寺區北山町二七ノ二
 坂東 賀 【栗田】沼津市追手町一丁目
 馬場 てい 【吉本】岡崎市福壽町一二四
 平松 ちる 【勝又】東京市芝區三田四國町二ノ十一
 吉田 くま 【丹羽】田方郡熱海町
 米山 ざん 【宇野】田方郡内浦村長濱米山喜助方
 渡邊 なか 【村岡】東京府下大井町篠ヶ谷六一三六
 渡邊 ふく 【久保田】田方郡韭山村長崎
 渡邊 くに 【植松】北米加洲ロスアンゼルス
 渡邊 みよ 【本多】逗子驛長官舎本多秀果方
 渡瀬 利 【金田】下關市西大坪町三段田金田良一方
 宮坂 富貴 【川西】×
 青木 れん 【青木】×
 井上 まち ×

栗田 かつ 【江恪】×
 木村 すゑ 【芹澤】×
 秋山 つね 【森】金岡村東澤田
 秋山 ます 【中山】沼津市魚町
 石橋 みつ 鷹根村鳥谷
 飯田 はる 【井關】大連市近江町一八七
 小澤 いま 【白井】豊橋市曲尺手町八九
 大木 千代 神奈川縣足柄上郡川村山北大木峰藏方
 岡田 翠 【牧野】富士郡上野村下條
 大竹 のぶ 【大谷木】東京市四谷區籠崎町三十五、大谷木廣方
 川村 るい 金岡村熊堂
 池谷 茂 【菅沼】甲斐吉田町杏花堂藥舖
 片山 さく 【佐川】東京府下下澁谷五三片山由次郎方
 藏納喜代子 沼津市三枚橋
 木村 ふじ 【寺澤】東京府下大久保百人町二六一
 栗田 靜 【長橋】北米加洋サクラメント市ヨロヅ商會
 久保 みつ 【野瀬】東京府下巢鴨二丁目
 栗田 かつ 【廣田】濱松市元町二二七栗田國吉方
 河邊 さく 【岩城】東京府下大崎町桐ヶ谷五六

工藤 よし 【野毛】田方郡土肥村
 笹原 しの 東京府下西 鴨宮仲二二〇九
 笹原 しも 【阪部】靜浦村志下
 佐藤 年 【金井】東京府下下澁谷三〇
 佐藤 靜重 【矢部】沼津市白金町
 齋藤 よし 【小澤】東京日本橋區南萱場町五十二
 鈴木 くに 田方郡熱海町濱町
 鈴木 きん 【國司惠子】南洋ボルネオ
 田中 靜江 青島市甘肅路四六號山田吾郎方
 民間 文枝 轉居先不明
 鈴木 まつ 【小林】田方郡西浦村江梨
 鈴木 のぶ 【深澤】沼津市八幡町
 田代 いく 沼津市本通町
 辻 賤江 女醫、東京府下代々木一八五大久保方
 樽井 みつ 【一杉】岐阜市大寶町一杉榮方
 土平 よし 沼津市千本濱入口九〇九
 瀬戸 えい 【岩野】高根村上小林
 白岩 ちる 【市川】片濱村小諏訪市川誠一方
 鈴木 ふじ 東京市外大井町出石五〇三五
 鈴木 岩枝 【梅田】賀茂郡仁科村栗原

飛奈 八重 【早川】東京府下世田ヶ谷下北澤甲山谷六七早川
 岩崎 ちか 沼津市我入道濱方岩崎竹次郎方
 鳥羽山つね 【小島】沼津市三枚橋清水上二二〇
 長倉 みよ 【石川】三島町芝町
 遠藤 よし 【鈴木】小泉村裾野
 野秋みどり 金岡村一色
 中村 きぬ 【佐藤】田方郡伊東町玖須美
 深澤 きよ 【今淵】甲府市富士川町深澤榮藏方
 泥谷 いく 【横川】東京市日本橋區カキガラ町一ノ四
 本田 茂穂 【齋藤】濱松市板屋町
 望月 しづ 【福地】三重縣松阪町福地由廉方
 松岡 雅 沼津市上土町
 堀内 みつ 【高橋】東京市本郷區駒込林町二〇一
 前田 あき 【山田】東京芝區高輪南町三〇
 横山 ふじ 庵原郡小島村
 渡邊 わか 住所不明
 渡邊 ふさ (池田)×
 米山 きよ ×
 田中 るい ×
 田村 どり ×

◎第一回實科 五名 「大正二年三月」

村井さのえ 「堀内」小笠郡西郷村西郷
高島 ちか 原町原 高島龜吉方
増山 たよ 「關田」方郡田中村大仁
大槻はまの ×
木村 いと ×

◎第十二回本科 六十一名 「大正三年三月」

秋元 喜與 「小野」小野共立女子職業學校卒業東京市本郷區駒
青木 さた 「小林」大岡村下石田青木竹治方
青木 たま 横濱市山手二〇九共立女子神學校
飯田 くめ 「富岡」舞鶴軍港官舎富岡愛次郎方
伊藤 たま 「後藤」東京府下日暮里一〇三八番地 後藤守一方
池田 八重 「根本」東京麻布區六本木根本喜兵衛方
井上 させ 「德田」片濱村大諏訪
石井 のぶ 「栗原」北米加洲サンデン市
今澤 ふみ 静岡市鷹匠町三丁目工業學校附近
稲野 さく 「福田」東京市牛込區看町二六福田啓吉方
伊東 さく 「中村」愛知縣知田郡半田町
遠藤 とみ 「廣瀬」東京市芝區愛宕町四ノ一
大川 千枝 「芹澤」大岡村高田

大島ひさこ 「齋藤」住所不明
大嶋 せき 「渡邊」長泉村中土狩
大川 あい 「芹澤」北米シャートル市
大嶽 いち 「龜井」大連市沙河口特第二ノ土龜井光作方
大野 磯 「田邊」横濱市元町三丁目
海瀬 家壽 田方郡西浦村河内
勝地 はな 「森本」京都市下京區五條通間ノ町
金子 はな 「小澤」富士郡吉原町
菊池 つや 「司城」住所不明
川口 いと 「山中」滋賀縣甲賀郡雲井村黃瀬山中道二方
隈部 千恵 「高橋」東京市芝區白金今里町一五八古川方
久保 はる 「松浦」東京府下巢鴨町二六
後藤 つる 「柳下」小泉村裾野温情舎
後藤 文 「水野」沼津市城内条内町水野醫院内
齋藤 その 沼津市魚町齋藤千之助方
鈴木 けい 小泉村佐野一四三鈴木米藏方
鈴木 のぶ 賀茂郡下田町池ノ町
鈴木 どう 濱松市元魚町稻葉一七〇
杉野 良子 神奈川縣橋本郡鶴見町生麥ツムヒ丘村一、九三二
芹澤 とみ 「須磨」沼津市楊原上香貫黒瀬

芹澤 とら 「菅沼」横濱市山吹町一ノ三菅沼君平方
庄司 さく 「西田」清水市清水町美之輪西田平之助方
千秋 ちか 「鳥澤」東京市牛込區赤城下町十五番地豊吉方
奈良橋みわ 「松井」深良村深良
丹羽 よし 「佐藤」富士郡吉永村桑崎
長倉 てう 「西尾」朝鮮舊馬山
野秋喜代枝 「大平」横濱市南吉田町九二〇大平市郎方
船山 ひろ 「稻葉」横濱市花吹町六ノ八一
古谷 めき 「柴田」東京市赤坂區表町四ノ一〇
馬場 トキ 「木村」神戸市平野馬場町二七一
村松 せつ 「鎗田」富士郡傳法村
野田 幾枝 「長倉」沼津市福宜ノ後町
望月 とよ 「芹澤」東京市日本橋區箱崎町四丁目一番地四號
宮坂 とよ 「内田」東京市築地二丁目十八番地内田壯吉方
増田 うめ 「大石」静岡村獅子濱六石銀藏方
柳下 千万 「倉出」横濱市北方町四二八
鷹羽りやう 「石崎」女子師範二部卒業神奈川縣足柄下郡温泉
山田 ふみ 「豊田」東京府下戸塚町諏訪二四九
山田 かね 住所不明
岡田 富士 松江市北堀仲ノ町八六岡田康方

◎第二回實科 十名 「大正三年三月」

吉田 ます ×
藤井 はる ×
彦坂 さち ×
日吉 みつ ×
渡邊 てい 片濱村松長
渡邊 けい 「杉山」沼津市添地町二〇五
渡邊 道子 名古屋正東區田代町月見坂二二ノ六渡邊宇吉方
薬科 とみ 「篠崎」志太郡豊田村小槌
井出 ざん 「阪東」沼津市魚町
市川 千代 三島町久保町市川和雄方
上田 はる 「永淵」東京市小石川區五十三
江本 智女 「清水」大阪府外天王寺町天王寺
笹原 芳 「西郷」大連市外沙河八丁目北二十五
杉澤 美代 「佐藤」岐阜縣可兒郡兼山町
關 千枝 「西原」田方郡南村仁田
森 ゆき 御殿場町新橋九十九森茂吉方
山縣 さく 東京市下澁谷一七五一山形鼎一方
鈴木 けい ×

第十三回本科 五十一名 「大正四年三月」

市河 とも 「稻生」神戸市千鳥町二ノ一二
 市川 ひろ 「大富」横濱市根岸町麥田三八二二
 飯田 あい 「宮原」東京府下中野町本郷十番地
 植松 千年 女子師範二部卒業、麻布區相生町七十六植松政雄方
 秋山 たい 「岡田」岡山縣兒島郡宇野藤井海岸
 風間 しん 「阪東」三島町大中島町
 神谷 てい 「山出」沼津市上香貫寺ノ前
 川村 よね 沼津市楊原吉田永代橋詰
 加藤 ふじえ 榛原郡白羽村
 岸本 とも 「富原」東京女子美術學校卒業、御殿場町御殿場六五
 木下 貞 「湯淺」天津支那駐屯軍司令部氣付
 久保 れい 「三谷」沼津市三枚橋中舞臺一七六
 工藤 しげ 片濱村小諏訪
 栗田 てい 「土屋」田方東伊東松原
 工藤 しん 横濱市蓬萊町一ノ八
 古根村 ちる 「西村」臺北市富田町八三西村藤助方
 笹原 うめ 「粕谷」東京市芝區新櫻田町一九
 笹原 タイ 「坂部」靜浦村志下
 鹽谷 きみ 沼津市出口町六三六
 志賀 かん 北海道膽振國虻田郡虻田村白洞

鈴木 芳 「深澤」女子高等師範學校卒業、富士郡大宮高等女學校
 杉山 茂 「杉本」東京府下南品川鎗ヶ崎九〇七
 鈴木 あい 「神」田方郡北上村徳倉
 杉山 みこ 「中込」横濱市南吉田町
 杉山 みね 「三浦」東京府下大井町三ツ木
 鈴木 こと 沼津市楊原我入道町
 高梨 よさ 「相原」田方郡田中村田京
 高橋 りく 沼津市淺間町
 田村 清子 神奈川縣足柄上郡曾我村字西大井一〇
 大隈 たい 女子師範二部卒業(田中)東京市外駒澤村馬引四六一
 手塚 やす 「鈴木」東京府下大森町八幡海岸
 鳥羽山 あさ 「青木」沼津市平町鳥羽山方
 戸枝 豊 千葉縣一ノ宮戸板梅子方
 永倉 たか 「賀川」東京日本橋區南茅場町四五
 中村 八重 東京市小石川區戸崎町九四
 贊川 加納 北米、ワシントン州シャートル市日本領事館
 半場 てい 原町六軒町二一六
 阪東 たか 「寺田」富士郡大宮町驛前
 服部 ちい 「内山」神奈川縣鶴見町山谷一九三六
 水野 とし 「大賀」沼津市蛇松

松井 とき 「荒木」伊勢山田市岩淵町松井彦三方
 向笠 とも 清水村徳倉
 土屋 珠 「海老名」田方郡上大見原保
 横 ふみ 「林」沼津市城内条内町横方
 向坂 いく 「諏訪部」長泉村上土狩
 村田 みどり 沼津市城内添地町二〇七
 山本 あさ 「瓦本」下關市田中町川端
 山崎 よね 「野秋」沼津市追手町二丁目
 加藤 つる ×
 二見 ふさ 「渡邊」×

第十三回實科 四名 「大正四年三月」

西原 よね 「神戸」三島町小中島
 杉澤 いく 「市川」富士郡田子浦村鮫島
 山田 八穂 ×
 井口 いと ×

第十四回本科 七十六名 「大正五年三月」

青木 豊子 「田村」北米オレゴン州グレシントン市トロアール
 瀧部 たか 北米シャートル英學校在學
 秋元 あき 大岡村石田秋元喜久雄方
 東 きよ 「大庭」沼津市本通り

石井 はつ 「山崎」東京府下西多摩郡霞村師岡山崎孫七方
 市川 きよ 「長橋」沼津市魚町
 井口 とわ 岡山門田徳吉町立商業學校前
 市川 昌子 「尾澤」東京府下西貝鳴町堀ノ内一五一
 稲村 まき 「稻垣」東京市芝區濱松町三丁目二十一番地
 井上 琴代 女子職業學校卒業、沼津市上土町
 青木 乙枝 東京女子職業學校卒業、横濱市中村町五六六
 井上 雪子 「田峰」神戸市平野上三條八七ノ二
 伊藤 ひやく 「清水」富士郡吉永村比奈清水慎一方
 市河 ふさ 「杉山」女子職業學校卒業、清水市辻町新道
 飯塚 愛子 「小早川」三島町六反田
 岩崎 やす 米國シカゴ卒業引續滞米
 内海 與志 「川口」鷹根村鳥谷川口俊雄方
 植松 ヨネ 金岡村東澤田一五植松峰雄方
 上原 とく 「榎田」住所不明
 江藤 みち 「濱野」田方郡井田村
 小尾 いよ 女子職業學校卒業、東京四谷區須賀町三六
 岡野 貞子 「三宅」富士郡大宮町神田
 岡本 ふく 「青沼」戸板裁縫女學校卒業、東京牛込區山吹町一六
 河野 美津 「稻葉」神奈川縣橋樹郡田村潮田

川村 敬 「渡邊」横須賀市逸見三四六
 河邊 よね 沼津市志多町
 川島 春子 「遠藤」女子師範二部卒業、鹿原郡内房村場出
 木村 千代 「關谷」東京淺草區新福井町三
 菊池 ゑい 「藤井」沼津市下本町
 久保田 よね 「西川」東京市本郷區駒込動坂町三〇八
 口野 よし 三島町久保町
 小泉 公子 「栗原」神奈川縣南秦野村今泉
 小池 静江 「黒野」東京市下谷區上野廣小路一八
 後藤 さだ 「三木」田方郡北上村佐野
 笹原 じよ 「笠原」賀茂郡西豆村小下田
 佐野 すへ 「栗田」東京市牛込區原町一ノ四九北村やす方
 佐野 さよ 東京市赤坂區氷川町五十一
 坂 光子 「秋山」東京麻布區宮村町三四
 清水 マツコ 「和田」神戸市布引町二ノ八五赤尾方
 鈴木 代子 「井上」東京市麻布區櫻田町二八
 鈴木 百代 富士郡元吉原村今井
 鈴木 より 燒津町城之腰鈴木仙次郎方
 鈴木 ひろ 長崎市立山町一三七番地鈴木省吾方
 須賀 なか 「伊藤」南滿州安奉線南攻鐵山伊藤開一方

關口 みすゑ 住居不明
 關 ます 神奈川縣足柄上郡川村山北
 水野 ろめ子 長泉村本宿岩崎幸一方
 長倉 良 「土屋」田方郡内浦村重須
 中村 房子 静岡市不二高等女子校幼稚園内
 長澤 やま 「川村」東京府下西巢鴨町池袋本村三三五
 中塚 せき 清水市出作九五ノ二ノ二中塚新藏方
 藤龜 たけ 富山縣魚津町橋場
 野田 こと 「富坂」東京上野驛前山城屋旅館
 野秋 こう 金岡村岡一色
 早川 三千 沼津市条内町堀内幸三郎方
 橋本 利衛 「金子」神戸市東須磨町月見口三三二ノ一〇
 濱野 せん 東京市淺草區藏前片町五
 坂東 ひで 「山田」三島町田山田八郎方
 土屋 たき 「土屋」東京市外落合町小山二二九土屋寛通方
 土屋 喜子 秋澤女子職業學校卒業静岡市音羽町一八八秋澤芳雄方
 廣瀬 しゆん 北郷村大古田
 土屋 静子 「湯淺」厚板裁縫女學校卒業、京都市外深泥池二四
 光林 チエ 「渡邊」小泉村富澤
 水野 房 「栗原」田方郡葦山村中、栗原誠方

宮崎 もと 富士郡吉原町東本町
 諸井 よしゑ 齒科醫、賀茂郡三濱村子浦
 牧野 つね (入江)東京市本所區綠町三ノ四三
 山本 千代 (石田)東京市牛込區新小川町一ノ一、石田得太郎方
 山崎 幾久 御殿場町御殿場丸ノ内山崎松雄方
 土屋 しづ (杉本)東京府下豊多摩郡代々幡町笹塚一〇三六
 八木 ふさ (鈴木)三島町二日町
 横山 八重 (藤田)山梨縣中巨摩郡
 山本 めう 賀茂郡岩科村峰
 渡邊 道 沼津市添地町 渡邊正方 ×
 永岡 りやう ×
 永倉 てる (林) ×

第四回實科 十六名 (大正五年三月)
 稻葉 ふく 富士郡田子浦村柚ノ木稻葉國太郎方
 植松 とき 沼津市旭町 植松清方
 後藤 美代 (石原)長泉村下長窪
 綿木 まつ (山本)横濱市長者町二丁目十五中川助三郎方
 鈴木 うめ 沼津市楊原我入道
 須田 美枝 (齋藤)堺市甲斐町東三丁目(日口筋)
 高島 くら 日本基督中央教會
 原町原 高島龜吉方

長澤 きわ (杉山)沼津市上土町 ×
 原川 いし (男澤)神奈川縣橋樹郡川崎町堀ノ内
 宮澤 さい (山本)沼津市福宜ノ後 五二〇
 山中 ふく (近藤)沼津市楊原、上香貫
 山本 千代 (勝又)大分縣大野郡三重町
 吉田 なを (河原畑)東海道大船驛前河原畑壽一方
 渡邊 艶 原町桃里
 増山 もう (向坂) ×
 西家 さく ×

◎第十五回本科 五十八名 (大正六年三月)
 秋田 ふみ (杉山)駿東郡泉村平松
 芥川 とも 田方郡熱海町濱町山脇高女卒
 市河 俊文子 (中元)日本女子大學卒業神戸市板宿町三丁目八番地
 岩崎 きよ (鈴木)東京市府下松並町字天沼六〇 鈴木廣作方
 岩崎 綾子 (西村)東京市外田端區五三〇
 猪目 たけ 富士郡吉原町本 猪目永次郎方
 秋山 貞 (岩瀬)東京市本郷區駒込神明町廿一番地岩瀬豊一方
 稻葉 とし (青木)駿東郡大岡村黄瀬川
 白井 芳子 (奥村)東京府下上澁谷詳細不明
 上田 さだ (大城)沼津市平町上田方

植松 八重 (崎口) 沼津市上香貫二瀬川
 奥田 テイ 沼津市下本町
 岡田 千代 沼津市富士見町
 大嶽りやう (松下) 田方郡韮山村中条
 神部 かね x
 川田 つね (山本) 沼津市城内添地町山本辯護士方
 貝山 もと (今井) 鷹根村鳥谷川口茂之方
 川口 やを 鷹根村鳥谷川口茂之方
 海瀬 すわ (望月) 富士郡大宮町北神田
 栗田 清 (田村) 沼津市下本町
 小池 いと (中村) 東京府下荏原郡平塚村小山三十二
 小池 きみ (小島) 東京市日本橋區船場町一丁目二番地小島正一
 齋藤 菊枝 (鎌野) 駿東郡御殿場町中町
 關 あさ (山口) 沼津市淺間町關吳服店內
 佐藤 みつ 靜浦村志下佐藤彌太郎方
 杉山 かつ (植松) 沼津市六軒町植松正夫方
 杉山 美根 (三浦) 轉居先不明
 高木 こすえ 安倍郡有渡村長崎
 長倉 清 駿東郡片濱村西間門長倉宜一方
 長井 しが 長泉村納米里永井茂吉方

西原 愛 (望月) 安倍郡有渡村長崎
 西山 らく (片山) 駿東郡金岡村西熊堂
 野田 たけ (朝日) 田方郡三島町市ヶ原
 萩原 くら x
 林 明子 (高瀬) 東京市小石川區小日向水道町
 早瀬 ひさ子 沼津市千本海岸
 泥谷 良 (小出) 東京市外西大久保一五二
 古川りやう (關) 住所不明
 深澤 千代 富士郡大宮町茨木
 古谷 末 (岡田) 東京市京橋區木挽町一ノ三
 増田 いね (杉山) 東京府下駒込染井町八五〇
 間宮 さだ子 x 大正十一年五月十九日
 増田 なつ (神尾) 沼津市淺間町神尾正臣方
 旗 はる (田邊) 東京府下大森町馬込村堂寺三八二田邊一男方
 町田 美江 (柏木) 神戸市東出町二丁目三〇九番地柏木豊二郎方
 水町 仙 宮崎縣兒湯郡高鍋字北高鍋
 光林 八重 (鈴木) 田方郡錦田村夏梅木
 宮澤 倭枝 原籍兵庫縣加東郡上福田町四四
 村瀬 敦子 (平岡) 東京市外三河島町字蓮田五三二
 矢田 きみ (鈴木) 名古屋市中區金澤町二九

矢部 豊 (上田) 田方郡三島町宮町上田儀作方
 山本 うめ x
 山本 さい 沼津市楊原下香貫山本ゆう方
 吉田 艶 (新井) 東京府下杉並町高園寺六六四番地
 渡邊 せい 駿東郡浮島村船津
 渡邊 壽子 沼津市楊原上香貫渡邊收次方
 渡邊 さと 女子美術學校卒業沼津市上香貫六八八
 渡邊 りつ 大阪府下西成郡粉濱村

◎第五回實科 二名

水口 乙矢 (高島) 田方郡戸田村戸田
 宇田 ちよ x

◎第十六回本科 七十一名 (七年三月)

足助 たけ (渡邊) 住所不明
 相磯 繁 (田中) 東京市外上落合町四六九田中伴三方
 東 あい (山田) カナダ、バンクーバー市パウエル街三一五
 今澤 智恵 (齋藤) 片濱村小學校附近
 青木 きぬ (田島) アメリカ、キューバ島
 池谷 雪江 沼津市下香貫山ノ根
 今村 さだ (川口) 沼津市山王前川口辰男方
 市川 とも (室伏) 長泉村下土狩

植松 りん (野秋) 東京府下大井町六九八野秋義真方
 内海 美知 東京女子大學卒業、御殿場町二ノ岡
 内田 津多 轉居先不明
 植松美津代 駿東郡原町原八九四
 榎本 幸代 (山田) 盛岡市外山田線第五工區折戸
 小栗壽恵子 (辻村) 靜岡市二番町
 大場 とし (田中) 京都市伊吹川花屋町上ル田中洋方
 小島 文子 (片山) 沼津市後藤松
 大木 つね 沼津市町方町
 小野 多賀 女醫、京都市西七条東野町六十一番地
 岡田志保子 (矢部) 富士郡吉原町 雜穀商
 片岡 ひで (霜山) 東京府荏原郡矢口村蓮沼二二霜山經助方
 片山由喜子 東京府下下澁谷一二八一片山たき方
 岡田 まさ 東京市芝區愛宕下町四十一久保醫院内
 川口 しげ 沼津市三枚橋
 金子 悌 (片山) 沼津市城内町條内金子方
 神谷 えい (多喜) 靜岡市音羽町一八八
 木下 ふみ (鈴木) 廣島市上柳町二十三番地ノ一
 木下 たい (鈴木) 沼津市城内
 小森 ヨシ x 大正十四年十二月十五日死去五一七

後藤 勝代 沼津市八幡町
 佐山 香代 「成瀬」静岡市住吉町
 齋藤はる子 「秋山」南米アラジル、サンタル州
 鈴木 つる 「佐藤」庵原郡蒲原町堀川、佐藤敏方
 杉山 静 沼津市本町四八一番地杉山林太郎方
 杉本 さと 沼津市上土町
 鈴木 富子 「石井」東京府下下澁谷一七八石井利信方
 鈴木 たみ 住所不明
 鈴木 とし 「加藤」駿東郡裾野驛前
 杉山 えん 「堀野」富士郡今泉村今泉
 高田 みつ 沼津市仲町
 田代 きよ 沼津市三枚橋町
 種田 千代 「松岡」岡崎市康生町
 高田 里江 「澤」東京市本郷區本郷五丁目二〇
 田代 政子 高根村中丸田代とう方
 中村 静江 「杉山」静岡市上魚町羽倉時計店裏
 猶井かね子 小山町落合岩田土仲方
 中川 きん 「河野」三島町中島町
 野崎 さい 「吉田」東京市四谷區片町十八吉田一郎方
 野秋 千枝 金岡村岡一色野秋勝作方

野秋 よう 「鈴木」東京市浅草區小島町八
 永倉 とし 「林」東京女子大學校卒業、京都市下鴨上河原町
 坂東 鶴 沼津市上土町
 伴野 利枝 東京戸板裁縫女學校卒、御殿場町新橋
 馬場美智恵 「鈴木」沼津市上香貫市場三馬場貴恵方
 平山 數子 「高村」沼津市横町 平山方
 船山よしの 「芥川」田方郡熱海町
 松井 はる 東京府下上大崎町長者丸江藤捨三方
 増田 たけ 「秋山」三島町二日町秋山文雄方
 宮澤まさ枝 原町原宮澤才次郎方
 村田 静枝 「川口」大阪府下天王寺村聖天坂板橋六八
 森田 茂子 沼津市楊原山ノ根
 湯山 やす 「鈴木」静岡市吳服町一丁目「吳服店」
 依田 喜和 「伊藤」東京市赤坂區青山南町六丁目
 吉村 ふみ 「池田」志太郡藤枝稅務署、池田清方
 渡邊 ふじ 「北條」豊橋市中世古前田五四番地北條圓了方
 横山 隆子 「加藤」大阪府西成區玉出町六七
 西山 ふで 「大嶽」駿東郡鷹根村東推路
 西川富美代 「山田」北海道網走女滿別村
 渡邊登美枝 x

渡邊 たけ 「上遠野」静岡市本通三丁目
 長澤 静子 「大島」駿東郡鷹根村東原
 眞野喜美子 「高田」原町一本松

◎第六回實科 「七年三月」

勝又よしゑ 「勝又」静岡市西草深町さ番地勝亦大平方
 勝又 みつ 深良村一二三勝又清三郎方
 白岩 てる 「榊原」富士郡吉原町
 關 みき 「鈴木」田方郡三島町坂所 鈴木文雄方
 高島 年 原町原 高島龜吉方
 土屋 つね 「清水」x
 長澤 せつ 「杉山」沼津市楊原、市場町 杉山俊一方
 西尾 はる 片濱村東間門西尾早太方
 野秋 政子 「岡本」小山町菅沼字茅沼 岡本一郎方
 濱野 綾子 「飯塚」沼津市追手町
 原 きん 「鈴木」田方郡西浦村足保
 久松千代子 原町原 久松泰吉方

◎第十七回本科 七十名 「八年三月」

安藤 淑子 「浅田」東京府下大井町下蛇窪四七一
 秋元 てる 「高田」駿東郡清水村
 相澤 つる 「小澤」神戸市中山手通二丁目一〇五ノ三小澤治雄方

秋山 好 沼津市魚町

新井 道子 x
 市河 はる 「九鬼」三重縣四日市市
 岩田 悦子 東京府下荏原郡駒澤村上馬引澤二二〇
 石橋 花 「林」神奈川縣鶴見町潮田 林武保方
 岩崎 てつ 「酒井」東京市本郷區臺町七 酒井政吉方
 井出すみ江 金岡村中澤田四二七井出金藏方
 稲葉 せい 沼津市上香貫稻葉千代作方
 飯塚 常子 「小針」田方郡中郷村八反畑
 内田 さだ 「美島」名古屋市中區御器所町北市場、北本源治郎方
 江藤 みわ 「森」女子職業學校卒業東京市外西大久保
 二七五
 江藤 千代 「水谷」沼津市城内添地町
 遠藤 義子 鷹根村西推路
 小澤 静子 「青木」東京府下蒲田町御園二二五青木森次郎方
 大嶽 とし 「高橋」京都府福知山廣小路高橋宗三郎方
 太田 登喜 「堀内」沼津市添地町堀内泓方
 大川 いち 沼津市添地町大川範吾方
 太田 益子 「山本」東京市外尾久町下尾久四二二
 大熊勢都子 「伊藤」東京府下大森町入新井宿五一〇

金田 なみ 沼津市上土町
 神部いさ子 「清」京都市吉田神樂丘寶藏院清文太郎方
 菊池 八重 「森」神奈川県都筑郡田奈村長津田、森病院内
 柳原 あや 「渡邊」沼津市城内西條町
 柳原 千代 住所不明
 齋藤 美子 沼津市八幡町
 笹原 きよ 駿東郡靜浦村志下
 柴田 義 「菊池」日本女子大學校卒、東京市本郷區
 真砂町二〇
 宍戸ハツエ 轉居先不明
 白岩 喜美 片濱村小諏訪白岩藤作方
 鈴木彌春代 沼津市城内鈴木安平方
 鈴木 トシ 沼津市楊原區
 杉本 愛子 「岩崎」沼津市楊原我入道
 城内 ため 沼津市上土町四十六
 鈴木 すゑ 「大木」東京府下大井町鹿島谷三〇八二
 鈴木 ふく 「後藤」京都市外稻荷名古屋銀行舍宅、後藤康三方
 鈴木 久子 「佐野」滿州大石橋宣街七ノ五佐野寅吉方
 鈴木 千代 「田村」×
 千田 もと 東京戸板裁縫女學校橫濱市青木町廣台九二

杉山 さよ 沼津市市場町
 田中九万子 青山女學院卒 ×
 高木 はな 「松本」原町三本松
 田村 せい 沼津市市道町田村太郎吉方
 田代 とも 沼津市城内片端
 高島 ふく 沼津市桃郷町
 田村 くに 「佐藤」名古屋市鍛冶屋町八一
 續 幸枝 庵原郡岩淵町驛通 女子師範二部卒業
 辻 えつ 「直井」沼津市川廓町
 土屋 その ×
 手塚 くら 「原」三島町田町
 富樫 モト 齒科醫 沼津市上土町
 名取 喜子 沼津市追手町
 中村 たき 東京市赤坂區日本赤十字社内
 橋爪 幸 日本女子大學卒業東京市小石川區原町二〇
 間宮 幸子 「清水」東京市神田區淡路町一丁目一番地
 眞島 久子 沼津市淺間町
 宮崎 乙女 沼津市三枚橋町鳥羽山方
 宮坂 歌子 「竹村」女子職業學校卒業東京市赤坂區青山北町六丁
 目四六竹村俊雄方
 水野 澄子 「寺田」沼津市城内水野醫院内

森 まつゑ 沼津市上香貫森標昌方
 諸井 豐子 賀茂郡子浦村
 山本 菊枝 沼津市立男子小學校
 山本 りん 「中村」賀茂郡岩科村
 山本とく子 「柳田」住所不明
 望月 縫子 鷹根村東原
 横山とわ子 「後藤」支那濟南三大馬路緯九路西浪華洋行
 蘆科 坂江 渡米後住所不詳
 和田 のぶ 沼津市出口町

◎第七回實科 十四名 「八年三月」

秋山 ちよ 「岩田」駿東郡小山町仲島瀧ノ前
 稻木 たね 沼津市榮町稻木由藏方
 石塚 ゆき 沼津市下香貫石塚信太郎方
 植田 愛 沼津市楊原區市場植田居年太郎方
 海瀬 あや 「青山」仙台市本町末無青山四郎方
 後藤千鶴子 ×
 小宮山壽々衛 「岩田」東京市外戸塚町宮田三九七
 後藤 壽子 「天野」長野市權堂橫町
 鈴木 みつ 田方郡三島町六反田鈴木康之方
 柳原 はな 沼津市下香貫柳原市太郎方

庄司 えつ 東京市淺草區福井町一ノ十九庄司よね方
 名倉 美代 住所不明
 樋田 さそ 「大嶽」鷹根村推路
 村井 みち 沼津市末廣町村井直八方
 ◎第十八回本科 七十名 「大正九年三月」

淺井 伊勢 沼津市白銀町一七五
 畔柳 恒子 山崎 南滿州鞍山五條町二ノ六山崎健次方
 青木智恵子 「森田」×
 秋山 たき 片濱村松長秋山末吉方
 秋山八重次 「高橋」
 新井 慶 死亡 ×
 飯田 隆子 「茂木」台灣 嘉義鐵道部官舎
 稻葉 勝子 「鈴木」沼津市六軒町鈴木享方
 岩崎 やす 「中野」田方郡土肥村金山社宅中野鐵之助方
 植松 光江 「野村」橫濱市青木町字杉本一五五七
 植松 壽子 沼津市綠新地町
 岡田 フミ 「中尾」東京府下平塚町中延八十八
 小堆 みつ 女醫專門學校卒業 沼津市富士見町
 小澤 靜 「林」東京市外下澁谷伊達跡二七六林敏之方
 小島 とも 沼津市追手町二丁目小島榮治方

大島かねの 片濱村今澤大島由藏方
大木千代枝 大阪市南區日本橋筋五丁目十三
岡本 かつ 「柴田」東京市小石川區關口町一九一柴田
時之助方

奥村 艶子 沼津市港町

河邊 靜枝 沼津市追手町

風間 靜江 「稻葉」田方郡宇佐美村

葛西 靜 北海道日高國沙流郡厚別村峯村

神尾 秀子 「横田」東京府下西巢鴨堀ノ内二十二横田貞雄方

勝田 喜子 住所不明

川 ゑい 「萩野」清水村新宿萩野末吉方

勝地まさ子 「西家」原町西町東京女子美術學校卒業

勝又なを子 「今村」アメリカ、サンデーゴロ五街五四二

川村すみ子 沼津市仲町

木村 八代 「前川」東京府下松澤村赤堤

大竹 靜江「鈴木」静岡女師二部卒、名古屋市南區熱田桃木三二

工藤登美子 沼津市六軒町工藤徳次郎方

坂 富美子 「秋山」明治女子學院卒福岡縣戸島町旭硝子會社住宅

笹原 ゆき 東京府下西巢鴨町宮仲二二〇九

佐久間芳枝 「土平」沼津市永代橋通土平實方

島本 シヅ 沼津市宮町
柴田 利子 「鈴木」清水市江尻町志茂町鈴木澤太郎方
須摩 エツ 大岡村黄瀬川

鈴木 宇多 女子師範二部卒 富士郡元吉原村今井

杉山 鶴子 沼津市宮町杉山孝吉方

鈴木 さだ 沼津市出口町鈴木市太郎方

鈴木 ふみ 沼津市追手町鈴木佐太郎方

杉山 みどり 片濱村西間門杉山安吉方

鈴木 惠津 沼津市通横町藥舖

杉山 富子 「武田」東京市深川區新安宅町十五武田石材所

關 靜枝 田方郡内浦村重須

芹澤 よし 女子美術學校卒業浮島村石川芹澤泰藏方

芹澤 まさ 楊原小學校

高梨 浪江 「桑原」東京市澁谷町下澁谷一三五九

竹村 よし子 「水野」青山女學院卒沼津市八幡町

高須 さゆ子 富士郡鷹岡村入山瀬

高島 幸 片濱村小諏訪高島徹方

武井 のぶ 沼津市追手町

戸田 千代 静岡市詳細不明

山中 俊子 沼津市魚町

若林 君枝 沼津市下本町

◎第八回實科 十六名 「大正九年三月」

秋山 すゑ子 「佐藤」沼津市城内添地町佐藤卯吉方

和泉 はな 沼津市立女子小學校

稻葉 ゆき江 「河野」沼津市六軒町河野武三方

小澤 よし 金岡村岡ノ宮天神ヶ尾小澤萬作方

杉山 さと 「山本」小泉村石脇大場幾太郎方

鈴木 初枝 原籍 鷹根村柳澤鈴木茂重郎方

芹澤 春江 「山岸」東京府下巢鴨町折戸一〇〇七山岸守隆方

坂倉 さよ 沼津市楊原我入道芹澤重藏方

武井 房子 「水野」沼津市上香貫新田四一九

藤原 瀧江 駿東郡泉村公文名

宮内 ゆき 東京市外池袋大上一〇八五廣瀬方

村田 美知 沼津市城内添地町

村松 納 「渡邊」東京市外青山原宿二〇三

山本 てる 「渡邊」駿東郡浮島村船津渡邊惣平方

渡邊 きよ 「廣田」横須賀市沙入四七八

◎第十九回本科 七十名 「大正十年三月」

青沼 みつ 東京女子職業學校師範科卒東京牛込區市ヶ谷台町十一番地

成島 ふく 「小山」東京女子美術學校卒、三島町六反田蓮沼

長倉 ます 「川添」横須賀市中里一七四

野際 清 「杉原」静岡市八宿町三十

長谷川 閑 大正十四年死去

原田 松枝 「松島」神戸市旗塚通三丁目五十二

一杉 花子 原町大塚 一杉兼吉方

一杉 なみ 原町三本松

増山美代子 東京青山女學院專政科卒、片濱村松長

増山 治枝 東京和洋裁縫女學校府下高田町雜司ヶ谷威光五四三
植松玄作方

増田 ふく 沼津市宮町増田彌平方

増山 末子 片濱町松長

宮内 由江 「小澤」大阪市南區鍛冶屋町一九小澤好次方

増田 てい 「綾部」神奈川縣秦野町片町

三井 いち 鷹根村鳥谷

光林 折枝 「露木」田方郡函南村上澤

山越 春子 沼津市西條町山越久太郎方

山田 しげ 沼津市上土町

山田 みね 靜浦村馬込山田六兵衛方

吉田 益子 「田村」沼津市仲町

横山 幸子 沼津市下河原町

赤池 ゑい 沼津市幸町
 淺野 彌生 沼津市市道町
 市河 のぶ 日本女子大學英文科卒業、沼津市白銀町市河彦三方
 市河 ふみ 『生田』沼津市淺間町
 伊藤サチエ 『清水』名古屋市南區瑞穂町寺山、東邦電力大喜社宅
 稲村 たま 駿東郡原町原
 伊奈 厚子 『良成』横濱市戸部町六丁目一九一、良成長正方
 岩崎 うら 『福永』沼津市我入道町岩崎彌太郎方
 伊東 喜代 住所不明
 飯沼 静子 住所不明
 碓井 やす 沼津市三枚橋町
 岡田 幾代 東京府下西巢鴨町向原三、四一一
 榎本 千代 沼津市三枚橋町
 大石 はな 實踐女學校卒 駿東郡原町原
 大井 みつ 沼津市白銀町
 大熊 満子 沼津市白銀町
 小澤 久 『井村』鷹根村東原井村矢三郎方
 遠藤 綾子 沼津市方町洋服店
 磯部 さち 『山本』沼津市上本町磯部方
 風間八重子 沼津市東宮後町

片岡 愛子 『西島』田方郡北狩野村田原野
 勝又ひさ江 『長田』原里村板妻
 木村 倭子 『遠藤』戸板裁縫女學校卒業富士郡須津村増川
 釘宮 幸子 東京市牛込區富久町二〇成女高等女學校寄宿舎内
 城内 艶子 女子職業學校卒業沼津市上土町四十六
 後藤 彌子 『眞野』沼津市魚町旅館眞野金吾方
 小池 よし 沼津市鷗町
 工藤 てる 片濱村小諏訪工藤市藏方
 佐々木廣子 『片倉』東京市外西大久保四〇片倉正明方
 藏納富久子 『山田』沼津市三枚橋町藏納
 小山 花 沼津市立女子小學校
 小林 さと 同 志多町小林倭文商店内方
 齋藤アキ子 同 末廣町齋藤伊平方
 笹原 園子 靜浦村馬込
 佐藤 けい 磐田郡上淺羽小學校
 齋藤 惠津 沼津市澤病院勤務
 白石倭文子 奈良女子高等師範卒業大仁高等女學校
 鈴木 みち 『川西』神奈川縣中原町上丸子町
 杉山 芳子 『杉山』東京府下西大久保三五大森實方
 鈴木 千代 『植西』東京市外千住二ノ二三八植西兼一方

鈴木 三枝 岡山縣上房郡皆部村鈴木重隆方
 鈴木 悦子 靜浦村志下
 齋藤 きく 『田中』沼津市末廣町齋藤岩吉方
 杉山 とみ 沼津市上香貫杉山定次郎方
 齋藤 千惠 沼津市上土町一一七齋藤永次郎方
 竹中 久代 同 市淺間町
 高橋かねよ 同 同
 武山いく代 同 三枚橋西峽間二一三
 樽井タツ子 同 志多町
 土屋 智代 同 同
 辻 さち 實踐女學校卒業島根縣石見國益田町立益田女學校
 土平 廣子 沼津市千本松下
 土佐谷とし子 『小池』三島町芝町小池森藏方
 永田富美子 女子師範二部卒 轉居先不明
 瀬川 登志 北海道室蘭郡輪西村ベシボツチ
 西山 きぬ 大岡村下石田
 中村のぶ江 『廣瀬』東京府下目黒三田一六五
 中島 由枝 『安西』沼津市城内添地町
 長澤 綾子 『栗田』浮島村石川
 長橋 静江 富士郡元吉原村大野新田

野田さくの 東京女子高師理科卒、富士郡田子浦村前田
 原 ちゑ 日本女子大學英文科卒業沼津市下香貫二
 濱野 慶 沼津市仲町二九一
 藤本 キク 『馬服』東京市外代々幡町北笹塚一、一七三
 伴野 はつ 『八幡』静岡市三番町藥店
 間宮 章子 沼津市城内添地三七九
 牧野しづゑ 同 志多町
 望月 ゑつ 駿東郡原町
 森田 榮子 東京府下品川東海小學校
 水口くに子 沼津市追手町
 三井ちる子 『宮内』沼津市追手町大和館
 松平 千代 『久保田』下關市貴船町一、二一七
 森田 龍江 『田村』駿東郡片濱村大諏訪田村角太郎方
 森田 幸子 『足立』伊豆田方郡上狩野村湯ヶ島郵便局
 山田 清子 『山崎』名古屋市西區東重町一ノ一
 山田 君 『平出』三島町六反田井筒屋
 柳下 千代 『稻井』南洋在住
 山田 美代 沼津市幸町山田つる方
 水口 玉子 浮島村根古屋
 山本 花子 沼津市三枚橋

横山 公子 「柳川」日本タイピスト學校卒業、東京府下浦田町在
 横川 みつ 「飯森」東京市外高圓寺九一八鈴蘭堂
 細谷 はる 小山町音淵生土
 吉田 コウ 石塚「支那青島無棣四路十四號石塚武方
 和田 よし 日本女子大學家政科卒業、沼津市魚町
 吉川 光子 「犬塚」東京市麴町區元園町二丁目七
 和田 秀子 沼津市追手町
 和田 貴 沼津立女子小學校
 渡邊 光子 佐藤 富士郡吉原町六軒町佐藤次郎方
 第九回實科 十八名 「大正十年三月」
 足立 ひこ 靜浦村口野五六足立幸藏方
 岡田 きり 泉村平松 岡田虎藏方
 大竹すみ江 原町桃里 大竹儀作方
 大嶽 はな 鷹根村東椎路八八、大嶽郷作方
 小野 きせ 駿東郡原町東町
 後藤 澤子 沼津市通横町後藤紋次郎方
 小泉 鎮子 神奈川縣中郡秦野町今里
 關 やす 「佐藤」賀茂郡下田町紺屋町
 鈴木 ゑい 小泉村佐野二本松
 長橋 なみ 沼津市八幡町勢力方

服部 良 小泉村富澤服部銀作方
 原川 靜江 「秋山」靜浦村馬込秋山靜江方
 長谷川きく 沼津市上土町
 平野 たけ 長泉村上土狩
 増田 こわ 原籍 靜浦村獅子濱増田弦次郎方
 藥科 花 加藤 靜岡市西草澤六五 加藤揮海方
 渡邊 いよ 泉村公文名
 第二十回本科 八十五名 「大正十一年三月」
 青木 靜江 大岡村下石田
 淺井 伊和 沼津市白銀町
 秋山 ふみ 田尾 山形縣山形市霞町
 秋元 まつ 大岡村中石田秋元由太郎方
 秋山 しげ 楊原村我入道秋山音吉方
 池田 あき 沼津市本通 清水湯傍
 石橋 紀子 鷹根村鳥谷
 淺倉 しん ×
 稻井 りい 「茗荷」濱松市在明神野 茗荷佐喜太方
 市川 花子 片濱村東間門
 井口 よし 大岡尋常小學校
 伊倉 とし 沼津市追手町二丁目石屋旅館

今西 英子 小山町藤曲
 岩田 靜子 「知久」東京市外世田ヶ谷町若林七六
 上杉 榮 沼津市追手町二丁目
 漆間 花子 「森」支那河南省鄭州三井洋行内
 江藤 しづ 金岡村東澤田
 太田 友子 沼津市下本町
 小川 靜子 同 上香貫折坂
 片岡 たま 女子師範二部卒業 沼津市上土町
 川口 ツネ 富士郡吉原町本町
 川 みよ 女子師範二部卒業 沼津市楊原小學校
 加藤 靜枝 「小坂」東京府下淀橋角筈
 神尾はな子 ×
 木村 花枝 原町原
 喜多川きみ 沼津市西條町
 木村ふみゑ 原町原 木村斧太郎方
 菊池 春江 賀茂郡南崎村大瀬
 小林 ちか 沼津市追手町小林濱吉方
 後藤 雅子 富士郡須津村中里
 小長谷乙じ 沼津市下小路
 佐野 艶子 女子職業學校師範科卒業 沼津市下小路佐野辰之助方
 縣立三島高等女學校

佐藤かわ子 女子師範二部卒業 富士郡芝富村羽鉾五八七
 篠原 なつ 沼津市楊原上香貫通吉田篠原万吉方
 砂崎ふじ子 「岡山」東京小石川區竹早町九四岡山覺太郎方
 杉山 さき 「加藤」北海道小樽市若竹町五十八官舎
 杉山 たつ 「加藤」大阪市東區北久寶寺町二丁目三五岩田正一方
 首藤 房江 沼津市大門町
 鈴木 やす 金岡村岡ノ宮鈴木常次郎方
 高遠喜美江 女子師範二部卒 沼津市立男子小學校
 高須きよ子 日本女子大學家政科 小石川區同校第二桂華寮内
 但馬スミエ 北海道余市郡余市村澤町但馬八十藏方
 高田 ひさ 沼津市新町高田新太郎方
 竹澤 初子 同 町方町
 田代 島 同 三枚橋町
 高田 春江 原町一本松
 土屋 キヨ 日本女子大學在學
 高橋さだ尾 沼津市上本町
 高辻マツエ 「坂田」鳥根縣美濃郡西見上村西見川水力工事事務所
 高柳 てる 沼津市下本町
 田中 ます 同 川廊町
 高橋 富子 富士岡村二子

田中 よし

x

手塚 はな「風間」神奈川縣鶴見町豊岡卅風間米次郎方

鳥羽山富貴子 「加藤」東京市芝區南濱町十

長澤 雪江 靜浦村獅子濱

成田壽恵子 山脇高等女學校專攻科卒沼津市城内片端

長澤 てい 沼津市東宮後町

奈良橋千恵子 「鈴木」大阪府下豊熊郡豊中 梅香園鈴木銚治方

二宮 芳江 日本女子商業學校卒 沼津市城内片端町

二宮 ふさ 沼津市香貫寺ノ前

萩原 綾 田方郡韮山村原木

久川喜久江 「藤間」熱海町熱海

島山 ムツ 新潟縣西蒲原郡赤塚村北山新田

長谷川貞江 富士郡元吉原村鈴木

古谷 ひろ 富士郡加島村本町

堀内 種子 沼津市後藤松

西山 ゆみ 大岡村下石田

間宮 梅子 沼津市城内添地町三七九

益田 ヨシ 沼津市立女子小學校幼稚園

増山 銀子 片濱村松長

増田 わか 靜浦村獅子濱

松村 重

大正十四年九月x

山崎 ふみ 沼津市楊原下香貫山崎太郎方

山形 侑依 東京藥學校卒 沼津市外大岡村二ッ谷

山本 君子 金岡小學校

山添 美尾 「山田」東京市本郷區駒込林町一七七

八木 あき 「山田」沼津市本通果物舖

山田 かね 靜浦村多比山田糸吉方

山田はなよ 金岡村西熊堂

山本千代子 x

横山 愛子 沼津市仲町

吉川 榮 「富田」滋賀縣甲賀郡水口町富田友三郎方

渡邊 うら 沼津市楊原上香貫渡邊久作方

渡邊 みわ 浮島村船津渡邊惣平方

青木 たく 沼津市仲町青木佐吉方

岩田 和子 御殿場町東山

今井 松枝 長野縣西筑摩郡福島町上ノ段一二九

太田 よし 沼津市旭町

大嶽 いえ 大岡村高田

小野喜久江 鷹根村柳澤

笠間 公古 泉村茶畑

淺沼 絹子 鷹根村椎路

小原 りき 沼津市出口町

嶋田 操 神戸市上筒井通四丁目六十六

鈴木 かね 原町桃里

杉山 トシ 原町一本松

種田 イク 東京市麴町區紀尾井町六ほノ二號

瀧口志津江 富士郡須津村増川

土屋 まさ 沼津市立楊原小學校

山本 ケン 同 上香貫寺ノ前

◎第二十一回 九十九名 「大正十二年三月」

青木 さる x

東 千枝子 「宮田」沼津市通吉田町

相原田鶴子 東京實踐女學校師範科卒業沼津市追手町大仁高等女學校

荒川 己代 沼津市西條町杉山米店內

旭 みと 奈良女子高等師範學校在學 原町原

秋山 淑子 沼津市平町高尾社側

稻村 たね 女子職業學校高等師範科 原町西町

石橋 わい 鷹根村鳥谷

飯田 琴代 東京青山女學院卒業田方郡北狩野牧ノ郷

市川うめ子 沼津市町方市川榮太郎方

稻生 秀子 同 三枚橋町 東京音樂學校

伊東 さく 同 上香貫住吉町

飯田 よし 清水村柿田五〇

犬塚 梅子 朝鮮大邱大鳳町七六 犬塚三郎方

植松茂里子 原町原二四〇

遠藤 久子 鷹根村西椎路

遠藤 政江 沼津市楊原上香貫

岡田千枝子 同 上土町

大原 勝子 富士郡吉永村比奈

岡田じゆん 沼津市三枚橋町

海野 あさ 大岡村中石田

大川 しづ 沼津市我入道

大島 笹子 片濱村今澤

奥山三木枝 原町原

大橋 すみ 原町一本松

川口 みよ 共立職業學校 鷹根村鳥谷

川合 つる 大岡村黃瀬川

加藤 利世 沼津市添地町 加藤松之助方

海瀨 鼎 田方郡西浦村河内

神谷 ゆき 沼津市仲町
 梶 まさ子 同 城内 梶巖方
 勝又 みよし 同 新町四〇九
 川口 たか 原町大塚
 木村八重子 片濱村西間門
 久保田きく 大岡村高田二五一
 熊谷 政子 東京府下北濱川町八八八津守方 三井銀行勤務
 川口 綾子 深良村深良
 蒲 マサ 清水市入江町二丁目一五六番地
 小嶋 よね 大阪藥學專門學校大阪府下北河内郡守口瀧井宮本方
 小池 とし 沼津市鴨町
 河野 育 女子師範二部卒業津沼男子部小學校
 小林 千代 津沼市三枚橋町
 香谷 芳子 原町原
 佐久間清子 沼津市三枚橋町
 齋藤 常 同 上土町
 齋藤かほる 富士郡田子浦村五貫島
 齋藤 濱子 周智郡一宮村五川靜師臨教出靜岡笠西村小學校
 笹山 織江 靜浦小學校
 澁谷 清子 北海道空知郡音江村澁谷農場内

白石 ひで 片濱村小諏訪
 杉本 常子 小泉村佐野一〇一二番地
 杉山 文子 沼津市楊原區我入道
 杉山 頼子 裾野驛鐵道官舎内一號ノ二
 杉山 梅子 原町原八九一
 鈴木 信 靜浦村志下矢田周作方
 芹澤 ひで 靜浦小學校
 芹澤 末子 沼津市川廓町
 芹澤 光 同 三枚橋五五
 谷口 花 三重縣一志郡久居大字幸町
 田畑 菊枝 東京府下日暮里筑波台中川方
 土屋 みや 鷹根村小學校
 土屋 さち 金岡村岡ノ宮
 長澤 梅子 ×
 遠野 貞子 東京府下西巢鴨町池袋大原一三六九
 富樫 キヨ 沼津市上土町一〇五番地
 富田富美枝 靜岡女師二部卒 鷹根村柳澤
 野田 竹 富士郡田子浦村前田
 野崎 つね 金岡村岡ノ宮
 秦 芳枝 三重縣飯南郡神戸村垣鼻

日吉 松美 靜岡女師二部卒 田方郡内浦小學校
 深澤 靜子 「稻垣」富士郡須津村中里
 深澤 長 「中村」田方郡伊東町松原
 古澤 ひで 沼津市上土町
 日吉 はな 田方郡熱海町仲町
 原 よし子 田方郡内浦村重須
 前山 福子 沼津市上土町
 牧野 とめ 同 山王前町
 眞野 實枝 同 下河原眞野龜作方
 松村 秀子 名古屋市東區千種町北島
 増田 桑枝 沼津市六軒町
 増田千枝子 原町原
 増田 きみ 沼津市城内一二〇増田喜和藏方
 水口 みち子 同 追手町
 光林 はま 金岡村岡ノ宮
 宮口 まさ 靜岡女師二部卒業 金岡村岡ノ宮
 水野 松代 靜岡女師二部卒業 沼津女子小學校
 三橋 いし ×
 室賀 美子 沼津市上土町
 諸星 あい 金岡村岡ノ宮

藤井 とみ 東京淺草區町名不詳
 山本 てる 沼津市蛇松山本忠太郎方
 山本 きさ 原町桃里
 吉川 富美 沼津市城内添地
 渡邊 操 駿東郡原町一九八
 渡邊 靜江 東京市四ッ谷傳馬町芹澤方
 渡邊 美代 大阪市區名不詳
 渡邊 勝江 沼津市上香貫新橋
 渡邊 芳子 大宮町
 渡邊 秀子 原町原
 第二十二回 九十二名 「大正十三年三月」
 淺宮 せい 沼津市川廓
 秋山 こう 靜師臨教卒靜浦小學校靜浦村馬込秋山米吉方
 伊海 芳子 靜浦村江ノ浦伊海勘助方
 碓 靜江 沼津市通横町 碓みつ方
 泉名 清子 千葉縣船橋五日市一九二
 井上登志江 沼津市下河原町金子庄太郎方
 市川 たき 靜師臨教卒原小學校 上香貫市川市川太三郎方
 井出ゆき江 富士郡田子浦村宮島
 伊藤 一江 沼津市上土町 博文堂

遠藤 なか 静浦村獅子濱 遠藤作藏方
 遠藤 千代 富士郡加島村五軒屋 遠藤淺次郎方
 小栗 かね 沼津市仲町
 大野 桃江 静浦村桃郷
 小野田しづ江 沼津市志多町 小野田作太郎方
 岡根谷千万 東京女子美術學校 東京本郷區眞砂町三六鹽川正藏方
 岡田 静枝 富士郡加島村平垣 沼津市三枚橋
 奥村 はな 同 楊原 中瀬町
 小野みさを 鷹根村柳澤
 大古田美代 實踐女學校專門部技藝部在學 大岡村黃瀬川
 小野 まつ 小山町菅沼 小野傳次郎方
 川口 光子 清水市入江町二丁目川口喜太郎方
 加藤 久江 沼津市白銀町加藤松之助方
 風間 照子 同 東宮後町
 川口 一子 金岡小學校 鷹根村鳥谷
 片岡 静 靜師臨教卒熱海町小學校熱海町片岡隼登方
 柿島 せつ 沼津市城内 柿島久作方
 木村 きよ 片濱村西間門 木村竹次郎方
 木村 ひさ 原町原 木村斧太郎方
 菊池 貞子 ×

木村 壽子 沼津市七反田木村悌三方
 久保 ふみ 静岡市鷹匠町三丁目五十番地
 栗林 ちる 大岡村南小林栗林喜之助方
 小宮山登志子 實踐女學校澁谷町下澁谷第一寄宿舎 御殿場町深澤
 酒井みや子 東京市京橋區築地南小田原町一ノ三酒井静雄
 佐藤ひさ子 靜師臨教卒 靜浦小學校 靜浦村馬込佐藤榮太郎方
 佐藤 幸子 東京實踐女學校家政科 靜浦村馬込佐藤祐次郎方
 齋藤 けい 沼津市追手町 齋藤梅吉方
 島本 はる 同 下河原島本智圓方
 兼井 ひで 鷹根村東椎路 兼井鐵吉方
 杉本 らん 沼津郵便局勤務片濱村今澤杉本鐵次郎方
 杉本 すゑ 沼津市追手町杉山七藏方
 杉山うめ子 田方郡西浦村江梨 杉山源六方
 鈴木 勝子 第六臨時教員養成所地歴科卒業 横濱市英和女學校
 鈴木 惠美 東京女子美術學校 楊原柿原鈴木益定方
 杉山八千代 楊原下香貫 杉山彌重方
 鈴木あい子 沼津市上土 鈴木庄太郎方
 鈴木 のぶ 同 魚町 鈴木久太郎方
 杉本 徳枝 鷹根村青野 杉本常藏方
 鈴木 はる 山脇高等女學校家事科卒業 御殿場町新橋鈴木正治方

杉山 志津 須山村 杉山權作方
 關は つ子 小山町菅沼 關友太郎方
 田中 八重 實踐女學校 沼津市追手町田中やす方
 田中 久 沼津市魚町 田中惠作方
 竹澤 ふじ 楊原市場竹澤安太郎方
 高梨 佳壽 沼津市末廣町高梨たか方
 武 カン 同 城内武虎次郎方
 高村 コウ 同 追手町
 樽井ます子 同 志多町樽井大藏方
 武井 かの 静岡女子臨教卒 原町小學校 沼津市平町武山幸次郎方
 高島 美惠 原町原 高島龜吉方
 武繩 ミチ 東京女子美術學校佐世保市商業學校
 高橋 ツル 小田原町萬年町高橋久五郎方
 辻 ちか 實踐女學校沼津市川廊町
 鶴矢 秀子 實踐女學校同 城内添地町
 土肥 はる 沼津市下本町土肥正太郎方
 奈須 美津 同 八幡町
 長倉千枝子 鷹根村柳澤長倉詮郎方
 中村 光子 沼津市上土町 靜進堂
 萩原 まさ 同 宮町萩原米藏方

伴野 光枝 實踐女學校御殿場
 久松 文子 沼津市上香貫市場久松房吉方
 藤井 金子 同 平町
 間瀬 富美 同 幸町間瀬宗眠方
 松浦 治 同 平町松浦兼吉方
 益田 榮子 同 本町益田吾助方
 松岡 俊子 同 上土町
 松平 八重 泉小學校沼津市添地町松平勝種方
 宮川 茂 沼津市平町宮川なみ方
 水野千代子 東京山脇高等女學校 沼津市城内水野欽方
 室賀 行子 東京女子大學(東京市井萩村上井草)沼津市條内室賀定治方
 森 きく 浮島村石川 森與作方
 村田 慶 沼津市西條町村田茂作方
 向笠 たけ 同 白銀町向笠傳作方
 向笠 はる 同 上土町向笠文太郎方
 山本 藤子 「川端」沼津市幸町川端方
 八木 榮子 東京神田區紅梅河岸鐵道官舎二號安藤富吉方
 吉田 ゆき 沼津市添地町吉田祐方
 吉川 文子 同 下香貫三五四吉川高光方
 鷺津 せき 同 西條鷺津眞六方

渡邊 京 沼津市宮町渡邊新平方
 渡邊 モト 同 鵬町渡邊松太郎方
 渡邊とし子 同 淺間町渡邊米次郎方
 ◎第二十三回 百二十七名 「大正十四年三月」
 青木 壽恵 駿河銀行沼津市城内町青木余次郎方
 天野 貞 御殿場町御殿場天野伊平方
 淺井 伊志 沼津市白銀町
 秋山 房子 同 下香貫山宮前秋山富次郎方
 淺賀はる子 同 裁判所前
 芦川 美恵 原町原 芦川喜一方
 秋山 光子 小山町小山秋山幸作方
 青木 俊子 東京市日本赤十字社
 秋元ます子 沼津市末廣町秋元金作方
 岩田 芳枝 小山町小山岩田好太郎方
 和泉 しげ 沼津市出口町和泉藤一郎方
 稻生 信子 東京市外荻窪東京女子大學校寄宿舎
 岩崎太代子 靜浦村江ノ浦岩崎好五郎方
 磯部 春恵 沼津市追手町磯部直吉方
 岩崎 さわ 同 城内添地町岩崎つる方
 岩田伊久子 同 追手町裁判所前

飯田 のぶ 沼津市後藤松飯田豊作方
 漆間 くり 楊原上香貫漆間榮方
 青木 とく 沼津市仲町青木佐吉方
 渥美 もせ 同 錦町渥美好一方
 植松 やす 靜浦村獅子濱植松岩吉方
 梅原 みち 沼津市楊原上香貫梅原誠作方
 遠藤 いく 金岡村岡ノ宮遠藤仙太郎方
 大島 その 高根村上小林大島文助方
 大司チエ子 沼津市西宮後町
 小澤 しげ 鷹根村東原小澤柳作方
 岡本 清子 沼津市三枚橋
 大西 千代 小山町字生土大西信次郎方
 奥村 玉枝 沼津市下河原奥村與三郎方
 大川 さだ 片濱村今澤大川伊作方
 大嶽 いま 大岡村日吉大嶽喜作方
 大嶽 やえ 大岡村日吉大嶽彦太郎方
 大嶽 とし 鷹根村東原大嶽佐平方
 片岡美代子 浮島村西船津片岡辰彌方
 川合 きよ 大岡村黃瀬川
 加藤 文 東京小名木川富士紡績會社々宅

勝又 正子 沼津市新町勝又彰三郎方
 勝又 雪江 御殿場町ゴテンバ勝又雄太郎方
 川口あや子 清水市入江町二丁目川口喜太郎方
 川崎 たか 御殿場町御殿場川崎萬作方
 梶 すゞ子 沼津市西條梶嚴方
 川口 よし 同 楊原上香貫川口久吉方
 勝又 久恵 御殿場町二枚橋町勝又幸平方
 菊池 とし 沼津市楊原上香貫菊池關藏方
 城内 静子 女子美術學校沼津市上土
 木村 泰子 沼津市仲町木村道太郎方
 木村 はる 東京市京橋區月島西河岸通り五ノ三
 菊池 はる 片濱村小諏訪菊池久右工門方
 久保 つる 靜岡市鷹匠町三丁目五十番地
 久保千枝子 沼津市城内西條町
 工藤 ちよ 片濱村小諏訪工藤儀作方
 小林 とし 沼津市仲町小林靜雄方
 小原 すみ 同 出口町
 佐々木昌子 東京市牛込區河田町女子醫學專門學校
 佐野 松枝 沼津市城内佐野もと方
 佐藤 りう 同 志多町佐藤忠平方

佐藤まさ子 同 片端町佐藤林作方
 西郷たか子 同 末廣町西郷近仁子
 嶋田みつゑ 同 添地町二三一島田儀作方
 塩川 たか 同 市楊原下香貫鹽川助右工門方
 島津 てい 女子師範二部卒同校専攻科 沼津市城内添地町
 杉山 ひつ 沼津市楊原下香貫杉山甲子郎方
 杉本 二三 同 下小路町杉本傳太郎方
 杉山 隆 金岡村岡宮杉山藤之方
 鈴木武津美 沼津市城内町鈴木幹方東京實踐女學校
 鈴木 うた 金岡村岡ノ宮鈴木留次郎方
 鈴木 幸枝 富士郡元吉原村今井 鈴木世親方 第六臨時教員養成、
 所地理歴史科 沼津市仲町鈴木平八方
 鈴木マヌエ 沼津市仲町鈴木平八方
 杉本 治 田方郡中大見村冷川
 杉山 秋子 沼津市本町四七六杉山傳平方
 芹澤すみ子 同 楊原上香貫芹澤勝平方
 千田 しづ 同 城内町千田泰藏方
 芹澤 ちゑ 片濱村今澤芹澤米吉方
 高橋 靜江 浮島村平沼高橋延英方
 高木 まさ 沼津市鐵道官舎
 田畑 貞子 同 千本中川つね方

樽井 りつ 沼津市志多町樽井喜平方
 土屋 しう 金岡村西熊堂土屋馬之助方
 鈴木 六回 富士郡元吉原村今井鈴木せい方
 土平 秋子 沼津市松下土平初太郎方
 長岡もくえ 片濱村西間門長岡峰松方
 中田八千代 沼津市上香貫中田千代方
 長澤 久代 沼津市上香貫二五六番地二ノ一長澤喜太郎方
 中野 ふじ 同 彌宜ノ後中野六衛方
 長倉 貞子 片濱村西間門長倉豊太郎方
 長澤 よし 沼津市七反田長澤良平方
 中村富士子 小山町藤曲中村兼次郎方
 中村千枝子 沼津市新地
 西原 文枝 原町桃里 西原貞藏方
 仁王 清江 女子美術學校在學東京府下瀬ノ川町西ヶ原一〇六
 西澤 美津 沼津市條内西澤道治方
 西山 初代 金岡村澤田西山清太郎方
 野上しつ子 沼津市片端町野上茂方
 野田 籌子 女師二部卒 富士郡田子浦村前田野田重榮方
 萩原 末雄 小山町菅沼萩原儀三郎方
 肥田 藤枝 沼津市新町

増山美喜子 櫛濱市北方町小湊一二九田中様方
 丸尾 鈴子 沼津市西宮後町丸尾伊太郎方
 眞野 きん 大岡村日吉眞野茂作方
 中野 照子 沼津市西條町 東京青山女學院
 中野 節子 同 上香貫
 松井千代子 東京市麻布區龍土町七四伊藤城司方東京家政學院
 増田 みつ 靜浦村獅子濱増田爲吉方
 三浦もと子 沼津市片端町三浦元徳方
 宮治 愛子 同 眞砂町宮治金藏方
 宮坂 てい 同 平町
 森 茂枝 同 通横町松田つる方
 望月 豊子 同上本町望月虎吉方
 望月 高次 山梨縣西八代郡南楠村 望月泰造方
 望月 てる 「山川」東京市小石川區西江戸川町十二山川忠澄方
 森管 保波 沼津市追手町森田忠治郎
 八木 清子 同 城内八木啓作方
 矢田富美子 沼津市添地町矢田儀平方日本女子大學校社會科
 山本 アキ 同 上香貫寺ノ前山本末吉方
 矢部 美津 同 通横町
 山本 美子 金岡村西熊堂山本喜三方

山本 きみ 原町大塚山本卯作方
 渡邊 はる 沼津市楊原上香貫渡邊久作方
 渡邊 静江 同 楊原上香貫渡邊ふじ方
 渡邊 たか 片濱村今澤渡邊金作方 静岡臨教
 飯田 たけ 満州奉天市琴平町七 河野嘉吉方
 鈴木 とし 沼津市片端町鈴木茂雄方
 片山 常 名古屋中區御器所町吹上二三鷹巢方
 山田 あい 長泉村本宿山田竹二郎方
 森 やゑ 女子師範二部賀茂郡田子村
 中鉢ちこみ 宮城縣玉造郡一栗村
 原 陸子 北狩野村大野 原正雄方
 持田 はつ 小泉村佐野 持田縫之助方
 渡邊喜美子 賀茂郡三坂村蝶ヶ野
 ◎第二十四回 一百三十七名 「大正十五年三月」
 「イロハ順」
 伊藤 春江 沼津市市場町伊藤虎吉方
 伊藤 たか 片濱村東間門伊藤安次方
 市川 美子 片濱村東間門市川令次郎方
 市川 こと 沼津市上香貫中瀬市川兼吉方
 稻葉 すま 同 港町稻葉武重方

稻村 稻子 同 白銀町 静岡臨教
 石川 こと 東京府下大井町龍王子四四〇一
 石井 もと 同 末廣町女子師範二部
 石崎 文 同 追手町日本女子商業學校
 鳥山 吉野 同 上土町淑徳女學院
 原 操 同 三枚橋西狭間青山女學院
 濱野 芳子 同 仲町濱野彦四郎方
 橋本 秀子 富士郡加島村本町
 仁藤 叶代 富士郡元吉原村鈴川
 仁王 糸江 沼津市白銀町淑徳女學院
 西山 都 大岡村下石田西山門作方
 本多 照穂 沼津市八幡町本多綾三郎方
 鳥羽山美佐子 同 平町
 富岡 かよ 小泉村佐野富岡國太郎方
 小笹 とき 沼津市下本町
 萩生 篤子 同 眞砂町女子職業學校
 若林 愛子 同 城内添地町若林一格方
 若林 静江 三島町小中島 若林之八方
 和田 つる 沼津市上香貫内吉田東京實職女學校
 渡邊 千代 原町原 渡邊欣一方

渡邊婦美子 原町一本松 渡邊春吉方
 渡邊 幸 原町原 女子大學家政科
 渡邊 ちる 片濱村大諏訪渡邊與作方
 渡邊喜代子 沼津市上香貫渡邊武方
 脇田 くの 片濱村東間門脇田由藏方
 海瀬 美枝 田方郡西浦村河内海瀬伊右工門方
 川口 こう 鷹根村鳥谷 川口鶴吉方
 勝間田智恵子 印野村 女子職業學校
 勝又 甲子 大岡村木瀬川大古田方精華女學校研究科
 金刺 雪江 大岡村日吉金刺平左工門方
 梶 とし江 小山町落合 梶柳次郎方
 梶本 蝶子 東京牛込區新小川町一丁目五日本女子藥學校寄宿舎
 風間 歌子 沼津市東宮後町 文部省臨教國語漢文科
 吉岡 タミ 小山町藤曲吉岡政藏方
 吉田 勝子 大宮町旭町 吉田清作方
 吉澤 敏子 東京芝區汐留町鐵道官舎二ノ五
 高橋 八重 沼津市魚町 淑徳女學院
 田川田鶴子 同 域内 田川言知方
 田上久米子 同 下香貫山ノ根 淑徳女學院
 高島 うめ 同 桃郷 高島民五郎方

田中 綾子 同 千本 青山女學院
 竹村 うた 同 三枚橋平 女子美術
 土屋 華子 深良村新田 土屋梅吉方
 土屋 まち 沼津市宮町 土屋藤市方
 土屋 文夫 金岡村岡宮 精華女學校研究科
 鶴田 華子 沼津市上香貫西島
 成島三保子 浮島村平沼 成島貢方
 中川 政枝 東京市麻布區森元町一丁目廿七番地
 永野 花枝 靜浦村志下 靜浦小學校
 長倉 はる 片濱村西間門長倉己之吉方
 中山壽々子 沼津市平町 濱松臨教
 長澤 靖世 原町原 長澤信吉方
 長島 松枝 神奈川縣愛甲郡玉川村七澤
 奈木 千代 沼津市港町 奈木幸吉方
 武藤 富美 富士岡村神山 東京小石川區第六天町五高村
 井上 周 富士郡田子浦村宮島女子職業學校
 井出 政子 沼津市城内片端
 野田しづる 同 宮町 女子師範二部
 野秋きる子 三島町伊豆鐵道株式會社内

大熊 きよ 沼津市港町 大熊米吉方
 黒澤 かつ 同 末廣町 黒澤彌三郎方
 栗田 悦子 同 三枚橋平 淑徳女學院
 熊谷 尚子 同 上香貫市場
 山添 公子 同 城内添地 山添三郎方
 山口 俊子 同 鐵道官舎 山口光次郎方
 山岸 玉代 同 新地 山岸清一方
 山本 つぎ 同 追手町 山本吉藏方
 山本 靜江 同 下本町 山本角太郎方
 山本しげ子 富士郡田子浦村鮫島山本半右衛門方
 松井 豐子 深良村深良東京家政女學院
 松井トキヲ 沼津市淺間町 松井進方
 眞野 初枝 大岡村日吉 眞野金太郎方
 増田 幸 靜浦村獅子濱 増田憲太郎方
 増田 貴美 沼津市追手町 増田さん方
 増田 幸子 同 城内 増田喜和藏方
 増田 しげ 靜浦村獅子濱増田由藏方
 藤田 靜子 沼津市城内 女子師範二部
 藤井 貞 同 通横町 藤井仁平方
 福本 晴子 靜浦村志下 靜岡臨教

小池 さく 靜浦村江ノ浦 靜岡臨教
 小林 いよ 沼津市二瀬川東京女子職業學校
 小林 靜惠 深良村深良東京家政女學院
 小宮山靜子 御殿場町深澤
 小島 かつ 沼津市追手町 小島榮治方
 江藤きみ子 金岡村東澤田東京家政女學院
 有谷 めい 沼津市錦町
 荒川 文子 同 城内 荒川儀作方
 安藤 久世 東京市牛込區市谷藥王寺町七十一佐藤胖方
 淺野 俊子 沼津市道町淺野作平方
 旭 敏子 原町原 旭隆之助方
 秋山 まつ 靜浦村馬込 秋山松次方
 秋元 ふじ 大岡村中石田秋元由太郎
 齋藤 とみ 賀茂郡三濱村子浦齋藤久三郎方
 齋藤 妙子 沼津市上土町齋藤永次郎方
 齋藤 歌子 兵庫縣武庫郡住吉村八甲田吉田多子吉方
 佐藤 はる 田方郡修善寺町小學校住宅女子師範二部
 佐藤 花子 沼津添地町 佐藤卯吉方
 佐藤 みち 靜浦村馬込 淑徳女學院
 酒井よし子 原里村川島田森ノ腰

坂倉 時子 静浦村馬込 淑徳女學院
 坂倉 きく 静浦村獅子濱坂倉竹次郎方
 佐野 通子 庵原郡松野村南 静岡臨教
 崎口 愛子 沼津市二瀬川町
 貴島 武代 沼津市上香貫折坂
 水野 静子 大岡村下石田 水野絹次郎方
 宮川 ふじみ 小山町生土 宮川七三郎方
 島田 たき子 沼津市條内町大阪帝國女子藥學專門學校
 遠藤 やる 富士郡田子浦村前田 遠藤彦作方
 廣瀬 さと 片濱村大諏訪 廣瀬勇方
 樋口 敏江 沼津市上土町樋口十三郎方
 久川 貞子 大岡村日吉 久川菊次郎方
 久川 せい 大岡村日吉 久川米次郎方
 森 津留子 沼津市上土町
 森田美津子 同 下香貫 東京家政女學院
 瀬戸 文子 小山町小山 瀬戸春吉方
 芹澤 ゑん 沼津市三枚橋 芹澤十藏方
 瀬尾 悦子 田方郡西豆村八木澤字大久保
 諏訪部 まき 長泉村下土狩 静岡臨教
 杉浦 えい 沼津市上土町 杉浦一馬方

杉山 富子 沼津市旭町 杉山茂三郎方
 杉山 つる 原町大塚 杉山保次郎方
 杉山 乙女 沼津市追手町 杉山七藏方
 杉山 まさ 同 東宮 杉山源吾方
 杉山 筆子 同 我入道 杉山角次郎方
 杉山 みどり 同 平町 東京家政女學院
 鈴木 儼子 富士郡元吉原村鈴木
 鈴木 まさ 御殿場町新橋 鈴木正治方
 鈴木 みゑ 沼津市追手町 鈴木次良作方
 鈴木 博子 富士郡田子浦村前田東京女子職業學校
 鈴木 ひさ子 静浦村獅子濱 鈴木安次郎方
 鈴木 せつ 沼津市仲町 女子師範二部



◎編輯を終へて

○御多忙中にもかかわらず、本誌のために、祝詞、祝詩、祝歌、等を御惠贈下さいました古澤郡長殿、江藤浩藏殿、小山富久殿、淺田かよ殿に感謝いたします。○學校沿革概要、追懷録、同窓會員に關する諸調書を御起稿下さいました間宮先生、六月一日現在の學校諸一覽を態々御調製下さいました笹山先生、表紙のカットを御作り下さいました市川先生、表紙の題號を御揮毫下さいました秋山先生、編輯の上に御援助下さいました間宮、飯田、外川の三先生、本號口繪原版にするために現在職員を御撮影下さいました鴉矢先生、原稿を御寄せ下さいました大井、野村兩先生、に厚く御禮申上げます。

○三百頁を超える本誌の原稿は實に尢然たるものでありました。材料蒐集のために原稿を各方面に求め、或るもの（生徒作）には朱を加へ、順序を正して、各欄に編入し、目次を作製し、編輯を終へるまで、不才な私は夏の夜の短いのを、かこつたことが幾回あつたか知れませんが、これをかうして、あれも加へてと思ふも

のも色々ありましたが、是非夏休み前に發刊したいと存じますので、こゝに朱ペンを搦へて、本誌を世に送ることに致しました。

○六月二十五日地久節の朝、編輯全く成り、原稿を印刷所の手に渡して、ホットした時、M先生が「母の日會に見えた卒業生の二三の人が「先生、記念號はまだ出来ませんか、私どもは楽しみにして待つてゐます。」と話してゐた。」由を語られた。本年卒業のSさんからの「お便りの中にも「記念號を一日千秋の思ひで待つてゐる。」と書いてありました。あゝ、それほどまでに本誌を待つてゐてくれる方々があるかと思ふと、編輯の勞苦も報いられる心地がして嬉しい。唯微かな私の編輯がさうした人々の御期待に沿ひ得ないであらうと遺憾に存じます。

兎も角も本誌の發行部數一千五十。これか先輩各位同窓會員、生徒諸氏の手を送られて、或は明窓淨机の上で、或は綠蔭風薫る邊で緋かれるであります。祝賀の日を偲んでなづかしむ方もあります。昔の思出に微笑を禁じ得ない方もあります。私は色々な想ひを以て、本誌の門出を見送ります。

○本誌は大正十四。十五兩年度校友會報に代へて發行いたしましたので、右兩年度の會報經費は全部本誌の分に充ててあり、又材料も兩年度に跨つてゐます。しかし、本年度は未だ一學期故、採り入れた生徒の作品は比較的少く、「十五年何年」といふ肩書を附して十四年度の生徒作品と區別して、置きました。(高北)



大正十五年七月十七日印刷
大正十五年七月十九日發行

沼津高等女學校内
編輯兼發行人 高北六郎

沼津市城内添地町三〇九ノ一
印刷人 牧田基一

沼津市城内添地町三〇九ノ一
印刷所 沼津印刷所

發行所 静岡縣立沼津高等女學校々友會

終

